

至天門 1 - 3

○目次

至天門 1

天に至る門…………… 8

Intermission, with No Intermission…… 30

Intermission, with No Intermission…… 38

隠し事…………… 80

休日…………… 112

至天門 2

濡れひよこ……………142

連星……………150

C a p t a i n……………170

門からドアまで - from gates to the door -

……………184

千年たっても……………208

至天門 3

コーディング……………216

至天門

1

天に至る門

「俺たちは死なない」

彼はそう言う。俺は答える。

「ええ、俺たちは死にませんよ」

短い言葉の中に込められた想いは、こんなにも遠く、そしてこんなにも傍にある。

俺のそれは確信だけでも、彼のそれは切実さに満ちた祈りだ。

振り返って自分の周囲アイトラドを確認しようとしたその矢先、背中から叩きつけられた衝撃は一瞬にして爪先指先までをも含む全身にめり込み、瞬間、その巨大な衝撃イバクそのものが自分の身体

であるかのように錯覚したほどだった。

俺の身体は飽きて捨てられた檻褻人形のように容易く宙に浮き飛んで、完璧に自己の制動を失った手足をどこか他人事のように自覚しつつ、ああ、そういえば自分の分の防御を張るのを忘れていたな、なんて事をぼんやりと考えたりもする。

彼ひとりを目標として同時に発射された複数の砲撃。高速で彼に迫る、本来は都市の空襲爆撃に使われるその誘導型ミサイルを、たとえ彼であつても生身の今の状態ですべて撃破するのは不可能だと——そう気が付いたのでそちらを先に応戦したら、たまたま自分の身を護る時間が無かった。ただそれだけのことだったのだけれど。

自分が倒した分を考え合わせれば、残った敵方の手勢に彼が負けることはないだろう。頭の中で軽く計算した結果はそういう結論に至り、俺が内心で安堵したちようどその時、ようやく長い空中ダイビングを終えた自分の身体が固い灰色のコンクリートの地面に叩きつけられた。骨が砕けて肉の潰れる鈍い音がする。

激痛などという言葉では言い表しきれない、全身を襲う生体感覚としての痛みは、しかし却って俺の精神の意識を鮮明にした。決して快いものではないが、何度も経験してもう慣れた感覚だ。

「シニストラ！」

俺の名を叫ぶ彼の緊張感に張り詰めた低音は、遠くから響いてくるのに妙に耳元近くでは

つきりと聴こえる気がする。

直後、金属の砕け飛び散る爆音が辺り一面に轟いた。ごく少数の者しか知らないであろう、彼が切れた時によくやる無差別攻撃の音だった。

複数の悲鳴が聴こえる。長く尾を引く、断末魔の。

敵とは言え、俺がこうならなければ、心根は優しい彼の慈悲に救われるはずの命だったはずだ。俺の不手際の為に悲運を辿った幾つかの生命を悼んだ、そのあたりで俺の意識も朦朧としてきた。

自分の場合、こうなったところで死にはしないし、死ねない。まるで鋼を鍛えるかの如くに、灼熱に投げ込まれて焼かれ、氷塊で零下にまで冷やされ、重い鉄槌で叩き打ちのめされるようにして、そうして生体増幅機構ヒューマノイド・エンリッチメント・システムを遺伝子レベルで組み込まれたこの身体は、そう簡単に死への旅路へ赴くことは出来ないようになってしまっている。

久しぶりの重症であるのは確かだが、それでもせいぜいが全治一週間というところだろう。俺はそれを知っている。今までに何度も繰り返してきたことだ。

当然、俺の唯一の、そして無二のパートナーである彼もそれを知っている。理性では、けれども――。

こちらに駆け寄ってきている気配の、だんだんと遠くなる彼の叫び声を聴きながら、大怪我をした自分の履歴の回数に1を加えた。

第七門セブンスゲート研究所を出てから、73回目だった。彼のそれに、まだ15回足りなかった。

『主イエス・キリスト宣り給いて曰く、我は門なり。我を通る者は皆、天に至りて救わるる者なり。』（ヨハネの福音書10-9）

意識は緩慢に、極めて緩慢に覚醒してきた。暗闇の深海から、ごくゆっくりとゆっくりと浮上して、やがて薄ぼんやりと光が自分の周囲から、徐々に広い範囲を照らし出していくように。

Cogito ergo sum. 我思う、故に我あり……普通の人間の、普通の覚醒ならばそうなのだろうけど。

こんな時の俺がいつも、まず一番最初に知覚するのは——彼の意識。彼の能力だ。それが触れているその先が、触れてくる対象が自分である、とそこでようやく自分の意識

を自覚する。自分の意識を探る、自分の能力に触れてくる彼の気配で自分の現存在を知覚する。……いつもそうだった。

彼の存在は、深海の中の光のようなもので、それがあって初めて、自分が存在する、自分がこの場に在る、その事を知る。

彼は俺の横にいる。

自分の意識が覚醒しつつあって、彼が隣にいるということとはつまりあの日から3日か4日くらい。……医療カプセルから出てきて数時間というところだろう。何度も繰り返したことだから推測はおおかた外れてはいない。

耳に当たるシーツの感触は、良く糊が効いていて少し粗い。

彼は俺の横にいる。気配はする。

けれども身じろぎ一つせず、音一つ立てない。

……俺の身体に触れてくることもしない。

そうして彼の意識だけは、徐々に覚醒しつつある俺の意識の表面で、固定されたように、

ぴったりと付いて離れなかった。

指一本動かすどころか、瞼さえまだ開かない自分の軀がもどかしい。

彼を見たいのに。彼の様子を確かめたいのに。

それは何度も繰り返してきたことで。……たとえ目を開かなくても、俺の横で、彼がどう
いう姿勢で、どういう表情をしているか、絵に描くように何もかもが見なくても判るのだけ
れど。

身体が動かない代わりに、意識の手を伸ばして俺のそれから離れない彼の意識に応えよう
とする。

俺の意識の表面で止まったままの、彼の意識を緩慢に押し、呼びかけるように。

実際の身体の動きを必要としないそれすらも、まるで惑星を動かそうとするような甚大な
努力が必要で、歯を食いしばるようにして自分の能力を操作する。

彼は気付いている。俺の覚醒に。

……けれども身動きひとつしない。

そうして身体が動かさず能力だけで彼に干渉しようとする俺を、感情の伴わない意識の手で

やんわりと押し留める。

再び全身の力と意識を脱力させた俺と、彼との上に、また静寂が降りた。

ふつりと意識が途切れる。

気がつけばまた、薄ぼんやりと覚醒している自分を自覚する。

そうやって意識の浮き沈みを繰り返しながら、意識の世界が徐々に拡大していく。

それは何度も繰り返してきた事で、いつもの事で。

まず自分の感覚が少しずつ戻ってくる。指先に触れるシーツの感触。身体の上を感じる毛布の僅かな重み。……三半規管が感じる重力の感覚が、自分の身体の重さとなってベッドに挟まれた背に感じられる。

記録を取り続ける電子機器の小さなノイズ。呼吸はまだごく浅くでしか繰り返せないけれども、その合間にも病院独特の匂いを感じ取れるようになってきた。

身体はまだ、指一本も動かせない。

辛うじて僅かに震える臉を、挟じ開けるようにして無理矢理開いた。

けれどもくらくらと頼りなく漂う視界に写るものといえば、平らに白い無機質な天井だけで。

彼は俺の横にいる。

首も顔もまだ動かせないから、彼が俺の上に動いてこない限り、彼の姿を見る事は出来ない。

そしてこんな時の彼は、それをしない。

……ただじつと、ベッドの横の椅子に座ったまま、俺を見ている気配がするだけで。俺が目を開いた事はそうやって真横で見ているのに、彫像のように硬直したまま動かない。

それは何度も繰り返してきた事で。

……何度も繰り返してきた事なのに。

じわりと滲みるような恐怖感を伴って、焦る。

何度も繰り返してきたことだけれど。

……今度は。

今度こそは、彼が――

感覚の戻り切っていない指に、振るようにして力を込める。自分の望む一割ほど動いてる気はしないけれど、手元のシーツは微かな音を立てた。

声を出そうとして、無様な不明瞭な音が俺の喉から漏れた。それすらも弱々しい細いものでしかなくて、情けなくて、辛い。

気力を搾り出すようなそういう努力は殆ど実際の身体の動きには現れていないのに、呼吸だけは途端に乱れて荒くなる。

ぜいぜいと喘鳴を立てながら、歯を食いしばり、蠕くようにしてなんとか首を彼の方へ捻った。無理な動きをした所為で視界はしばらくの間暗転する。

ちかちかと白黒にフラッシュする視界は、やがて窓からの光を――そしてその光を背にする、彼の輪郭を捉えた。

ブラインドの掛かっている外からの光はごく弱いものでしかないのだろうけれど、それすらも回復したばかりの視力には強すぎて、彼の表情はまだ読み取れない。

それは何度も繰り返してきた事で。

彼がどういう表情をしているのか、見なくても、手に取るように分かるのだけれど。

視界は徐々に、光と影のコントラストを抑えてゆく。

彼の広い肩が、長い腕が、少しずつ捉えられてゆく。

緋色の髪が。

引き結んだ口が。

端麗な眉が。

……紫の瞳が。

俺を見ている。

荒い呼吸を繰り返して身を振る俺を、ただじっと見ている。

死人のような、無機質な表情で。

それはいつもの事なのに。

焦った。辛かった。

彼は彫像のように硬直したまま。

無表情なまま。

髪一本ほどのところで、ぎりぎりのところで、痛いほどに張り詰めている。

彼に近い方の腕を無理矢理動かしたら、まだ回復しきっていない身体に激痛が走って、思わず漏れた悲鳴も音にすらならなくて。

けれどもそんな自分に鞭を打つようにして、力を振り絞って動かす腕はのろのろと緩慢に彼に近づいた。

「……………テラ……………」

彼の名前の一部がかるうじて音になる。

彼はびくりとも反応しない。

震えながら持ち上がってゆく俺の腕を支えることもしない。

張り詰めているのだ。

その心配だけで、俺までがびりびりと痛いほどに。

それは何度も繰り返してきた事なのだけれど。

彼は何日間、こんな状態のまま、俺を見続けていたのだろうか。

辛かった。

何よりも大切な彼に、そんな思いをさせた事が。

自分の身体の痛みより、ずっと。

「……デクステラ……」

辛かった。

ただ一秒でも早く、彼に近づきたかった。

揺れながら伸ばした手が、ようやく、彼の頬に触れた。

彼の肌は、驚くほど冷たく冷えていて。

力が持たなくて腕が下がって、俺の指先が彼の頬を滑った、その時。

彼の紫の瞳が揺れて。

同時に彼の中で、張り詰めていた何かがぶつりと大きな音を立てて切れた気配がして。

彼の目から滑り落ちた一筋の涙が、雫になって俺の指先に降った。

「……判ってる。……俺たちは…死なないと。……判ってる。」

「……………」

「………だけど血塗れになって、床の上に転がるお前を見れば……」

低い低い声が部屋の中に木霊する。

「……今度こそ、お前が死んでしまうのかと思う……」

「……………」

彼は無機質な表情を変えず、ただ透明な雫をその目から零しながら、微かに震えだした声で独り言のように言葉を紡ぐ。

「………ここに運び込んで。お前が助かると知って。………だけどカプセルの中の、青白

い顔のお前を見れば、………お前がもう目を覚まさないんじゃないかと思う……」

「……………クステラ……………」

「カプセルから出てきて、お前の意識が戻れば、俺の事を全部忘れてしまってるんじゃないかと恐くなる……」

「デクス……………」

「お前が俺の名を呼べば……っ…、もう俺の事を愛していないんじゃないかと恐怖する……」

……！」

「デクステラ……」

顔を歪めて、眉根を寄せて、彼が叫んだ。

「俺を置いていくなっ……！！」

痛む身体が何の気使いもなく彼の力強い両腕で乱暴に引き上げられて、必死の思いで継るようにぎりぎりと痛いまでに彼の腕に抱き締められて。

……彼は啼き出した。俺の首筋に顔を埋めて。声を上げて。堰を切ったように。子供のように。

彼が俺を手に入れた、あの日から。
俺が彼のものになった、あの時から。

彼はいつも、……ずっと消えない巨大な恐怖を抱えているのだ。

俺を無くしてしまう事に対して。

彼が俺を手に入れた、それ故に生じた、永遠に続く彼の苦業。

俺の存在が、彼に強いた……苦しみ。

俺がこうなる度に。

何度も繰り返してきた事なのに。

その度に、今度こそ壊れてしまうのではないかと俺が恐れるくらい、彼は恐怖する。俺を無くす事に。

静かに硬直したまま、張り詰めて、気が狂ったように俺の還りを求める。

……なんて哀しくて。
なんて愚かなのだらう。

「……何処にも、……行けるはずなどないのに……」

大声で泣く彼に届くように、力の入らない腕で必死に彼の背に縋って、彼の耳元に口を近づけて、か細くしか出ない声を絞り出す。
泣き続ける彼の身体が、大きく震えた。

「デクステラ……、……あなたが一緒なら……何処だって、天国ですけれど……」

「……」

「……あなたがいなければ、……何も無い。……何処にも、……地獄にも、……天国にだって、
……行けるはずなどないのに……」

「……」

「……デクステラ。……あなただけが、……俺の、天に至る門です……」

「……………シニストラ……………」

気力を振り絞るようにして紡いだ言葉で息は乱れて、一度言葉を止めて荒い呼吸を整える。彼は震えながら、俺の言葉の続きを待っている。

彼の恐怖を否定してくれる、その言葉を。

巧く表情が動かせないから、俺は唇だけで微笑を作った。その俺の動きは、頬で触れ合う彼にも伝わったはずだった。

「……………愛しています。デクステラ。」

俺が生きていて

あなたの横にいて

あなたを全身で覚えていて

あなただけを愛している

それら全てを伝える、その言葉を。

ベッドの上に乱暴に引き倒された。

彼の身体が押し掛かって、乱れたままの呼吸が唇で塞がれる。

強引に深く絡め合わされる舌は涙混じりの味がした。

シニストラ

お前だけが俺の天に至る門

お前が俺の全て

泣き声と激しい愛撫に途切れ途切れながら俺に告げる彼の言葉は、もはや単語としての形をすら成していない。

体力も気力も使い果たして、声もろくに出せず彼の行為にただ翻弄され続ける俺は、朦朧

とする意識の中でそれを聴く。

意識の中に光が見える。

空を向く扉の向こうから。

遙か高みに至る、その光。

あなたが 俺の 天に至る門

お前が 俺の 天に至る門

そうやって死ぬほど体力を消耗して、出て来たばかりの集中治療室に逆戻りになるのも、やっぱりいつもの事で。

事情を知っていて困惑顔の医療スタッフに混じって、ストレッチャーに乗せられ運ばれていく俺の横に付いてくる彼が一番平然としている事に妙に感心したりする。

スタッフ以外立ち入り禁止の治療室の扉をぐるぐる寸前、彼の腕がストレッチャーの動きを止めた。

そうして俺の上に覆い被さり、彼の影が俺の顔に降ってくる。

「……なるべく早く帰ってこいよ」

そうして容赦なく深く口付けてくるのも、やっぱりいつもの事で。

狼狽の度を増す周囲の人々の気配を感じ取りながら、俺は内心で苦笑しつつ、やっぱりいつものように彼の長い口付けに応えたのだった。

Intermission, with No Intermission

夜中まで模擬戦をやつていて、俺も彼も、身体はへとへとなるまで疲れていたのだけれど、そういう時はたいてい彼は、血が騒ぐと言つて可成り非道い遣り方で明け方近くまで俺を抱くのが常だった。

決してそんな彼が嫌いなわけではないのだけれど、疲れ切った身体は休息を欲していて、ベッドに組み敷かれたまま一応緩く抵抗して見せはするのだけれど、覆い被さってくる彼の身体をやんわりと押し返そうとする俺の両手は振じ上げられるようにして彼の片手であつさり頭上のシーツの上に縫いとめられ、それがとても痛むからああ痕が付いただろうな、明日になれば痣が出来てるな、と思うけれど、どうせ手袋の中に隠れるから、——彼もそれを知っていてやるのだろうけれど、何故ならいつも結構開いている俺たちのGOTTの制服の胸元から外へ見えるような痕を決して彼は付けたりしないから——けれどそれ以外の場所にはキスマークなんていう可愛い言葉では済まされなような痣や傷跡が知らぬ間に、あるい

は知ってる間に付いてたりするのだけれど。だけどだからまあいいか、と思ったりする。

そうして目を開けば、彼の燃えるような緋色の髪があつて、そして彼の神秘的な両の紫の瞳が、俺を焼き殺さんばかりに強く睨み付けている。

こんな彼を見るたび、確かに彼の言葉に嘘は無いのだと強く判らされるのだ。——血が騒いでいるのだと。

そうして噛み付くように強く口付けられ、長い間唇を食られる。優しくなど無い。締め上げられたままの手首も、乱暴なキスも。

身体は快樂より痛みを主張する。けれども。

それほどまでに、俺を欲しているのだと。——俺を征服したいのだと。

それが判るから、心が感じて如何仕様もなくなる。掴み上げられたままの両手首の痛みが、覆い被さってくる彼の素肌の身体の熱さが、厚い胸板が、その重さが、哀しいほどに愛おしかった。

彼の唇の滑らされた、俺の首筋が思わず仰け反った。

容赦なく何度も何度も繰り返して抱かれながら、彼のその熱に圧倒されながら、俺を抱く目の前の緋色の髪のこと以外もう何も考えられなくて、けれども頭の片隅はぼんやりと感じる。

彼は……とても、とても情が深いのだ。彼自身の、その身一つでは負えぬほどに。

迸る激情で食い殺すようにして誰かを愛さないと、その内で膨れ上がり続ける激情で内側から破裂して死んでしまうような人なのだ。

彼のその、人一倍強烈な激情を受け取る対象が、遠い昔の、しかし昨日の事のようなあの日以来、どうやら俺の上に永久に固定されてしまったらしいことを——俺は今でも、とても嬉しく思う。

彼の激情を、その全てを受け止めきれるのが、ただ俺だけであるのだと。

そうして彼は、まるで自分自身を愛するように俺を愛する。貪るように。食い尽くすように。痛みも苦しみも、何もかもを越えた所で、そうしてもう二度と離れなくて良いように。

俺はそうされても良いと思っている。彼になら食い殺されても良いと思っている。

けれど決して、本当にそうされてしまうわけにはいかないのだ。俺が食い殺されて死んで、彼とひとつになつてしまつて、そうして死ねば——その後永遠に、その愛情を、激情をぶつける相手を永遠に失つた彼は、自らの暴走する感情に飲み込まれて——そうして決して長くは生きていられないだろう。

だから俺は、彼とずっと二人で、決して一人にはなれない二人で、彼に食い殺されるようにして愛されながら……そうして生きて、彼と並んで歩いて、愛されていく。

その彼の激情を与えられ続けて朦朧とする意識の中、痛い程に挿まれたままの、頭上で固定されたままの両手首を、——お願いですから手を離してくださいと掠れる声で懇願した。

彼に愛される今この時に、両手で彼を抱き締めたかった。——俺も彼を愛しているから。俺の音にならない囁きを受けた彼は、その瞳の奥だけで業火のように燃え盛る視線を俺にしばらく向けた後、唐突に思い切り俺の両手を振り上げた。

突然の激痛に顔を歪める俺の、横に彼の緋色の頭がゆっくり降り降ってきて、低い低い低いあの声を、俺の耳元で囁いた。

「……絶対、離さない」

その抑えた声に込められた、膨大な熱量の激情を全身で受け止めて、俺の意識はそこで途絶えた。

……髪が長くて良い事などあまりない。

もともと女顔の俺は髪を長くすることで優男のようなその印象を余計に強調するだけだったし、ここまで長く……腰を越えるほどに伸びてしまうと、寝ている間に身体の下に敷き込ん

だりして結構痛い思いをする。

そうならないようにベッドに寝ている間は横に垂らせば、一人で寝る場合はそうでもないけれど、彼が共寝をする時などはベッドの端から流れ落ちて先端が床にまで着いていたりする有様だった。

まさにそういう状態の、そんな自分の髪を見ながら目が覚めた。まだ少し弱い朝の光が、薄いカーテン越しにぼんやりと部屋の中を照らし出している。

背中に彼の広い胸板の素肌が密着している。

当然と言わんばかりに、彼の両手はきつく俺の身体に廻されて、足までしつかり絡んでいた。

時々思うことだが、いつも不思議で仕方が無い。

寝ている間は彼だって意識が無い筈なのに、それから彼も俺も寝ている間は普通に寝返りを打っているはずなのに、どうやって彼は朝まで俺を拘束したままでいられるのだろうか？

俺が髪を伸ばしているのは、彼からそう頼まれたからだ。切ってくれるなど。

彼が昨日ほどにその激情を持て余すこと無く、穏やかな時間を一人で過こしてられる時、

彼自身の腕の中に柔らかく抱き込んだ俺の背の、——その状態で彼の視線の先にあるらしい、俺の背から腰にかけての髪を無骨な指で撫でて梳いて、弄ぶのが彼の一等の気に入りらしい。彼は喜ぶ。とても綺麗でさらさらしていて、触り心地が良いと。そんなものかと思うけれど、子供のように嬉しそうに喜ぶ彼を無下に出来なくて、もうずっと長い間切れないままにいる。

慎重に慎重に、絡んだ彼の腕と手と足を少しずつ、少しずつ外していった。

いつものことなら起きてしまうか、さもなければ俺が外しかけていた彼の手が夢現の状態で再び俺を強く抱き締めなおして、時間をかけた俺の努力が無駄になって——なんでもそのことは覚えていないらしく、だとしたら彼は半覚醒で何故それが出来るのか、それも俺は不思議なのだが——とにかく今朝は、珍しくそのどちらの気配も無く、力の抜けた腕が俺のゆっくりとした動きにその身を任せている。

彼の両手両足全部が俺から外れたところで、音を立てないように、慎重にシーツから滑り出た。そつと床に降り立ってから、彼の方を振り返る。

俺を抱いた後、彼はいつも背中から俺を抱き締めるから——そして朝は、そういった事情があつて彼が起きるまで彼から離れられないのが普通だったから、どんなに夜を重ねてい

も彼の寝顔はなかなか見られないのだ。

滅多に無い機会とばかりに、俺は彼の顔を間近で覗き込んだ。

佳い顔をしている。とても穏やかだ。

昨夜の激情の嵐を俺に注ぎ込んで、どうやら暫くは安心して満たされて、その激情を持て余すことなく静かに穏やかでいられるらしい。

彼はそういう風にして俺を愛する。

そうして表向きは、冷静で、沈着で、ややもすると感情に乏しくて——と評されたりするのだ。

自然と、俺の顔に微笑が浮かんだ。

ベッドの周りに散らばっていた自分の服を拾い上げて、それから気が変わって一旦拾い上げた自分の服をまとめて落として、ただし静かに——先に彼の服を拾い上げて軽く畳んで、ベッドの彼の足元に置いた。

それからもう一度自分の服を拾い上げて、彼と迎える朝の準備を始めるために、俺はシャワールームへと歩いていった。

Intermission, with No Intermission

自分の手が空気を切る、その感触で目が覚めた。

見慣れない景色だった。

とりあえず、明る過ぎる。

自分の部屋のカーテンはかなり厚い遮光のものだから、これほどまでに朝の光が差し込むことは決してない。

だからといって昨夜、同僚と飲んで自宅以外の場所で夜を明かすような羽目になった覚えも、戯れに一時の夜を交わす女と過ごした覚えもなかった。

もつともそのどちらもが、多くの戦友を亡くして、そしてただひとりのあいつを手に入れたあの時以来、縁遠くなって久しかったが。

見慣れないものは他にもある。

呆っと開いたままの俺の視線の前で、シートの上数十センチの何も無い辺りをふわふわと頼りなげに漂っている、そのおかしな動きをするそれが自分の腕なのだと、気がつくまでに少し時間がかかった。

どうやら宙を切るこのこれが、俺の意識を覚醒させた原因らしい。

らしいが、やっぱり訳がわからなかった。

「此処は……」

何処なのかと、思わず口に出して疑問を抱いた程に。

「起こしちゃいましたか。すみません」

涼やかな、…無条件の愛おしさで胸が締め付けられるような、その声音。

声より先に響いたはずのソーサーとスプーンの触れ合う音は、少し遅れて理性に了解される。

弾かれるように視線を向けた先、俺の視界に飛び込むのは、俺のカップを手に、ゆっくり近づくと淡い青の色彩だ。

「……朝食の用意をしていたので」

わずかに首を傾げた、その流麗な顔の目元には長めの前髪が落ち掛かり、その髪と同じ色合いの色素の薄い空色の瞳は、真っ直ぐに俺を見つめて優しく微笑っていた。

「……シニストラ」

そうか。

おまえの家か。

自分が目覚めた原因の理由も、見慣れない景色の理由も、そこで全てが判ってしまった。

「そうですよ、デクステラ。……もう朝です」

語尾は少し悪戯めいた、綺麗な微笑みの中に融けてゆく。

唯一無二のこの俺のパートナーは、俺のことなら何もかも理解しているような節があった。

ことによると、俺以上に。

たぶん今も、判っているのだ。

俺の口から、音のない苦笑が漏れる。

今朝、目覚めた時の俺の視界。

こいつの首筋に顔を埋めた時の、青い海の中に漂うような心地よい仄暗さと、夢現にその軀を探しては背中から抱き締める俺の腕とをその光景の中に加えれば、いつもと同じ恒例の目覚めの風景になるのだということ。

「はい」

「すまん、コーヒーか」

澄ました顔でソーサーを差し出すその態度が小憎らしくて、俺は負けずに澄ました顔でカップセットを受け取った後、延べられていたその腕を唐突に引き、軀の傾いだあいつから唇を掠め取った。

不意を突かれて驚いたように慌てて身を離すシニストラの、僅かに朱を刷いた表情に満足してカップに口をつける。

ほろ苦い味が喉を通過した後、出て来たのは満足感の溜息だった。

「相変わらず、おまえの淹れるコーヒーは美味しいな」

嬉しい日常だ。

飲み慣れた、ブルーマウンテンベースのいつもの豆の味も。

お世辞はいいですよ、と平静を装いながら、まだ目元の朱を醒ましきれないおまえの隣も。

…あの夜に初めて聴いた、望郷の曲も。

俺のパートナーであるこいつは、俺のことなら何もかも理解しているような節がある。

それは俺たちが俺たち二人になる、それよりも以前からのことであつたらしく。

こいつの家で、こいつの淹れたコーヒーを出された一番最初の朝には、もう俺の嗜好を把握していて、それが判っていて出したものらしかった。

だから当然のことなのかもしれないが。

…居心地がいい。

肌に来て違和感なく馴染むようなほどに居心地のいい場所を、毎回俺のために無理なく用意できるおまえにいつも感心するのだけれど。

さすがにそこまで俺が満足し切ってしまうと、不意に悪戯を仕掛けられて狼狽える羽目になったシニストラはいささか面白くないらしく、でもデクステラ、あなたの寝顔を久しぶりに見せてもらいましたよ、なんて事を言ってくる。

顔に似合わず負けず嫌いなところのあるこいつに、俺は再び、今度は声を出して苦笑するしかなかった。

「さすがに夕べは、くたくたになるまでやったからな」

そのくたくただとかやっただとかを、シニストラがどちらの意味で取ったかは判らないが。

「そうですね。——昨日の晩は……」

溜息に溶けるような、曖昧に霧散してゆく語尾の、そのリズムのおまえも、俺は決して嫌いではない。

俺のパートナーはただ一人。

俺の全てを受け止められる、そのただひとり。

……俺の永遠の半身の、ただひとり。

「受けてみせる！」

無数に仕掛けた俺の攻撃を、そう叫んで受け止めるその煙幕の中から、やがて無傷のおまへが凜然と姿を顕した時——俺は嬉しさで身震いしたほどだった。

精神が高揚して、こめかみの辺りが強い熱を帯びる。背筋がぞくぞくするほど気持ちがいい。無意識の舌舐めずりを、浮かんでくる笑みを抑えきれなかった。

俺の相手を務められる人間など。おまえしか知らない。

平常時は柔らかさを伴った優しさを湛える空色の瞳が、戦いの今は冷徹なほどに強く強く俺を見据える。

それがただ俺一人に向けられる、その事実が意識に響きすぎて、気が遠くなりそうなほどに最高だった。

俺と向かい合っても。

俺と並んで、共に敵へと向かい合っても。

常に俺の傍らにあつて毅くしなやかに在る、その存在はあまりにも強烈に俺の精神を揺さぶり、疲労の蓄積してゆく身体と反比例するように、一秒毎、俺の感情のボルテージは際限なく高められてゆく。

この存在の。

何もかもを手に入れたい。俺だけが奪い尽くしたい。

果てしなく広がる時間と空間の中、ただ一人だけの俺のパートナーの。

本人も知らないような深いところまでの全てを暴き、全部を曝け出させたい。俺の前に。何もかも判らなくなるほど、滅茶苦茶にしてやりたい。

……俺だけが。

そうしてたいいていそういう日の夜は、そのままの暴力的な激情で容赦なくシニストラを抱こうとするから。

あいつの軀に触れる俺の手を、やんわりと押しとどめようとすると、その抵抗に、

……俺を拒否するのか？

俺の存在を否定するのか？

この俺を？ おまえのただ一人の相手を？

そうして俺の理性が切れる。

ことさら酷く手足を攀じ上げる。

逃げようとする軀を固定する。

苦痛に歪む顔に欲情が煽られる。

零す涙に征服欲が刺激される。

……まだだ。

まだ足りない。

渴望は尽きることを知らない。

抱いても抱いても、まだ欲しくて欲しくて仕方がない。

俺のただ一人の相手の、何もかもを。

長時間の行為に、朦朧とした表情で。焦点の合わなくなった視線で。掠れた声で、細い懇願が聞こえる。

……お願いですから手を離してください。

…許さない。

絶対に許さない。

俺から。この俺から離れるなど。

死んでも許すものか。

絶対、離さない。

そうしてもう既に息も絶え絶えなシニストラを、抱き殺さんばかりに追い上げ尽くした。

「ゆで卵、どうぞ。黄身は半熟です。」

白いコースターに乗せて差し出されたボンチヤイナのエッグカップには、シンプルな緑の葉がひとつ描かれているのみで、食器の持ち主の在りようを良く表している。

「ああ、ありがとう」

手際よく朝食の用意を進めるシニストラは、それでもさすがに気墮るそうな吐息をひとつつけた。

夕べは……ほんと死ぬかと思いましたよ、と、予想していたよりはさっぱりとした口調で言い、死にはしないさ、おまえも俺も、と俺は単なる事実をそれに対して何の気なしに答えた。

……けれども形として発せられたその言葉は、ひとりであの時を思い出させる。
シニストラにも、俺にも。

死者を悼む教会の鐘は、嘘めいた作り物のように平坦に青く広がる空の下でその音を高く響かせていた。

「ただっ広い緩やかな丘は、微風をすらも、その上を通り過ぎるうちに冷淡で無常な風へと変える。

墓参りはもう済ませた。

けれども俺は、墓石の列の間をただ歩いていた。

数歩遅れる足音が俺の後を付いてきていた。

「この宇宙に神とやらが居るとしたら、そいつはよほど寂しがり屋と見える。……くそつたれが」

ささくれ立った俺が独り言のように罵倒を吐けば、優しい声でいけませんよ、と窘める。

キャプテンと呼ばれて八つ当たりをする俺に、少し驚いて口籠もって、けれどもすぐに表

情を和らげる。

振り返ったその少し先、淡い色彩の、長めの髪を風に任せて弄らせる、その凜素とした立ち姿を、俺はただじっと見詰めた。

……生き残ったのが、何故、俺と——こいつなのか。
何故、俺と対になる呼称を与えられたこいつなのか。

最初の頃は頼りなさげな奴だと思っていた。

自分と相合するその名前を聞いた時は、純粹に驚いて、そして内心では不本意に思った。
頭は切れそうだったが——お詔えの副官向きだ——俺の渡り歩くような、過酷な戦場の環境に耐えられるような奴ではないと。

それが何故、こいつだけが、俺たちの——俺のチームの中で、唯一生き残っているのか。

偶然でないことは判っていた。

あの激戦を偶然だけに頼って生き残ることなど有り得ない。

それは間違いなく、こいつ自身の実力だった。

こうやって静かに微笑う、その姿からは想像も出来ない、戦場での在り様を思い出す。

ブリッジの椅子を蹴るようにして立ち上がり、強い眼差しで矢継ぎ早に的確な指示を出す。飛び出す俺の後を一步と空けずに付いてこれる。俺の背中を守るのはいつもこいつだった。こいつの命を救ったことも何度かあるが、こいつに命を救われたことも一度や二度ではない。

11人いた。

今ではもう、ただ2人だけだ。

俺と、

——目の前にいる、こいつだけだった。

キャプテン。

その呼称を、どれだけ口惜しく思ったことか。無力に感じたことか。

自分の実力の無さを、傷付き、倒れ、死んでゆく仲間の姿に、ただただ思い知らされただけだった。

咆哮なげいて悔いた。自分の無力を。

目の前の長髪の男が軽く目を見開いたことで、自分の表情が変わったことを知る。長くもない俺の上着の裾が、吹いてきた強い風にはためいた。

「——シニストラ」

——力が欲しかった。

——もう誰も、俺の目の前で——死なせたくなかったのだ。

逡巡は残っていた。

一人では絶対に無理なことなのだと判っていた。

「けれどもそれを理由に、この男までもを俺の運命に引きずり込むことが——良いのか、悪いのか。」

自分の命など、……力のないままの自分の命など、どうなろうと知った事ではなかった。けれどもこいつを、……死者の列に、新たな1人——こいつを付け加えることになりはしないのかと。

もう誰も死なせたくない。それを望んだ俺が、たった一人生き残った同僚のこいつを、自分の望みのために死に追いやる事になりはしないのかと。

逡巡は解決を見ない。

意思は決定を下さない。

そんな中で俺はただ口を開いた。無意識が選ぶ言葉に未来を任せた。

「おまえの命を、俺にくれ」

——言葉はそう文を紡いだ。

俺は我侷な人間だと思う。

おまえの命を——心も、身体も、尊厳もだ。

——俺に預けてくれないか。

そう言った俺に、

俺の命なんて、とっくの昔にキャプテンに預けてありますよ。
あなたが死ねと仰るなら、俺はいつだって死んでみせます。

微笑つてそう答えたおまえ。

背筋が総毛立ったほど、精神が歓喜した返答なのに。

そのあまりにも迷いのない、澄んだ目が、

——怖くなった。

ヘヴンズドア。

天に至る門。

人知を超越した力か、死か。

いずれかをもたらすと言う、その門の先へ。

おまえがその、人間の泥臭さを一切感じさせない澄んだ目で、真つ直ぐに飛んで行ってしまいそうで——怖くなった。

——地上に繋ぎ止めておきたかった。

夕闇が暮れてから食事を摂りに行った。煉瓦造りのほの暗い照明の、けれどそれが心地良い俺の気に入りの店で適当なメニューを頼んだ。

同僚で副官とはいえ、それまで勤務時間以外の付き合いはあまりなかったから、シニスト

ラは初めて入ったその店の雰囲気をも珍しそうに眺めていたようだった。

「おまえの家に寄ってもいいか」

少し冷えた夜の空気の中、店を出たところでそう言ったら、シニストラは少し驚いたような顔をして、けれどすぐに微笑っていいですよと答えた。

奴の家の建物に着いて、俺を先導して前を歩く淡い色の後姿を、奇妙に感情の伴わない目で眺めた。

シニストラの家の中は明るい色でござつぱりとまとめられていた。同じような白い壁でも家具の類に黒や灰色が多い俺の家と違って、ナチュラルカラーの木目の家具と煩くない程度の温かみのある色彩の小物が適当に配置されている。

「何か飲むものを用意しましょうか。普段はどんなのが好きですか」

「いや、先にシャワーを借りたい」

向けられる視線を合わせないまま俺が答えたら、あいつは一瞬言葉と動きを止めて、

「……では上がる頃に用意しておきますね。ブランデーで良いですか」

と自然な口調で答えた。

「バスローブ、あるか？」

「俺のものでよければ。後から持っていけますね」

返る言葉には澀みがない。

勘の良い奴だから、もう気づいているのかもしれない。

……俺がこれからしようとしていることに。

俺がシャワールームから出たらシニストラがすぐ入れ替わりに入った。彼が歩くと、その頬のわきの髪がふわりと風に浮くことに、擦れ違ったその時初めて気がついた。

ソファの前のテーブルにはアイスペールに入ったロックアイスと貝の形のXOのボトル、それと白い皿にチーズやハムの乗った数種類のクラッカーが用意されていた。

程なくしてシニストラがシャワーから出てきた。

しっとり濡れて雫を零す空色の髪は、初めて見る。

「何か……いつもはどんな曲を聴いていますか？」

目を遣れば、オーディオコンポに入っていたディスクを取り出しながら、曲目の棚を探すシニストラがいた。

「それが聴きたい」

俺は直ぐ答えた。俺のほうへ顔を向けるシニストラに、その手の中のディスクを指してみせる。

「……おまえが普段、聴いているものが聴きたい」

シニストラは少しの間表情を消した。そして持っていたディスクを再びコンポの中に入れて、いくつか操作をした。

ディスクが動き始める。トラック番号は2を示していた。

スピーカーから、弦楽の重奏がゆるやかに流れ出る。やがてさざなみのような山を越えると、丸みを帯びた管楽の独奏が静かに旋律を奏で始めた。

俺は全然そういう方面に造詣がなかったが、シニストラがAD時代のクラシック音楽を普段から好んで聴いているとは何となしに聞き知っていた。ディスクの並んでいる棚にそれらしきジャケットが見える。

シニストラが俺の正面のソファへと戻ってきて、自分用の水割りを作るのを視界の隅に映しながら、その旋律に聴き入った。

一言で言えば、郷愁だろう。

幼少期の印象に、何故か誰もが記憶に残す、どこまでも続く草原の、その夕焼けのようなけれどそれだけではない何かが……初めて知る何か、その何かに向かつていくような懐かしくて、新しい……

「……融合を謳ったものなんだそうです」

穏やかな声のするほうへ、俺は振り返った。

「この曲の作者は——新しく移住した地でこの曲を書いて。誰もが気づくこの郷愁の音色に、人が問うたんです。これは遠くなってしまう故郷を懐かしむ曲なのかと。」

正面のソファで軽く顔を伏せ、語るシニストラは、薄い色のグラスの中身をゆっくり傾けている。

「作曲者は答えたそうです。新しい新天地の音楽を用いて、古い故郷の旋律を謳ったと。……ふたつの異なる文化の、融合を謳ったものだ。」

話し終えたシニストラを、俺はただじっと見詰めた。

……そうして再び、旋律に聴き入った。

弦樂が囁きを止めるようにフェードアウトしてゆく。

ホルンがそれを追うように小さく響いて、消えてゆく。

静寂が俺たちの上に降りた。

俺は静かに立ち上がった。

ゆつくりとシニストラに近づく。

視線を上げるあいつに、俺は手を差し伸べた。

感情を伺わせず見上げてくる色素の薄い目は、やがて静かに伏せられて、……立ち上がった
その視線の先は、俺の掌にあって。

……暖かな細い指の手が、俺の手の上に重ねられた。

軽く握った。

シニストラが視線を上げて、俺を見る。……緊張した面持ちで。
何かを言おうとするように軽く開かれた唇に、俺はゆつくり顔を寄せた。

触れる直前。

掠める吐息の震えに。拒否する訳でもなさそうなのに、口付けを受けるにしても、微妙な顔の角度とか、身体の姿勢。

……そういうものに違和感を覚えて、俺は直前で躊躇した。

一度離れる。

硬く緊張して僅かに見上げる視線は、物問いたげに俺を見つめていた。

「……ひよつとして、初めてなのか……キスも？」

直感で抱いた疑問を口にしたら、シニストラは口をつぐんで、

……僅かに目を伏せて、

「笑いますか？」

かすかに微笑いながら、独り言のように小さく呟いた。

何も言えなかった俺を、シニストラは驚くほど綺麗な空色の目でいちど真つ直ぐ見上げて、それから目を閉じた。

「意図してそうしてきた訳じゃありません。……機会がなかっただけで。」

俺はそれでも言葉が出ない。目を閉じたままシニストラが続ける。

「……今までいろんな女性から、……まあたまに男性からも、そういう意味での付き合いを求められたことは何度かありました……そんな気になれなかったんです。一度も。」
そう話すシニストラは、むしろ淡々といつていいほどに静かな口調で。

「……何故、俺は？」

拒否しなかったのか。受け入れたのか。上官だから？ 何か理由が？

訊く俺の表情は、たぶん呆然としていたのだと思う。

シニストラは瞼を開いて、俺を見上げて。

ふわり、と。

諭え様もないくらい、綺麗に笑った。

「——あなたが俺を求めた時、俺を必要としてくれているのだと知った時——俺はとても嬉

しかつた。とても。……それでは駄目ですか？」

目も眩むほどの、幻暈がした。

この稀有な存在に自分が傾倒していつているのだと、はっきり思い知らされた最初の瞬間だった。

怖がらせないように優しく抱き寄せようとする、自分の手のほうが震えていることに気が付く。

反射的に身を強張らせながら、それでも俺に寄り添おうときこちなく身を寄せる軀が愛しい。

一度髪を梳いて、初めて触れた艶やかなその感触に、俺のほうが緊張する。

顎に手を掛けて、僅かに上向かせて、羽毛のようにそつと唇を重ねあわせた。微かに触れ合う、それでもその瞬間に腕の中の身は撥ねて強張る。

無様なほどに、自分の吐息のほうが熱かった。

止まらない。止められない。

ぎりぎりまで理性のブレーキをかけ続けた。怖がらせないように。怯えさせないように。初めての経験に辛い思いをさせないように。

これは儀式なのだから、おまえの命を俺に繋ぐ契約の。星を地上に留めるための。そう何度も何度も自分に言い聞かせる。

それでも滑らかな肌を愛撫する行為は止まることを知らない。溺れていく自分を抑えられない。

強く抱き締める腕の中の存在の狼狽が、一秒ごとに増していくのを感じる。それでも情愛からの行為を緩めてやることは出来なかった。

「……………つデクステラ！ 待っ……………待ってくださ、…っあ……………！」
とうとう耐え切れずに制止の声が上がる。

「……………何をしてもいいから。」
耳の後ろに直接唇を当て、肌の表面に低い声で囁いた。首筋が撥ねて反る。

「何をしてもいいから。苦しかったら俺の背中に爪を立てても、髪を掴んでもいいから。…
……………だから今は、俺を止めないでくれ。」

そうして俺の存在を、おまえの中へ——刻み込もうと。

まだ4人だった時、シニストラが言った言葉を思い出す。

(たとえ命を失ったとしても、生き残った誰かがその意思を引き継ぐ限り、俺たちは決して死なないと)

……そんなものは嘘だ、と、今なら思う。

死んだらそれまでだ。

全てが無に帰す。

その髪も。この軀も。空色の瞳も。真っ直ぐに俺を見詰める意思も。

墓石の上を通るあの冷淡な風が、痛いほどに証明していた。

(たとえ命を失ったとしても)

…そんな台詞など、二度と言わせたくなかった。

たった一人となった、俺の相手に。
俺の半身に。

……生きる執着を与えたかった。

まるで俗世の何物にも捕らわれず生きているような、迷いなく澄んだ目のおまえに。

それが何であれ、どんな形であれ。

死を躊躇うような、この世への、その生への執着が生まれるのなら、何でも良かった。何でもするつもりだった。

唯一無二のこの俺のパートナーは、俺のことなら何もかも理解しているような節があった。ことによると、俺以上に。

けれどもこの俺のパートナーは、そうやって知った俺のことを俺自身には殆ど言わないから。

だからこの夜に、生きる執着を与えられたのは俺のほうであったのだと、そう気付いたの
はずいぶん後になってからのことだった。

「これ、ブレンドは何だ？」

「ブルーマウンテンですよ。確か少しは他の豆も入ってたと思いますが」

「そうだろうな。俺の好みの味だ。」

酸味のきついだけのコーヒーは好きになれなかった俺は、この頃からよくブルマンを好んで飲んでいた。シニストラが俺の言葉にこりと笑う。

昨夜の濃密な時間を感じさせない、清浄な朝だった。

大きな窓から差し込む、溢れるほどの朝の光の中で、朝食の用意に立ち動くシニストラの後姿を眺める。

シャツの下はかなり酷いことになっていたようだった。

目を覚ました俺の腕の中から抜け出て早々にシニストラは服を着込んだから、あまり良く確認は出来なかったが。

昨夜の、そして目覚めた時の、言葉では表しきれないほどに切ない暖かさを思い出して、俺は横を通り過ぎようとしていたシニストラの腕を掴んだ。

不思議そうな目を向けてくるシニストラに立ち上がって向かい合って、直ぐに抱き締めたから、まだそういう事に慣れていない軀は慌てたように瞬間的に強張って、けれども俺が緩やかに髪を梳いたら、細い軀の緊張は昨日教えた分の量だけゆつくりと解けていった。

それでもどうしたらいいかわからないといった風に戸惑っているらしいシニストラの気配に、

「愛してる。シニストラ。」

そう告げて、迷う隙も与えさせないくらい強く抱き締めてやる。

「……だから死ぬな。何があっても。」

もう、おまえ無しではいられないのだと。

今日、これから向かう場所。

第七門の奥、おそらくは想像の限度を超えるほどの苦難の、その向こう。

天に至る門の向こうまで。

おまえと共に辿り着きたいのだと。

強く重ね合わせた身体越しに伝えた俺の言葉を、シニストラは飲み込むようにしばらく沈黙してから、

「……はい」

と芯の通った澄んだ声で答えた。

「……おまえからは聞かせて貰えないのか？」

いくらなんでも過分な願いだと、我ながらそう思いつつ訊く。昨夜の想いはほとんど俺から一方的に押し付けたようなものだ。

シニストラは俺の胸元で抱き締められたまま、少しだけ、囁くように笑った。

「……帰ってきたら。」

ふう、とシニストラの視線が上がる。

驚いて見返す俺に真っ直ぐに向けられる色素の薄い両目は、穏やかに微笑っていた。

「…帰ってきたら、あなたに告げます。……だから死なないで下さい。何があっても。」

絶句した俺は、多分昨日のようにしばらく呆然として。

それから、その身を思い切り掻き抱いて、深く深く口付けた。

そうして思い出す。

昨夜もこうやって、触れれば触れるほどに溺れていって、酷い痕が残るほどに、手加減が効かせられなかったのだと。

シニストラが作ってくれた朝食を摂りながら昨夜の曲をもう一度リクエストしたら、変調部を過ぎた辺り、管楽のトリルが鳴り出す辺りで、ほら、ここの場面は朝の情景、鳥の鳴き声と夜明けなんですよと教えてくれた。

他のトラックも聴きたいと言ったら、シニストラは少し戸惑い、それでも俺が重ねて強いたら、あいつは困ったように笑って、第1楽章から順に聴かせてくれた。

そこで俺は初めて、昨日聞いた望郷の曲、それ以外の楽章を——戦場へ赴く前に聞くには良くて、戦いから帰って仲間を吊って、：疲れ果てた精神を抱えて帰ってきた夜に聴くにはいささか好戦的すぎるそれらの楽章を、シニストラは昨夜の俺にわざと聴かせなかったのだと——気が付いて。

あまりにも嬉しさに悔しくて、俺はもう一度シニストラに唇を重ねた。

そうして、第七門研究所セブンスゲートの入り口をくぐった俺たちは――

「帰ったら、少しは手加減してあげなさいよ。可哀相に。」

わざわざ見送りに来てくれたプロフェート管理官にそう告げられたその頃の俺たちは、まだシニストラが俺との関係を言及される事に慣れていなくて、――俺たちにしたってその事を思い出したの自体も久しぶりだったし――、シニストラは動揺を抑えようとしつつもやはり狼狽を隠し切れないようだった。

入所当日、俺たちが別々の部屋に分配されて、メディカルチェック詳細な医療検査を受けさせられた時、ああ、まずかったかなと別室の半身を思い遣りつつ、その時点で俺たちの関係がとうに知れてしまったのは判っていたけれど。

さんざん俺たちを引っ張り回してきた日々の、最後の仕上げとばかりにわざわざそれを言ってくる彼女も彼女でなかなか大したものだった。

彼女なりに、それなりの月日を共に過ごした、……もうこの先、会う事もないかもしれないな

い俺たちの永いこれからを思い遣つてくれるのだ。その表面的な態度を裏切つて、彼女の内面がそれほど嫌味でも強気でもないことを、共に在った日々で俺たちもそれなりには判るようになっていた。

俺のほうはというと、シニストラより先にたいていの事には動じない神経が出来上がったから、反撃を試みるくらい之余裕はその時にもうあつて、

「同じ台詞をフォルシュングート研究員にお返ししておきましようか？ お聞きしましたよ、おめでとうございます。双方積年の念願成就だそうじゃないですか」

そう返したら、彼女はしばしの間啞然として、それからあらやだ、どこから聞いたのそんな事、とシニストラ以上に目に見えて狼狽えた。

見送りに同行するはずのミシオネール所長が現れるよりも前、顔を真っ赤にしながら早々に研究所へと引つ込んだその彼女の姿に、俺もシニストラも、思っていた以上に若く初々しい彼女の年相応の姿を初めて見たのだった。

プロフェート管理官……いや、フォルシュングート管理官……そういうえば、結婚後は非常勤研究員になったのだったかな。

あなたは、笑いますか？

俺は今でも、シニストラに手加減できないんですよ。

愛しくて。

……愛し過ぎて。

シニストラの袖口から覗く、白い手首にくつきりと付いた痣を見ながら、意識を現実に戻した。

「朝食、美味かった。ご馳走様。」

「お粗末さまでした」

シニストラがにこりと微笑う。

朝食ひとつですらも、すべて俺の好むものが用意されて。

この唯一無二の、ただ一人の俺の半身であるパートナーは、俺のことなら何もかも理解しているような節がある。

それが時に嬉しく、時に悔しいけれども。

もし、おまえにすらも判らない俺のことがあるとなれば。

ただ。ただひとつ。

俺がおまえを愛する、その強さと深さだけは、おまえの理解を超えているのかもしれない、とそう思う。

どんな時でも、

きつと、おまえを放してやれないと思うほどに。

「シャワーを浴びたら、本局へ行こう。局長をお待たせしてはならない」

「はい。デクステラ」

微笑うシニストラに、俺も笑みを返して。

俺のパートナーはただ一人。

俺の全てを受け止められる、そのただひとり。

……俺の永遠の半身の、ただひとり。

——永遠に愛してる。

隠し事

デパートメントの1階、女性に人気のあるブランドの化粧品店の一角に彼がいるのを見つけたのは、ただの偶然だった。

ずいぶんと珍しいその光景に、俺は足を止めてそのまま遠巻きに眺めた。

GOTT本部に近いこの有名百貨店では、確かにESメンバーと、特に女性陣とはよく会うことがあって、…ああそれと、いつもの女装の種にするのかアンオウあたりはよく居たりして、この間はエクレールとリュミエールが一緒に新色の口紅を試しているのに会ったし、迷っていた最中らしい2色の良否をエクレールに訊かれたりもした。

けれど俺自身のパートナーの彼と遭遇することは、滅多にない。もともと人込みが嫌いな人だ。

だからたまたま、GOTTへ出勤途中の近道に使ったそのデパートで彼を見かけたのは、

本当にほんの偶然だったのだ。

黒を基調としたラフな服装をしていても、身に付けているものは全て見る人が見れば判る質も品も良いもので、強烈な印象の真紅の髪と相俟うその姿は人気店の雑踏の中でもよく目立つ。甲斐甲斐しく世話を焼く女性店員の話もあまり聞いてないのか、時々曖昧に相槌を打ちながら、真剣な表情でショーケースに並ぶ口紅らしき小さな円筒を手を取っている様子は、どこからどう見ても恋人へのプレゼントを選びに来た一流の男性客だった。

ああ、誰か好きな女性でも出来たのかな、とふと思う。

それから我に返って、今自分のしている行為が覗き見に当たること気がついて、酷い羞恥心と自分への嫌悪感とに襲われた。

俺は彼から視線を外して、再び当初のGOTT本部へ向かう道のりを歩き出した。

こういう時、普通は嫉妬とか疑惑とかの感情を抱くものなのかな、とぼんやり考えるけれども。

そういう感情というものは、俺たちの、俺の考えることとはひどく縁遠い事だった。

彼とはもう長く共に在って、軀を重ねるようになってからも随分と…それこそ俺たちの見掛けの姿からは想像もつかないほどに長い時が経つ。

だからと言って俺たちは恋人同士なのかと誰かに訊かれれば、素直にイエスとは云い難い違和感があった。

俺たちはパートナーで、互いの能力を生かすには互いが必要で、それ以前に互いが存在するために互いがどうしても必要な存在だった。

自分たちがこの宇宙に存在すること、その最も根本のところでは俺と彼とは支えあっている。だからといって俺たちは、互いの想いを縛るような約束を交わしたことなど何もない。

彼と共に在ることも、彼に抱かれることも、俺からすれば俺自身がそうしたいからしているだけ。もともと生物学的には不自然な関係なのだ。

だから彼が想いを抱く女性が出来たとしてもごく当然のことだと思っし、むしろ今までそういう気配が容姿も端麗な彼に全く皆無だったのが不思議なくらいですらあった。

相手は誰なのだろうか…まあ、自分の中でだけならこの程度の詮索は許されるだろうと、大通りの歩道を歩きながら思う。

最近新しく会った女性は、と考えて、この間エクレール達から初めて紹介されたあの少し風変わりな受付嬢の班長さんと、彼女の良い相棒らしい副班長さんを思い出す。自然と小さな笑いが俺の口からこぼれた。

「シザリオの声をきくことができるのは、よっぽど嬉しいことがあったときか、……辛いことがあったときだけよ」

珍しく少し寂しそうな、ヴァイオラの表情。

「特殊能力を持った者は、互いのパートナーに対し、必要以上に立ち入ってはならない」

…厳しく低い声の、彼。

徐々に近づく、高く聳え立つ本局のビルを見上げながら、回想は連珠のように、とりとめなく浮かんでは消えていった。

俺より少し遅れて秘書室に姿を現わしたデクステラは、傍目にもずいぶん機嫌が良さそうだった。不思議がったメルクルデイ秘書官が「何か良い事でもあったんですか？」と彼に訊いたくらいには。

彼は適当に口を濁して何事かを答えていたが、どうやら目的の買い物は、上手く行ったらしい。

エクリプス局長から特務を拝命して明日にもアイネイアースを発つ、そういうその日の夜、

彼は自分の家で俺を抱いた。

彼は広いベッドが好きだ。……まあ、仮にも男二人が寝るのだから広いベッドが、というより広いベッドでないと、というところではある。おかげで双方の家には、キングサイズのそれが置いてあったりするのだけれど。

いつもの抱かれ慣れたそのベッドで、俺の肌を滑る彼の愛撫の仕草がいつもとは微妙に違うことに気がついた。

微かな違和感……普段は慣れた手順で進む彼の愛撫が、時折、何かを躊躇うように……いつもは強めに俺を抱く彼にしてはあまり似つかわしくなく、酷く優しく……そうして彼の唇が何度か止まった場所が俺の胸の上だったりしたので、ああ、なるほどと妙に納得したりした。

そうして自分の想像が、大して外れていなかったことを知る。

俺は目を閉じて、瞼の裏の闇の中、俺の上で次第に熱を増してゆく彼の感覚を追った。

誕生日が近いわけでもないし、近くの日で記念日になるような何かが過去にあった覚えもない。

女性のコスメティクスなどは疎くて、そういうものを貰ったところで使い道も知らないし、彼だってそういうことに詳しいわけではないはずで……彼にしては今日の行動はずいぶん思い切ったことだったのだ。

彼にこうやって抱かれるのも、もうそれほど長いことではないのかもしれない。
俺の耳朶を甘噛みする彼の唇を感じながら、そう思った。

彼は広いベッドが好きだ。

だからといって特務中、宿泊先にダブルを指定することは流石になかった。GOTTの名が絡んでいようとまいと、男二人、世間を歩くのにそれなりの体面というものもあるし。それは彼も、十分心得てはいるのだけれど。

「……だからと言って、最上級のスイートを取るのもどうかと思うんですけど。それも特務中ずっと」

軽く頭を押さえながらソファに腰掛ける。

シャワールームから上がってきたまままだ髪をなおざりにしか拭いていなかったが、少し身体が気怠くて面倒だったのでそのままバスローブに滴らせることにした。ソファにもぼたぼた雫が垂れてホテルに申し訳なく思うけれども、仕事が解決して緊張の解けた身体は動く気になれない。

任務が終わって表情のほぐれた彼は、俺の正面で悪戯っぽく笑って、テーブルの上に用意されていたワインクーラーを手元に引き寄せた。彼の今日の夕食の時のものらしい蝋燭に再び火を灯し、デキャンタージュの準備を始めたから、それがこのホテルにチェックインした日あたりから予め彼が手配していたらしい相應の年代物であることを理解する。

「メルクルデイ秘書官が嘆きますよ、明細書を見て」

「なに、文句を言われれば俺の財布から出すさ」

「スイートも：どうせ一人寝をすることは予め判っていたのに」

「一人寝だからせめても、で良い部屋にしたんだ。おまえと寝れるのならどんな狭いベッドだつて天国さ。」

笑いながら彼は白をデキャンタに注ぎ終える。

長く共に在るとはいえ、二人きりの時には遠慮のないあからさまな彼の言葉に、流石に俺の頬に少し熱が上った。

ワインを飲みながら、今日までの短い情報交換の時間では伝え切れなかった顛末の詳細を語り合う。

今回の特務は俺が昼、彼が夜に行動する形で調査を進めて、同じ宿所に——この部屋のとだ——寝泊りしていたとはいえ、任務中ほとんどずっと行動パターンが別々だった。こんなことは珍しい。

無事に特務を果たしてようやくこの部屋に帰り着いて、先に帰ってきていた彼とたったさつき会ったところで、もう夜も更けていたからとりあえずシャワーを浴びて寝る準備をして、こうやって落ち着いて彼の姿をじっくり見るのも久しぶりだった。

彼の姿は…確かに端正で、改めて思う間も無く強く凛々しいといつも俺も思っていた。彼が好意を抱いた女性が誰であれ、彼に思いを寄せられて突っ撥ねる女性はいないだろう。彼が俺の前でこうやって寛ぐ時間が、いつまで続くのか…彼の顔の輪郭を何とはなしに目でなぞりながら、意識の中で緩く未来を辿ってみる。

「……ストラ。シニストラ」

そうして彼に名を呼ばれていることに気がついたのは、顔の輪郭を追っていた俺の目線が彼の口元まで来た時、彼の口が俺の名前を紡いでいるのを目にした時だった。

顔を上げて目線を彼と合わせると、彼は呆れたような顔をして俺を真っ直ぐに見ていた。

「……シニストラ。おまえな……」

そういつて小さく溜息をつく。

何のことか判らない俺の表情は、どういう風にも変えようがなくてただ彼を見た。

彼はもう一度呆れたような表情をすると、ワイングラスを置いてソファから立ち上がり、テーブルを回ってゆっくりとこちらに近づいてきた。

「……判ってるのか？俺が何日おあずけを食らってたのか」

見上げる俺に向かって彼はその瞳に欲情を含ませた微笑を見せ、片手を俺へと緩徐に差し伸べる。

そんなところにはまだ変化が見られなくて、いつもの彼で、俺は小さく笑って彼の手を取

った。

軽く腕を引き上げられて、ソファから立ち上がる。視線の高さが彼とそう変わらない位置になった。

「……一体おまえのほうは、いつになったら俺に夢中になってくれるんだか……」

俺の手を取ったまま、俺の目の前で笑いながらその瞳だけは何となく少し寂しそうに見える彼の表情は、なぜかあの日のヴァイオラのそれを思い出させて。

……そうなのだろうか。俺が彼に夢中でないなどと……そんなつもりはないのだけれど。彼にそう思わせる俺自身が、彼の心移りを招き寄せたりしたのだろうか。

そんなことを考えながら間近の彼の顔をそのまま見詰めていたら、彼はゆっくり上半身を屈めて、俺のバスローブの合わせ目の隙間に唇を寄せてきた。乾きかけて少し乱れた彼の緋色の髪が、俺の顎の下辺りをくすぐる。その感覚が心地良くて俺は目を閉じた。

けれども俺の肌の上を滑り始めた彼の唇は、程無くしてやはり何かを躊躇うようにその動きを止める。

ああ、やっぱり、と思つて、俺は何であるかわからない何かを静かに観念した。

不意に俺の背に回されていた彼の腕が強く引き上げられて、俺の軀は彼へと差し出されるように大きく反った。

次の瞬間、俺の胸元の表面に強い痛みが走る。

俯いたまま俺からゆっくりと離れていく彼は、さっきまでの笑いが信じられないくらい真剣な表情をしていた。

伏せられていた神秘的な紫の瞳の視線が、胸元から首筋をすうっと上がってきて俺の目を見た。

真っ直ぐに向けられる彼の真剣な瞳に、俺の軀が縛られる。

「……一度でいいから、付けてみたかった。見える場所に」

肌の上を滑る指の感覚で我に返る。

彼の指の乗せられている自分の胸元を見れば、

……ぼつりと紅い、彼の所有の印があった。

彼の言う通り、いつもの俺の制服だったらあからさまに外に見えてしまう場所に。

「……どうするんですか。こんな」

明日にはアイネイアースに帰還して、GOTT本局のエクリップス局長のところへ出向かなければならないのに。

彼がこんな、理性の判断に外れたことをするのは初めてだった。

……最初で、最後だから？

その時、彼が笑った。新しい遊びを見つけて無邪気に喜ぶ子供のように。

片手をバスローブのポケットに入れ、片手で俺の手首を掴み、引き寄せた俺の手の中にポ

ケツトからの小さな何かを握り込ませる。

手首を開放されて一瞬あっけに取られて、それから彼に握らされた手を見て、ゆっくり掌を開く。

小さなステイック状の青くて少し冷ややかなそれが、差し込んだ光を弾いた。

口紅？

あの日の？

俺に？ これが何か？

彼を見たら無言で促されたので、俺はステイックの蓋を開けた。

それはやっぱりどう見ても口紅で。

でも何の気なしに捻って先端を出したら、……淡い肌色だった。

「隠し事、コンシヤーと言うんだそうだ」

弾かれるように視線を上げたら、あの悪戯げな顔で俺を覗き込む彼の視線が真正面にあって。

再び動けなくなる俺に、彼は俺の手からそれを取り上げて、今しがた彼がつけたばかりの印の上をなぞった。その色は俺の肌に驚くほど馴染んで、俺につけられた彼の所有の印は完全に消えるほどではないけれど確かに目立たなくなる。

呆としたままの俺のもう片手からカバーも取られて、彼は使ったステイックに青い蓋をし、もう一度俺の手にそれを握らせた。

彼を見て、視線を落として手の中のそれを見て、何も言えないまま再び視線を上げてまた彼を見たら、彼の悪戯げな表情は少し薄れていて、その分真摯な情愛が、真っ直ぐに俺に向けられるその瞳の中に含まれていて。

胸の辺りの何かがふっと軽くなって、その感触はそのまま頸部を上り浮き、無意識の言葉になつて出ていった。

「……これだったんですか。あの日の」

しまったと思って口をつぐんだが、その時にはもう遅かった。彼の端麗な眉根が訝しげにすうと寄せられる。その視線が居た堪れなくて、俺は顔を伏せた。

「……見ていたのか？」

「……………」

沈黙が肯定を彼に伝える。

その事実消え入るような思いだ。

「どうして……俺に何も訊かなかった？」

「……………」

俯いたまま、俺は何も言えない。言える訳がない。

覗き見なんて、そんな恥知らずな行動をしていたなどと。

彼は少し沈黙すると、大きな溜息を吐いた。思わず身が竦む。

けれどふうと影が差したかと思うと、彼の大きな片手が――俺の頬に添えられて、それがひどく暖かくて。

思わず目を上げると、彼は少しだけ哀しそうな、けれども物凄く安心できる還る場所のよ
うな微笑を俺にくれて。

「……馬鹿だな」

そう呟いた。

頭の奥の辺りが、ふうわりと熱く感じた。

驚く彼の顔が風景ごと可笑しな方向に傾く。視界の端で乾きかけた自分の水色の髪がなびく。

何故か見る見るうちに近づく床に届く寸前、強い腕に包まれて引き上げられた。上も下も

判らなかつたが引き「上げ」られた、のだと思つたのは床が俺から離れていったからだつた。彼の目は彼が俺を掬い上げた（掬い上げた、らしい）その瞬間によりいつそう強く見開かれて、そんなに瞼を開いたら綺麗な目が零れ落ちちやいますよ、なんて余計な心配をしたりした。

「……おい、シニストラ。おまえいつ、最後に食事を摂つた？」

「……………はい？」

彼の暖かい腕の中、片手で軽々抱え上げられながら訊かれたことの意味がわからなくて、俺の返事は妙に間の抜けた音になった。

数秒遅れて質問の意味を理解して、何故か上手く回らない思考を動かして考える。

……そういえば最近は何かを食べる気がしなくて。

空腹も覚えなかつたし、必要も感じなかつたので。特務の調査もしていたし。

とりあえずこの惑星に来てから、食べるものを調達した覚えがない。

深く考えることが出来ないまま正直にそう言つたら、彼は絶句した。

「……この馬鹿が!!」

そうして次の瞬間、力強い低音バットンで思い切りそう怒鳴りつけられた。

鼻先何センチもないところで乱暴に身体を掴まれながら彼に全力で怒鳴られると流石に耳と頭がくらくらするが、回る視界の中で辛うじて見た彼の表情は——まるで自分のほうが傷つけられたような痛い表情をしていて。

自分の中で無意識にあの日のことが重荷になっていた、そのことに自分でも気づいてしまい、彼にも気づかれてしまった気恥ずかしさと。それと同時に沸き起こる、俺を思い遣る彼に対する申し訳なさと——愛惜と。

そういうものが入り混じった中で何をどうするのが最良の行動なのか判らず、ただ心の赴くままに彼に身体を凭れ掛けさせたら、彼は少し身じろいで——次の瞬間、強く強く俺を抱き締めた。

熱いほどの腕で強く締め付けられる、その痛さが愛おしい。

しばらくして彼は腕の力を緩めて俺と目を合わせて安心させるように笑ったけど、その笑いは少し強張っていて、軽く俺の身体を支える腕は微かに震えていた。

「……休んでろ、馬鹿。携帯医療器具を取ってくる。」

彼に促されて背後のソファに座った。そのまま横にして休ませようとする彼の手を微笑いながら遠慮する。

俺から離れて荷物のほうへ歩いていく彼の背中を、暖かくなる心で見遣った。

「……全く、おまえは。……………誰かへのプレゼントだとも思ったのか……？」

誰か、というのが女性を指すことは、俺も彼も言わなくても判っている。

俺の無言の肯定に、彼は応急器具を用意する手を一瞬休めて俺を振り返った。苦虫を潰しかけたようなその表情で、彼の機嫌が一秒ごとに悪くなっていることを理解する。

彼は大きく溜息を吐いて、それでも辛うじて俺に一度笑いを作ってみせると、再び俺に背中を向けて準備の手を動かし始めた。

「おまえはいつも、どうして……俺に何も言ってくれないんだ」

その拗ねたような、少し震えた声が可愛かったのだ。

だから俺は可笑しくなって、小さく微笑って、そうして何の気なしに言ってしまったのだ。

「俺があなたのそんなことにまで口を出す権利があるんですか？」

弾かれたように振り返った彼の顔から、見る見るうちに血の気が引いていく。それを目にして初めて、自分がとんでもない失言をしてしまったことに気がついた。背筋を冷たいものが下りていった。

強張った顔をした彼の背後から、ゆらりと気配が立ち上る。殺気すら感じさせるその高熱の、巨大な怒りの気配にぞっとした。

鈍重なほどにゆっくりと立ち上がる、その彼の手からばらばらと滑り落ちるアンプルの、高い澄んだ音を立てて割れてゆくガラスの音が危機感を煽った。

彼が怒らせると怖い人なのは長い付き合いで知っている。けれど普段俺に決して向けられることのないそれが全力で自分を襲う時、それがどんなに恐ろしいかを初めて思い知った。

まだ遙か遠くにある彼の気配から無意識に逃れようと、疲労と恐怖とで縛れる足を動かしてソファから立ち上がる。

急速に俺の背中に迫る彼の気配をふらつきながら避けて、すぐに行き場を無くして追い詰められた壁際に背を当てた。

次の瞬間割れるような音を立てて彼の手が俺の顔の脇の壁に叩きつけられて、俺は強く身体を竦めた。痛みを感じそうなほどの彼の激しい紫色の視線から逸らす事も出来なくて、ぎゅうと強く目を瞑る。

「……………権利、だど？」

彼の低い声は冷たくて、ナイフのように鋭かった。その裏の、隠し切れない圧倒的な怒り。ただ恐くて恐くて仕方なくて軀ががたがた震える。

「——そんな当たり前の事を、よくもそれだけ平然とした顔で訊けるな……シニストラ？」

幻暈がするほどの緊張に縛られ、俺の軀の震えはますます酷くなり、頭の中がどくどくと熱くなる。

自分の名を呼ぶ彼の声がこれほど恐いと思ったことは、彼と共に軍にいた時ですら無かつ

た。

「——っ申し訳ありませんっ——!!」

無言の彼の圧迫感に堪えられなくて俺は混乱する頭で口走った。

途端に彼の右手の硬い拳が俺の顔の真横の壁を叩き壊し、飛んだ小さな破片が俺の頬を掠めた。

ぎりりと音を立てて壁に爪を立てる彼の腕も俺に劣らず震えていて、その激しい振動が壁伝いに伝わってきそうなほどだった。

「……俺は何度おまえに愛してるって言った？」

「……すみませんっ……」

「……愛してると。おまえが必要だと。おまえだけだと。……何回言った？ 何度伝えた？」

「……ごめんなさい……」

「何度おまえを抱いた？ 何回おまえに想いを注いだ？ 何回？」

「ごめんなさいっ……」

「いつになったら……っ!」

吐き出すように彼は叫んだ。

「いつになったら、俺の存在はおまえへ届くんだった……!!」

両腕を掴まれて、床に叩きつけられた。

彼の両手と両足と、視線に、俺の全身が縛られる。

目を見開く今の俺は、たぶん恐怖に怯えた顔をしているのだろう。

「……………互いのパートナーに対し、必要以上に立ち入ってはならない？」

「……………」

「笑止だよな」

「……………」

「……おまえが一度だって、俺をその心の中に立ち入らせてくれたことがあったか？」

「……………」

「俺の存在を……………」

「……………」

耐え切れなくて目を閉じた。

強く瞑った瞼の裏に、懐かしく白い光が溢れる。

（情が薄いわけではない。ただその表出に乏しい。思う事を伝えようとしない。）

昔、誰かにそう言われた事がある。

逆光の白い光の中を歩く姿。

（……それがいつか、取り返しをつかない誤解を生むかもしれない。……気を付けろよ。）

そう俺に言ったのは誰だったか、思い出そうとして目を凝らせば、

……白光の中の、緋色の髪。

それがまだキャプテンと呼んでいた頃の、エストランド時代の彼であったことを思い出す。

目を開いて見た彼は、まだ身体が竦むような恐ろしいほどの怒りに苛まれているのに、
……とても哀しそうに見えた。

彼を手酷く傷つけたのは俺なのだ。

何よりも大事な人なのに。

力任せに捻り上げられた手首に、顔が歪んだ。

「いいかげん覚えろ」

「……………」

「いいかげんに、俺を覚えろ。俺の存在を」

「……………」

「俺のことだけを考えろ。俺だけを感じろ。……俺だけをその中に満たせ。おまえの中に」

低い彼の声は怒りの気配に満ちていて、触れてくる彼の指すらまだ恐ろしくて仕方なくて、痛みと恐怖で身体が震えるのに。

……目の奥がじわりと熱くなって、
… 軀が熱くなってくる。

「泣きたいんだろう？」

「……………」
俺は微かに、弱々しく頷いた。

「泣けよ。……痛くしてやるから」

「……………」
「酷くしてやるから。泣けよ。……俺の腕の中でだけ泣け。」

「……………」

予告どおりに、その夜の彼の抱き方は優しいほどに酷くて痛かった。

彼の腕の中で俺は信じられないくらいに何度も泣いた。どこにそれほど涙の泉があるのかと思うくらいに。

抱かれている最中、俺の中は彼だけで一杯になって、彼のことしか考えられなくて、それでも彼は満足せず、俺は彼に導かれて何度も彼の名を呼ばされた。

指一本動かすのも億劫になるまで抱かれ続けて、抱かれて気を失って、抱かれる感触で目が覚めて、それでもまだ抱かれ続けた。

……シニストラ。

……俺のシニストラ。

朦朧とする俺の意識に彼が囁く。

覚えさせられた俺の軀が、もう何度も繰り返させられた名前を紡ぐ。

……デクステラ。

……デクステラ。

……デクステラ。

……俺のデクステラ。

そうして彼は、ようやく、……ようやく安心した顔を俺に見せた。

けれどそうやって眠って朝起きて見てみれば、結局見える位置につけられたのは最初のあの1つだけで。

それがどうしようもなくなくて俺は小さく小さく笑って、それから朝の光の彼の暖かい腕の中
でもう一度泣いた。

栄養失調寸前の身体にそういうことをされると、携帯医療器具メ
ディカル
キッ
トを使ったところで予定を1日延ばしにする他はなく、アイネイアースへの帰還と本局への帰参は1日遅れることになった。

本局ビルに入る手前のところで、彼は俺に向かって何とも言いようのない顔を向ける。

「いいんですよ」

笑って答えたら、彼は少し戸惑って、それから表情を変えて、あの強くて明るいいつもの笑いを俺にくれた。

隠さないままの、俺の胸元の痕。

受付のエクレールとリュミエールは揃って真っ赤っ赤のゆでだこになった。

秘書室でメルクルディはティーポットを取り落とし、間髪なくヘアデクスセラが床に落ちる前に受け止めたけれど1回分のFARTNUM&MUSONのダーズリンは駄目になった。お湯が入ってなくて良かった。

流石に俺たちも、エクリップス局長に「あら。まあ。うふふ」と艶然と笑われた時は2人も少し顔が赤くなっていたが。

報告が終わって局長室を出たところでシザリオとヴァイオラに見つかってしまい、指を指して数瞬口をぱくぱくさせたヴァイオラがやがて「……………デクちゃんシニちゃん、ずるーい！」と言ったけれど、シザリオの平穩のためにもその意味は深く考えないことにする。

「これから先、使う機会があるのかな」

本局ビルを出て気候の良い快晴の日の下、俺の手の中から青い円筒を取り上げた彼が眺めながら呟く。

「さあ、どうでしょう」

あなた次第だと思えますよ、と俺が言ったら、そうだな、と彼が笑った。

俺はひとつ、彼に隠している事があった。

それは俺が第七門研究所セブンスゲートで、『ウエネヴァ』の能力に目覚めた時の事だった。

もう駄目かもしれないと……………けれど隣にいる彼を置いて死ぬ訳にはいかないと。そう思っ

て目覚めた時。

星のように煌く光が、しかし昼のように強い白光の中で一面に広がる視界の中、俺は初めて、そして今日に至るまでのどの時よりもはるか遠くまでの未来を見通したのだった。

そこに映る光景は、けれどただひとつだけで。

あなたが俺の隣で笑っている、ただそのひとつだけで。

その時俺は、どんなに遙かな時間が過ぎ去ろうともあなたが俺の隣にいる、そのことを疑いようのない未来の事実として知ったのだった。

俺がどんな時にもそれほど容易く感情的になれない理由は、突き詰めていけばここにもあるらしかった。

たとえどんな事が起きても、何があろうとも、彼が俺の隣で笑っていてくれればそれでいいから。

それだけで良かったから。

けれど今まで、このことを彼に言ったことはなかった。形として発された言葉は時に枷にも制約にもなりうる。間違いない未来を知っているのに、そんな矮小なもので彼を縛りたくはなかった。

けれど、もし彼がそれを望むのなら。

俺の胸元の印と同じように、相手から縛られる証を自ら望むのなら。

……今度、彼の記憶に俺の印をつけて。

そうして俺だけの隠し事を、俺たち二人だけの隠し事にしようかと。

俺の隣で笑う彼に、俺も笑って応えながら。

そう、思った。

休日

「じゃあ、今から行きますね」

空色の姿の綺麗な顔がモニターの向こうで優しく笑って、サイドテーブルの上の映像電話ヴィデオフォンが切れる。

ブラックアウトした画面をしばらく見続けた後、俺はソファに大きく身を投げ出した。だらしなく手足を伸ばしたまま、視線の先の白い天井をぼんやり眺める。

胸の上で手を組んで、それから目を閉じた。

今しがた消えたばかりのあいつの姿を、ひとつひとつ、……その姿を意識でなぞって、目の前でその完璧な複製レプリカの彫刻か粘土細工を作り上げるように、ひとつひとつ、思い出していく。

色素の薄い綺麗な髪。割と量が多いから額や頬にすぐ落ちかかる。触ればさらさらと手触りが良いし、……その向こうの額や頬に触れられる。

白い肌。きめの細かい手触り。暖かい肌。優雅なカーブを描いて唇や首筋に続いていく。片手の親指で唇をなぞって、もう片手を首筋に這わせれば、あいつはくすぐったそうに、……そしてとても幸せそうに、俺に笑いかける。

背中と腰を強く引き寄せて、全身を密着させるようにして抱き締める。

……もうすぐ逢える。

もう少ししたら、あの奇跡のような存在を、俺の生身のこの手で、この身体で実感できる。その暖かさも。鼓動も。笑顔も。

もうすぐ逢える。

もうすぐ。

もうすぐ。

良い天気、いつもの平和な休日だった。

目を開けて天井から視線を下げる。

いちおう部屋の中を見渡してみようけれど、シニストラが来るまでに用意しておく物もこれといって無かった。見慣れた自分の部屋はモノクロを基調に色をまとめていて、床の上は適当に物が片付いて、適当に物が散らばっている。

何度も互いの家を行き来して、いまさら特別を気取るような間柄でもない。それなのに。あいつが来る。あいつを待つ。

その間何が出来るかといったら、何も出来ない。出来るわけが無い。

ただ早く逢いたくて逢いたくて、もうすぐ逢えるあいつのことで頭が一杯になって、何もやる気が起きないままただ時間の過ぎるのを待つ。

早く時間の過ぎることを祈る。1秒でも早くあいつを抱き締められるように。

煙草なんていうアームブラスト監査官のようなA D時代の悪習は持ち合わせていなかったから、テーブルの上のミネラルウォーターのペットボトルを手に取り、キャップを捻って蓋を開けて飲んで、再びボトルに蓋をして、テーブルの上に戻して。そんなことをしながら間を潰す。

俺たちが一緒に暮らしていないのにはいくつか理由があった。

互いの生活に干渉し過ぎないとか、世間的な体面だとか。

けれどそのどれもが些細な理由で、結局のところはなんとなくそうしているというのが一番正しいところであるようだった。

こうやってあいつが俺の家に来るのを待つ、その間の焦れたいようなこんな時間も、決して俺は嫌いではなかったし。

けれどさすがにこの間は俺も激怒して、もうおまえを独りにしない、一人では暮らさせない、一緒に住む、としばらくの間は言い張ったものだが、本人もかなり反省していたらしく、消沈した顔ですみませんと言われるとそれ以上強く言い募るのも気が引けて、結局うやむやのまま話は立ち消え、お互い元の生活に戻っていた。

そして休暇の日はほとんど必ず——前日に夜を共にしていなければ——、どちらかがどちらかの部屋を訪れる。そういう習慣になっていた。

それももう随分と前からの習慣なのに、こうやってあいつを待つ間の、俺の意識の中がその存在だけに占められていくような、その熱い感触や鼓動の高鳴りは、今もって消えることも慣れることも無い。

来た。

いつもシニストラがこのマンションの1階のエレベーターホールに来たあたりでだいたい判る。足音や物音でというよりは気配で——というより、ESメンバーのパートナー同士に起きる能力の干渉で感じているらしかった。意図して探れば俺たちの能力の性質上、あいつが何処にいても判るが、近くにいればことさら意識しなくてもその存在を肌で感じる。

エレベーターが1階に降りるまで、平均で約12秒。ドアが開いてあいつが乗って、上がってくるまで約15秒。エレベーターから降りる気配。

このフロアのエレベーターホールから、俺の部屋のドアの前まではそう距離がない。あいつの歩幅で約9歩。その頃になると生身の耳でも足音が聞こえてくる。あいつみたい

に身のこなしの佳いやつは、足音にもそれが出る。
俺はそろそろ立ち上がる。玄関に向かう途中でチャイムが1回鳴る。それから指紋照合の電子音。ちゃんとシニストラの分も登録してあるのに、親しい仲にももの礼儀とも思っているのか、必ず先に律儀にチャイムを鳴らすんだ、あいつは。

俺が玄関に立って、一瞬遅れてドアが開く。

ジーンズに白いシャツのシニストラ。俺の姿を見てにこりと微笑う。

もうどうしようもなくなつて、腕を引き寄せてドアが閉まるのももどかしくその軀を抱き締めた。

たまには普通に出迎えようと、毎回のよう思っているのに。今日も失敗した。腕の中に収めてしまえば、嬉しそうに綺麗に微笑う暖かい身体誘惑には逆らえない。キス1回。

触れるだけの口付けはすぐ離れた。一度にすべてを楽しんでしまうのは勿体無さ過ぎる。しなやかな軀を抱き締める腕からもとりあえず解放して、両手で白い頬を包んだ。色素の薄い空色の虹彩。その中心の瞳だけが宇宙の果ての深遠の色をしていて、俺の意識を吸い込むかのように優しく俺を見詰める。

暖かい微笑を作る顔の形を、俺はひとつひとつ指でなぞっていった。額の形。眉の角度。柔らかい頬を親指で撫でたら、シニストラは甘えるように目を閉じた。

伏せられた長めの睫毛。指先で梳くようにしてそのカーブを辿る。形のいい鼻。目の下の僅かな窪み。そこに指を滑らせる。甘い隆起の柔らかさだ。

両頬を包んで、9本の指でその形を記憶するように感じ取る。余った右手の親指は、桜色の唇の上へ緩やかに滑らせた。

僅かに開いた唇の形を何度も辿っていたら、シニストラのゆっくり吐いた暖かい吐息が指先に触れた。

もっと知りたいと思う。

もっと近いところで。もっと正確に。

目の前の、この奇跡のような存在の、何もかもを。

両頬に落ちかかる髪を梳いて、両手で顔を包んで、柔らかい唇の上に自分の唇を重ねた。さらりとした暖かい肌触りを触れ合わせた場所で感じながら、その甘い形に沿って自分の唇を撫で滑らせる。

キスというのはわりと合理的な本能だと思う。

脳の間覚刺激を受け取る領域の中で、指先と同様、唇の占める領域は広大な割合を持つ。いわゆるペンフィールドの小人というやつで、……対象をもっと詳細に感じ取りたければ唇を使えということだ。

そうしてそれを証明するように、こっぴやうって唇でその桜色の唇を、その柔らかさを辿れば、その感覚は直接脳の中へ痺れるように響き渡る。

同じように感じてくれていているらしいシニストラの、触れ合わせるだけの口付けの焦らされる感覚に耐える、その微かな震えが伝わってくるともう堪らない。

強く抱き締めて、深く口付けて、それまでとは違う粘膜の滑りを全て感じ取ろうと、何度も深く唇を動かして絡め合わせた。

シニストラは急激な深い口付けの息苦しさに溺れそうになりながら、それでも健気に俺の行為に応える。口付けの合間の息継ぎで漏れる熱い吐息と、俺の腕の下あたりのシャツを必死で掴む仕草が愛しい。

キス2回。

そうしてたっぷり数分は味わった後に漸う唇を解放すれば、すっかり熱を帯びた細い軀は俺の腕の中で力を失ったようにくずおれかけるし、俺は俺で唇だけでなく開いた胸元からその向こうまでを全身で感じたくなって仕方なくて、そのままベッドの中に引きずり込む日もままあるが、そうするとその日の休日1日が台無しに、たとえば急に思いついて映画だのドライブだのに出掛けたくなくても（主にシニストラの方が）到底無理な状態になるから、と

りあえずこの場合は欲望を抑える。

抱き合うのは、夜でも出来るし。ゆっくり。

しつかり立てないシニストラを両腕で抱え上げた。普段より少し軽い。この間のあれで減った体重がまだ完全には戻ってない所為だ、腹が立つ。

とりあえずソファのほうへ向かって、シニストラを抱えたまま腰を下ろして、膝の上であいつの軀を囲い込むようにして抱き抱えて、その体勢にすっぽり馴染んで収まるシニストラが愛おしくて、我慢できなくて3回目のキス。

目を閉じてキスを交わす俺たちの周りで、微かな閃光がぱしりぱしりと音を立てて小さく弾けている。俺たちのエニウェア、ウエネヴァの能力の元となる、原子よりも遙かに小さい素粒子サイズの微小ブラックホール、それが形成されては直ぐに蒸発していく、その時に出来る小さな小さなエネルギーの花火だ。

特殊能力を持った者は、互いのパートナーに対し、必要以上に立ち入ってはならない。能力の干渉頻度が高い場合、いずれかがもう一方の能力に飲み込まれてしまう可能性が極めて高い。

ESメンバーそれぞれごとにその実際理論は異なるが、俺とシニストラの場合、その言葉

の意味するところはこの小さなブラックホールの操作を誤る危険性として顕著に表れている。わずかに俺たちの干渉頻度が高くなるだけで——つまりは俺が、あるいはシニストラが、パートナーと一つになってしまいたいと望むだけで——この小さくて貪欲な怪物はたちまちその質量を増し、加速度的にあたりのものを全てを飲み込み、パートナーどころかこの惑星アイネアースごと、ウエヌス星系丸ごとすらまでもがただ一点へ、時空の特異点へと押し潰されてしまう。

俺たちが互いにたった一人の半身を手に入れて、時間と空間とを操る特殊能力を手に入れて、まだそのどちらにも慣れなかった最初の頃はそのあたりの加減が判らず、感情を高ぶらせては暴走しそうになるこの能力に、本気で肝を冷やしたことも何度かあったりしたものだ。けれど今となつては、この小さな花火たちは、俺たちの能力と感情が程よく良い具合に干渉している、その心地良い調和を示す祝砲のBGMになつていて。

俺もシニストラも、もう子供ではなくなったから、互いが互いであること——二人が一人ではなく、二人で在ることこそに互いへの愛惜を見出すのだけだ。

だからこそ、特殊能力を持つESメンバーの俺たちであっても、愛し合ったり抱き合ったりということが普通に出来るのだけだ。

それでも俺のほうは、ややもすると過干渉に……何もかもをかなぐり捨ててあいつとひとつになりたいと願うことが時折あって、その都度それに対するバランスを上手く取っている

のは、悔しいけれどもシニストラの方であると認めざるを得なかった。

互いの身も未来もどうでもいいというくらい、形振り構わず俺を求めるシニストラがたまには見てみたいと、少し寂しく感じないこともないけれど。

唇を離して目を開いて、少し上気した顔の、綺麗な色素の薄い空色の瞳で俺を見て微笑う腕の中のシニストラに、それだけでいいと思わされてしまうのだから仕方がない。

そうして再び口付けて、軽く、深く、もう数え切れないくらいのキスの雨。

俺もシニストラも、だらだら無意味に音と映像を流し続けるTテレビVビデオはあまり好きでないから、スイツチが入っていることは殆ど無い。

家で好きに時間を過ごしている時は、だいたい二人とも本を読んでいる。

けれど読書の好みは俺とシニストラとで違って、俺は写真集や科学系、技術系の雑誌

を、シニストラは随筆や古典文学を読むことが多い。

さりとてお互い、パートナーからは離れがたくて。

ソファに座る俺の、膝の上にはあいつの背中。そして空色の髪。つまりは俺の膝の上で、ソファに横になるように腹這っているシニストラ。

俺は片手に本を持ち、もう片手で見えない先のシニストラの顔の輪郭を辿る。

文庫本を広げるシニストラが、顔の上をなぞり続ける俺の手を時々空いた片手で捕らえて口付ける。手に触れる柔らかい感触の、唇の形で奴が微笑っているのだと知る。

同じ体勢に身体が凝れば適当に体勢を変える。べったり身体をくっ付け合って互いの肩越しに本を読んだり、本を持つシニストラを俺の腕の中にころんと丸く収めてしまったり。膝枕もする、どちらがどちらにも。

お互いに本を読むという作業は中断しないけれども、片手は——少なくとも俺の片手は——必ず相手の肌の上を辿り続ける。

シニストラはその俺の指に手を重ねて、嬉しそうに微笑う。

意思の力、精神の力が物理的、肉体的作用を引き起こす、と。

それは第七門セブンゲート研究所で学んだことだったけれども、同時にもう一つ知ったこともある。

その逆もまた真なり、ということだ。

俺たちの能力も、思考も、この俺たち自身の身体から生まれ出ずるものであるから、当然その中身は身体的要素に依存する。相手の身体を——物理的存在としてのパートナーの姿形を正しく知ることは、相手の思考を、能力を、より正しく、深く知ることと直結するのだと。

簡単な話だ。つまりはこうやってシニストラに触れて、顔の形だとか肌触りだとか、そういうものに直接触れていると、シニストラの能力がどう働いているか、シニストラがどんなことを考えているか、感情の動き、調子の良し悪し、そういう言葉にきれない微妙な感覚的なものが、まるで形となつてそのかたち、大きさ、温度、それらを手取るようにしてよく知ることが出来る、そのことを身に沁みて実感する。

この間の任務に出る前後は思い返せばそういう習慣を少し忘れていた頃で、意識することもなく触れ合うことが少なくなつていた時期で、任務が終わつて奴が俺を怒らせた、その時に触れたあいつの軀がまるで全然知らない人間のように遠くて曖昧になつていて、俺が奴の体調も思考も何も判らなくなつていた、気付かなくなつていたことを嫌と言うほど思い知らされてかなり愕然としたものだ。

そんな風に愚かになつていた自分にかなり強くショックを受けて、俺はそれ以来、二人だけである時は絶対にシニストラの肌から手を離さないようにしている。

……たまにやりすぎるけれども。
というか、今日も今日とて？

俺は片手でシニストラの細めの肩を抱き抱えていて、回した腕で指先はそのまま首筋のあたりを撫でていて。

無意識に手を動かしながら、本の内容に気を取られていたら、軽く跳ね反った腕の中の火照った軀に我に返って。

気がついたら俺はシニストラのシャツのボタンを半分以上外して、胸元のかなり服の奥の所まで愛撫していたところで。

わずかに紅潮した頬と少し潤んだ眼で、シニストラが軽く俺を睨み付けている。

そんな表情も凛々と綺麗なシニストラには、欲情よりも愛しさのほうが先に立つ。

「悪い」

俺は笑って、手にしていた雑誌雑誌を放り出して、両手でシニストラの身体を思い切り掻き抱いた。はだけた胸元の肌の熱さが愛おしい。

なにやらむぐむぐ言っていたシニストラの文句は、あいつの顔を埋めさせた俺の首筋で全部かき消してやった。

艶やかな空色の髪を俺が梳き始めれば、軽く抵抗していた身体は、すぐにしつとりと落ちていて俺の身体に馴染む。するり、と、そんなところまで優雅な動作のシニストラが本を横に遣って手放した。

猫のように首筋の髪を掻き揚げてやる愛撫は、こいつが大好きな愛され方のうちのひとつだった。

「今日の予定はどうする？」

ぼちぼちと昼も過ぎかけていて、どこかに出掛けるなら、そろそろスケジュールを決めてしまわないといけない時間だった。

「あなたはどうしたいですか？ デクステラ」

「そうだな……………」

腕の中のシニストラの言葉に、第二首都^ニコルキア^コ周辺の今日の行事予定を思い浮かべる。

「…………オペラハウスでローエン格林をやってる。芸術劇場だと…ああそうだ、ベジャールのボレロとフォー・ライフが来てるな。ちよつと遠いが首都^{アレキセス}でホリガーの協奏曲があるし。国立博物館で今は地球の芸術展をやってるから、それを見に行ってもいい」

……帰ってきた時にはもう全部終わっているだろうから、という言葉は、言わずに飲み込んだ。

思い出す必要は無い。
今日は休日だから。

「どれにします？」

俺の胸元に凭れるシニストラが訊く。

昔は全然関心が無くて知らなかったそういう芸術の類も、シニストラと付き合うようになってからはいろいろ知って教えられて、今では俺もすっかり気に入ってるし、自分なりの好き嫌いの好みも出来てきた。

選ぼうと思えば、選びたいものも、一応ありはするけれど。

「おまえの好きなものにしるよ」

俺はあえてそう言った。

ふい、とシニストラが視線を上げてくる。

「……俺が決めていいんですか？」

…少し甘えたその目は、シニストラにしてはかなり珍しい。よっぽどリラックスして俺に気を許している時の証拠だ。

俺は嬉しくなって、満面の笑みで答えてやった。

「もちろん。どれがいい？」

実のところ、シニストラが喜びさえすれば、どれにするかなんて、俺はもうかなり如何でも良くなっていたのだけれど。

不意に目の前に影が差して、暖かい感触が唇に触れた。

何をされたのか一瞬判らなくて、ゆっくり離れていくシニストラの顔の、真つ直ぐに向けられる真摯な視線を、しばらく呆然と見返してしまった。

……シニストラの方から俺に口付けるなんてこと、もういつ振りだったか、忘れてしまつたくらいに久しぶりだったから。

「……俺は、あなたと一緒にいたい」

甘えたシニストラの口調と、俺を見上げる甘い視線に、俺の思考は一瞬で溶かされ尽くす。

「俺はあなたと、ずっと一緒にいたい。……駄目ですか？」

ほんの少しだけの陰りを見せるシニストラの言葉が、その裏で何を意味しているのか、気付かないわけではないけれども。

今日は、まだ休日だから。

「……馬鹿」

駄目な訳がないだろう、と、その先の台詞は続けなくても判ってほしい、そう願うけれど。ソファにその軀を押し倒して開いたままの胸元に唇を寄せる俺に、黙って微笑って腕を回してくる、その笑顔に自分の願いが満たされていることを知る。

結局外に出掛けられなくなったその日の、すっかり日も傾いた頃に、せめて食事だけでもと思つて、駄目元でステラ・マリアヘディナーコースの配達を頼んだら、気のいいチーフシエフが苦笑しながらも自ら持つてきてくれて、俺は大いに感謝した。

ワゴンを部屋へ持つて入って、ソファの上で気墮るく身を起こしかけていたシニストラに腕を添えて卓へ促したら、俺の腕の中に滑り込んできて、とんでもなく甘い声で、食べさせ

てください、なんてねだりやがった。ああ、撃沈。

余りに口惜しかったから、その口にスプーンとキストを交互にくれてやった。シニストラは喜んだから、御仕置きにならなかった。

もう夜もずいぶんと更けて、明かりを消した部屋の中は静かな暗闇だ。窓から見える人の営みの地上の星が、小さく美しく瞬いている。

ベッドの上で仰向けになつて、目をほんのりと上気させて、乱れたシーツの上でとろりと快楽の余韻に全身をゆだねるシニストラを、俺は少しだけ離れた横から頬杖ついて眺めた。繰り返して何度も抱くというのは、一回抱いただけでは満足しないから、というのもしろんだけれども、それ以上の意味があつて。

俺は手を伸ばして、軽く開かれたままの唇の上に、中指をそつとそつと滑らせた。ただそれだけの行為に、繰り返し愛撫を受けて敏感になった軀はぴくりと小さく撥ねる。

ん、とも、あ、とも聴こえる、鼻にかかった甘い声が、俺の指の触れる色づいた唇から漏れた。

ぐったりとしている軀を抱え上げて、自分の身体の上に乗せた。力の抜けたように俺の胸の上に凭れて、熱い吐息をひとつ吐くシニストラが可愛い。

抱き始めの最初の時はまだ固くてぎこちない身体が、俺の手で何度も抱かれているうちにどんどんと溶かされて、熱くしなやかに俺の身体に馴染んでいって、愛撫する俺の手にどんどんと敏感になってゆく、その過程がいつも堪らなく好きだ。だから俺はいつもこいつを繰り返して抱く。

だけどまだ、許してやりはしない。

背に回していた手を、意図を持って背筋に沿って滑らせてやれば、感じ過ぎているほどに敏感になった肌は大きく背を反らせて、艶やかな声が堪りかねたように零れる。

宙に浮いた首筋を甘噛みしたら、いつのまにか俺の片腕を掴んでいた細い指に、強く力が籠められて爪が食い込んだ。

その辺りで俺のほうが我慢できなくなって、上下を返してシニストラをベッドに押し付けて組み敷いた。

最後の気力ひとつさえ使い果たしたような様子でぐったりとしたままのシニストラを、俺は両腕で抱え上げてバスルームへ向かう。

なみなみと湯の張られたバスタブに、シニストラを抱えたまま入った。

一通り身を清めてやったところで、シニストラが閉じたままだった目を薄く開いて、

——その時初めて、物言いたげな表情で俺を見た。

判ってる。

滅多に弱みを見せないシニストラが、何故今日に限って、これほどまでに俺に甘えたのか。全部、判ってる。

けれど、今日はまだ、休日だから。

「寝ていいぞ」

疲れ果てて直ぐにも眠りに落ちそうな様子のシニストラに、そう声を掛けてやる。

シニストラは小さく、緩くかぶりを振った。

「…デクステラ。——俺は………」

「明日話そう。シニストラ。」

「……………」

「俺は明日も、おまえの横にいるから。——明日も明後日も、その先もずっと、おまえの傍にいるから。」

「……………」

「だから今日は、もう寝ろ。……俺の腕の中で。」
「……………」

ばしん、と、あの小さな閃光と音がした。

シニストラの気配がぼんやりとその強さを増す。

意識の中で、未来を辿ったシニストラは、——やがて安心したように、静かに目を閉じた。俺の身体に掛かる暖かい重みが少しだけ増す。

すぐに穏やかな寝息が続いた。

片手に抱えたまま、軽く髪を洗ってやって、入ってきたときと同じように抱え上げたままバスルームを出た。

とりあえずバスローブを着せてソファに横にして、艶やかな空色の髪を丁寧に拭いてやる。

未来は、常に可能性なのだ。

未来を見通す特殊能力、ウェネヴァを持つシニストラは、いつもそう言う。

可能性の高い未来は、より濃く、はつきりと。可能性の低い未来は、薄く、ぼんやりと。考えうる限りの未来の複数の映像が、いくつもいくつも重なって見えるような感じなのだ。そうシニストラは、自分の能力について説明してくれたことがある。

（けれど、その未来の可能性を動かすのは、自分たち——俺たち一人一人なんですよ）
シニストラはそう言う。

（見えるだけでは、未来は動かない。——自分の望む未来が実現してほしいと。そう考えて、そうなるように行動し、努力すれば、望む未来はより濃く、はつきりと。もし行動の方向性が間違っていれば、未来は薄く、ぼんやりと。ウエネヴァの能力ではそう見えてくるようになります。——俺はそれを確認することが出来るだけですよ）

だから、どんな些細な可能性であっても。

（未来は常に、可能性なんです。……自分から努力すれば、どんなに小さな可能性であって、それが実現する未来を手にすることが出来るかもしれない。）

……その可能性は、いつでも残されているんです。俺たちの——誰の手元にも。）

でもね、と、シニストラはそこで声を小さくして、嬉しそうに話してくれた。
この間まで、あいつがずっと俺に黙っていた隠し事を。

(あなたとの未来は、……あなたが俺の横で笑っている未来は、手に取るように——疑いよ
うの無いくらいに鮮明に見えたんですよ。くつきりと。)

そのシニストラの笑顔が曇ったのは、エクリプス局長がメルクルデイ秘書官に発言記録ま
で取らせた、あの会合から後だった。

(……未来が……)

俺との未来が。

(初めて、今までよりも薄く見えるようになりました……)

今日のこの日の、この休日が終われば。
明日になれば。

俺たちの未来を脅かすほどの、その場へと俺たちは赴く。

ヴァージン・ヴァイラスとの総力戦へ。

(未来は、常に可能性なんだろう?)

俺は答えた。

(だったら、俺は努力する。おまえが横にいる未来が来るように。)

そう言ったら、シニストラは軽く目を見開いて、少しの間を置いて、

(……そうですね)

とても嬉しそうに笑った。

(やっぱり、あなたは——俺のパートナーなんですわね)

未来は常に可能性で。

可能性を動かすことは、そんなに難しいことではない。例えば、言葉ひとつだけでも。

俺がシニストラに掛けたさっきの言葉も、俺たちが望む未来の可能性を強くして、それを能力ウエホクで見たシニストラは安心して眠りについたのだと。

そう思いたかったし、たぶんそれで事実なのだった。

俺は空色の髪を拭き終えた。

シニストラは穏やかに眠っている。

ソファのシニストラの元から少し離れて、ベッドのシーツを取り替えて、戻ってきて、シニストラのバスローブを脱がせて、素肌のシニストラを両腕に抱え上げた。シニストラが夢現のまま腕を絡めてくる。

寝室に入ってベッドに軀を下ろしたら、新しいシーツが少し冷えていたらしく、シニストラは小さく身震いをした。

毛布を掛けてやって、俺もバスローブを脱いでベッドに滑り込んだら、俺の胸元に擦り寄るようにしてシニストラが身を寄せてきた。

直接触れ合う肌は、胸の奥が締め付けられるように切ないほど暖かくて。

今日はまだ、休日だから。

そうして俺も、まもなく穏やかな眠りについた。

至天門

2

濡れひよこ

(あなたは——俺のところに戻ってくるんです)

……声で目が覚めたような気がした。

けれども気の所為だったのかもしれない。

照明は作業と監視に支障の出ない程度に薄く落とさされていて、真暗闇よりもかえって何か静かさを感じさせるそのほの暗さに少し落ち着いた。

そのわずかな照明の光を吸収し、ほんのりと発光しているように見える白い肌。半円のカーブに沿って流れ落ちる薄青の長い髪。

殻を掻き抱く両腕。

俺の入った医療カプセルに覆い被さる、シニストラの姿が目の前にあった。

俺のカプセルの真横の椅子に座り、上半身はカプセルのガラスの上うつ伏せている。目を閉じ、表情は安らいでいて、呼吸は規則的だ。眠っているのかもしれない。

透明なケース越しに、シニストラの両腕が俺の周りに廻されている。届く限りに手を伸ばして、包み込むように。

その姿は、何かとても大事なものを愛おしむ姿に似ている——何だか妙に既視感のある光景だ、と、そこまで考えて。

ああ、孵る卵を温め続ける母鳥のようなのだ、と。

咄嗟にそう思った。

孵化を待つ俺が、その殻ごと、シニストラの腕の中で温められている。

このセブンスゲート研究所に来てから、こうやってカプセルの中に入る羽目になったことなど——液体の充填された密閉空間の中で全身管理をしなければ生命が維持できなくなるほ

どの事態に陥ったことなど——もう数えるのも馬鹿馬鹿しい位に何度も繰り返してきた。

けれどそういえば、基礎代謝量を抑えるために低体温で管理されているはずのこの環境の中で、寒いと思つたことが一度もないことに気がつく。

朦朧と浮上と潜行を繰り返す意識の中で、いつも感じていたのは——安堵感と、暖かさだった。

(あなたは俺のところに帰ってくるんです)

あのとときも。

無機質に白いばかりの「実験室」の壁と天井と強く白い人工的な灯り、壁に嵌め込まれたガラス越しに監視を続ける複数の冷淡な機械と人間たちの目、——それを背にして、シニストラが俺を覗き込んだ。

——逆光になったその姿に、俺は自分自身の血と肉片で出来た海の中から手を伸ばした。浮いた手をシニストラの手が捉える。

導かれて頬に押し当てた手は、白い肌にくっついたり深紅の血糊を残して。

それなのに。

ふんわりと柔らかく微笑ったシニストラは——凄絶に綺麗だった。

背景の白い壁も人の目も、血も肉も、生も死も、何もかもを圧倒して覆い尽くすほどの輝きで。

銀河中の美しく貴重な物々を全て集めて凝縮したとしても、この微笑には遙か及ばないと思っほほどに。

(あなたは俺のところに戻ってくるんです)

強要でも、願望でもない、穏やかに澄み切ったその言葉。

あの微笑は、今、俺の上で眠っている。

ほの暗い部屋の中で。俺の殻を抱いて。安らかに。

なぜそんなに優しい顔をする？と。

いつかカプセルから出たばかりの夢現とした意識で訊いた事があるような気がする。俺の快復を待つあいつの顔は、いつも穏やかで優しい。

それに不満を抱いたわけではなく、むしろいつも在るべき場所へ還る事への安堵感に包まれた、その姿の腕の中で訊いたような気がする。

逆の立場に、俺がシニストラの還りを待つ立場になった時には、不安と恐怖とで身体も精神も引き千切れそうになるのに。

(あなたは強いから)

まだ遠い意識の中、暖かい声が耳に流れ込んだ。

(あなたは強いから。必ず帰ってくるから。——だから俺は、あなたの帰ってくる場所を用意して、そして待つただけでいいんです。)

そののどこに疑う余地があるんですか？と言ってシニストラは笑う。

あなたが俺を待つ時に不安がるのは、俺がまだまだあなたよりずっと弱いからでしょうね、
そうも言ってまた笑う。

そうじゃない。

信じる強さを持たないのは俺で、信じる強さを持つのはおまえだ。

おまえがただの一欠片も疑いなく俺を信じる、そのしなやかな強度が、俺の存在を、生命を、死の血の海からおまえの所へと引き上げる。俺の魂が、おまえを求めて、おまえの元へと立ち返る。

そうしておまえは、その度ごとにこうやって俺の殻を穏やかに温める。早く孵ってこいと。待っているから、と。

カプセル越しの両腕は、まだ俺の周りに暖かく廻されている。

肉体的苦痛に精神が耐え切れなくなる？

生への絶望？ 死への羨望？ 何もかも手放して、楽になることへの憧憬れ？

とんでもない。全部お笑い話だ。

この暖かい腕の中を独占してその中で何度でも生まれ変わる、眩暈のするようなその至福感に勝るものなど、天上天下の何処を探したって有りはしない。

まだエストランドに所属していた頃も、死ぬような目には何度でも遭ったけれど。

この研究所に来てからは、ただ二人だけで幾度も死線を超えてきて、目覚めればいつも、おまえがそこに在って。

繰り返す時間の流れのうちに、段々と距離を詰め、近づいてゆく俺たちの関係。

それを深く考えることは、まだ遠い未来の先でいい。

急ぐことはない。

これからもずっとこうやって、遙かな時間をおまえと重ねていくのだから。

今はもう一度眠りにつこうと、そう思う。

次に目覚める時は、隔てるもののない暖かさを与えてくれるおまえの腕の中で。

まだ湿ったままの濡れひよこのような俺の髪を、おまえは優しく梳いてくれるだろうから。

殻を温めるおまえの姿。伏せた瞼。白い顔。

うつ伏せたままの、小さな息を紡ぐおまえの唇へ。

カプセルのガラス越し、自分の唇を押し当てた。

そうして俺は、目覚めを夢見る卵の眠りの中へと再び沈んでいった。

連星

アイネイアースという惑星丸ごとが宇宙の経済を統べるGOTTの機関として機能している趣はあれど、眠りの気配の濃く漂う冷えた深夜の時間帯とあっては、このアンキセス中央宇宙港も昼間の混雑と喧騒を忘れたように静かになる。

歯の抜けた櫛のような間隔で、時折、軌道エレベータへと発進するガントリーの加速音が暗い夜空に遠く響くだけだ。

アイネイアースに月は無い。空港特有の仰ぎ見上げる広大な天の、夜の闇を照らす光はそこに無い。

ただ人工の照明のみが夜の宇宙港の平坦な敷地を薄く照らし、その明かりも通常夜間には使用される事のない宇宙艦繫留庫の並ぶ辺りでは数を減らす。

軌道ウイングの背後、宇宙港の整備エリアの嫌と言うほど無機質に広大な敷地を横切つて、噛み締めるようにゆっくりと歩みを進めるシニストラの目にも、だからかなり間近まで近づ

かなければ自分達の機体が収められているドックのシャッターが僅かに開いているかどうかは解らない。

……解る必要など無い。何よりも自分が一番承知していることなのに。

それでもドックの中の更なる闇へと、薄く口を開くほんの少しの隙間を見た瞬間。心の中を、氷塊が滑り落ちた。

どうして。何故。

何故あなたは、と。

訊く必要のない愚問が、性懲りも無く胸の中で謔言のように繰り返される。

身を屈めてシャッターの奥に入った瞬間、暗闇に目が慣れるよりも先につんとした臭いがシニストラの鼻を突いた。思わず眉根を寄せるが、目が慣れるまでは動こうにも動けないほどの漆黒の闇だ。

シャッターを越えた位置のまま、視界の暗順応を待つ。傍から見れば、立ち尽くして動かないままでいる姿に見えたかもしれない。

ひとの気配。一点の赤い火。

凍りついた空気。

……闇の中からじわりと染み出してきた、紅い髪。

心臓が、ずくりと疼いた。

流線型の機体の翼に背中を預ける立ち姿へ、シニストラは震えそうになる足を動かして近づいた。滑らかな動きの自身の歩みの、躊躇いを表面に出さずに済んだことに対して小さく安心する。

進む先の姿は身じろぎすらする様子も見せない。

「煙草は止めてくださいと、あれほど何度も言ったでしょうに」

毎回この時期にだけ彼が手をつける悪癖を嗜めながら、ふと目を遣ったパートナーの足元に積もる吸殻の数に、もう一度氷を飲み込んだような気分が自身を襲う。

何時間、彼はこうしてここにいたのだろうか。いや、それよりも……何晩？

昼間の間は普段と変わりなく、……そう、当事者達以外の傍目には普段と何ら変わりなく、淡々と本局での仕事をこなすデクステラ。

自分だけに見せてくれる彼のその笑顔が、次第にぎこちなくなり、逸らされ、そしてとう

とう消えたのは何日前のことだったろうか。今回で……もう何度目になるのだろうか？

激しい眩暈がして思わず揺れた身体を、煙草を投げ捨てた手が鞭のように鋭く延びてきて捕らえた。

次の瞬間に来るものを知っているシニストラは、強く目を瞑って心を強張らせた。

予想通りの、強引な動きに唇を深く塞がれる。

崩れ落ちそうになる足の、震えを今度は止めることが出来なかった。

身体の中から湧き上がり、熱を持って蠢くものを必死で否定する。

意識の中で無理矢理に引き伸ばされたような時間が長く続いた。

粘着質な音がドックの中に響いた時、けれどシニストラは反射的に相手の身体を強く押し返した。

身体は離れるが、腕はまだ力強い腕に捕らえられている。

「……まだ早過ぎますよ。あなただって判っているでしょう？」

目を逸らしてことさら冷たく言い放つ。

唇に残る痺れは、自分に対する当て付けのようにわざわざ強い銘柄を選んでいた。パートナの煙草の所為だと思いたい。

無言の数瞬を長く重ねたデクステラは、やがてゆるりとシニストラの腕を放した。

「もう、充分待った」

背を向けてセンチュリオンの入艦デッキへ向かいながら、そう呟いたデクステラの低い低い声はドックの高い天井に小さく響き、シニストラの背筋を再び凍らせる羽目になった。

重い足を引きずり彼の後に続くシニストラは、もう山のように積み上げて来続けた自分の罪に、デクステラの腕の震えを無視した小さなそれをもうひとつ積み上げる。

耳を劈く大きな崩落音を立て、それが崩れゆく確実な未来を強く瞼の裏に映しながら。

「Anchises Delivery, this is UAS 0003. 5 minutes before startup end for Janus Spot 004.」
シニストラの型通りの離陸許可申請に、アンキセス宇宙港オペレーターからの返答が遅れる。目的地の照会に時間が掛かるのだ。

惑星ヤヌス。地標識^{ランドマーク}すら片手に少し余るほどの数しかない辺境の地の星である。

太陽銀河系の果てとも言うべき場所で辛うじて銀河の重力圏にしがみつくその星系と植民

惑星へ、宇宙暦の開拓者達は入口と出口、過去と未来を司る双面の神の名を付した。

地球暦のさらに古代、その神の姿を模した門は戦の時にのみ開かれたという。

「……OK, UAS 0003 clear, startup your ends and estimate clearance.」

デクステラは無言のまま、乱暴にレバーのひとつを引いた。センチュリオンを乗せたガントリーがゆっくりと加速を始める。

軌道エレベーターを上昇すれば、暗い宇宙空間の中に刹那、強い光が目を焼いた。

恒星ラティウムとラティーヌ。

ヒトを含めたアイネイアースの生態系活動のエネルギー源を一手に担い、互いの重力に縛られて僅か数十時間の公転軌道を光速の数パーセントという速度で回り続けるその連星から、シニストラは目を逸らした。

星系・惑星ヤヌス。

銀河中央より約8万3千光年。

銀河水平面に対する仰角は約37度。

ワープアウトした先の毎回のその宇宙空間には、暗黒の宇宙空間にちりばめられた無数の

星という見慣れた普通の光景は無い。それは銀河系内にいるからこそその光景であって、半径約5万光年の太陽銀河系からこれだけ外れた位置にあつては、周りを取り囲む星というものは存在しないのだ。

代わりにセンチュリオンの全方位モニターに映し出されるのは、闇の全天に置き忘れられたようにまばらに残された遥か遠くのいくつかの別銀河の光と、

——太陽銀河系の、凝縮された2千億の光の渦を一望の元に見下ろす光景だった。

両腕を真つ直ぐに伸ばして手のひらを差し出せば、まるでそれに乗るかのような大きさで輝く銀河の渦。

『あれがペルセウス腕。あれが射手腕——』

この場所は、いつも変わらぬ光景を用意して自分たちを待っている。来る度ごとに、もう二度と見なくて済めば良いのにと思う光景だ。

(初めてこの場所に来たのは、もう、何年前になるのか……)

パートナーも彼自身も押し黙ったままの、センチユリオン艦内の重苦しい空気の中、次第に麻痺してゆく思考でシニストラは考えた。

(あの時は——まだ、こんな風じゃなかった。)

こんな風ではなかったのに。

『——あれがペルセウス腕。あれが射手腕。あれがオリオン腕——』

低く優しい声が耳の奥で木霊する。

いっそ無ければ良いのにと思う過去の記憶から逃れるように、シニストラは狭いコクピットから勢い良く立ち上がって背を向けた。

物置並みの狭い居住スペースへ移動しようとした足が、凍りついたように動かなくなつた

のは、いつの間にか自分の腕を痛いほどに掴んだパートナーの手の所為であると——気付いた一瞬のその遅れが、引き返しようなない運命へ自分を引きずり込んだ未来をシニストラは瞬間、鮮明に視た。

紅い髪のパートナーはシニストラの腕を捕らえたまま、立ち上がりながら次から次へとスイッチを切っていく。

全方位モニター。格納庫のゼフィーロスとの通信回路。センチュリオンのメインエンジン。

唐突に全てのの明かりが落ちた艦内、ツインコクピットの狭間の床に引き倒されながら、後方に僅かに開いた直視窓から漏れ入る銀河の光がシニストラの目に入った。

けれども外界が認識できていたのはそれまで。

覆い被さってきた、燃えるように熱い身体と強引に唇を塞ぐ唇に全ての意識が塗りこめられた。

手は直ぐに上着とシャツをボタンごと引き裂いて胸の奥へ侵入してくる。シニストラの身体が一気に熱くなった。

軀の奥でずくずくと熱く重く蠕く衝動がある。

唇を離れたデクステラの視線が、焼け付くような強さで自分に向けられているのを感じる。シニストラは顔を背け、パートナーから目を逸らした。

途端、許さないと云わんばかりにデクステラの舌がシニストラの胸を舐めた。反射的に逃れようとするシニストラの軀を、デクステラの手が腰の位置で強く引き寄せた。

『あれがペルセウス腕。あれが射手腕。あれがオリオン腕——』

…あの優しい時は、どこへ行ったのか——。

…判っている。どこへも行ってなどいないのだ。

ただ互いが、互いの抗い難い重力に囚われたが故に——

止め処なくシニストラの目から熱い雫が零れ落ち続ける。先程まで立て続けに上げさせられていた、苦鳴とも快樂とも判別の付けがたい涙から引き続くそれは、部屋を満たしていた狂気にも似た熱気が冷えつつある今になっても少しも終まる気配を見せなかった。

早く泣き止まなければ、理性ではそう思うのに、冷たい床の上に横になったまま立ち上がる気力さえ沸かず、嗚咽をデクステラに聴かせないようにするのが精一杯だった。

そのパートナーは少し離れた所に座りこんで壁に背を預け、虚ろな目をして煙草を吸っている。

手加減無しに何度も抱かれた。

頑なに心を閉ざすシニストラへ、墮ちろと言わんばかりに何度も、何度も。

けれどそうして軀と心の奥底までどろどろに溶かされて、追い詰められて、とうとう決死の想いで——比喩でなく、文字通りの意味で——シニストラが伸ばした手は決して受け取られることはなく、既すでの所でパートナーに躲かされるのだ。必ず。

——結局、最後の最後で大事に想うものが、自分の欲以上に——相手の存在であるから。だからこそ。

再び溢れる涙に揺れるシニストラの視界の端に、直視窓からの太陽銀河系の姿が映った。

初めてこの星系に来たのは、まだ二人がエストランドに所属していた頃だった。

辺境の惑星での軽い任務。それも終わり、仲間達が談笑していた団欒の場、そこから姿を消したデクステラを探して、シニストラはひと気もまばらな未開地の林の夜道を歩いた。

僅かに開けた小高い丘にその姿を見つけた、視線の先のデクステラは、両腕を真っ直ぐ伸ばし、手のひらを暗い空に差し出していた。

手の先には太陽銀河系。

時に醜く、時に素晴らしい人類の生命の全てがそこで息づく、彼が心から愛して止まないその銀河を、まるで両手で愛おしむように。

シニストラの気配にやがて気がつき、振り返ったデクステラは——隠し事を見つけた子供のように照れ笑った。

そうして二人並んで、木の根元に背を預けて座った。

『あれがペルセウス腕。あれが射手腕。あれがオリオン腕——地球のあるところだ——』
視界の先で光り輝く銀河の渦をひとつずつ指しながら、ぼつりぼつりと言葉少なにデクス
テラが語った。

稀有な特殊部隊の一員、情報統括役としての任務に就くシニストラが銀河腕の名称を知ら
ない訳もなかったが……そしてもちろん、デクステラもその程度のこととは承知の上だったの
だろうが——シニストラはデクステラの言葉に黙ってただ頷いていた。

自分たちの間にある空気に気がついていた。

いつもより少しだけ早く打つ鼓動を、僅かに上がった体温を、それが自分だけでなく、相
手もそうである事を知っていた。

投げ出された手の先で自然に触れ合っていた、その指を絡める事もしなかった。それだけ
で満たされていた。

……いずれ自然に来る時を待てば良いと、そう思っていた。

（特殊能力を持った者は、互いのパートナーに対し、必要以上に立ち入ってはならない。能力の干渉頻度が高い場合、いずれかがもう一方の能力に飲み込まれてしまう可能性が極めて高い。）

無我夢中だったのだ。

多くの仲間を失って、そうしてもう誰も自分たちの前で殺させたりはしないのだと、二人でそう決めて第七門研究所の門をくぐって。

能力開発のための過酷な訓練と肉体改造に耐えて、望み通りの特殊能力を手に入れて、——そこまでは無我夢中で。

そしてもう自分たちが、二度と触れ合うことを許されなくなったのだと識ったその時、……二人して、目を見合わせた。

実際に何が起こるのかは知らなかったけれども。

それが破滅に至る何かである事だけは理解できたから。

耐えた。ただ耐えた。

許されないと知った途端、焼け付く喉の渴きのように欲しくて欲しくてたまらなくて、心の底から渴望するようになった互いを。

いつそのこと離れられたら良いのにと、あまりの苦しみと痛みにそう思いながら、けれど自分自身以上に望み愛する対象から遠ざかる事などどうしても実行できる訳がない自分たちも判っていた。

気を緩めれば手を伸ばす。浅ましい程に望む相手の軀へ。果てしなく暗い破滅への道へ。そうならないように双方ともが気を張った。何が起こっているのかを全て承知しながら、びりびりと張り詰めた数ヶ月が過ぎた。

それはまるで、互いの重力に囚われて互いの周囲を恐ろしいほどの速度で巡り、ほんの僅かにでも近づけば瞬間的に重力崩壊を起こしてあとただ深遠の一点へ永久に吸い込まれていくだけの運命を背負った連星の姿のようだった。

それでも——時は来た。

GOTT本局に居る時だった。

いつものように自分たちの私室で、張り詰めた空気に気付かない振りをする虚しい芝居を続けながら、昼過ぎの茶の準備をしている時だった。

臨界に達していた緊縛は、ふと触れ合った指を、互いが絡め合わせた刹那に粉々の破片へと砕け散り、そうしてようやくその時になって、二人ともが涙を零して相手の軀に力の限り縋った。

震える唇をゆつくりと重ねて、確かに心がひとつに溶け合ったと感じたその瞬間、

——異変を感じたデクステラは、咄嗟に能力を使った。人の居ない所へと。

次の瞬間に二人を襲った暴力的な衝撃。研究所での半死半生の人体実験でも体験したことがないほどの。

何が起こったか理解できないまま、再びアイネイアースのGOTTメデイカルセンターへと向けてエニウエアを使ったところで、デクステラの意識は途切れた。

デクステラは左半身を、シニストラは右半身を吹き飛ばし、立て続けに二度も緊急に能力を使った。デクステラは瀕死の重体にまで追い込まれた。

咄嗟に能力で飛んだ先の、直径数km、全長約40km、質量が約100億トンにも及んでいた無人廃棄コロニーは、数光年の先にまで粉々になった破片を撒き散らし、残された質量の大半はシュヴァルツシルト半径が僅かに数mmのブラックホールになったと――後で聞いた。

心を交わすことの許されない軀だけの繋がり。それすらも万が一の事を想定し、生命の氣配の無い所で。

辞められたら良いのと思う。もう辞めようと毎回のようと思う。けれど結局、数ヶ月ごとに臨界は訪れる。

判っている。無駄な抵抗なのだ。

相手と同じだけの強さでパートナーを想い、恋い焦がれて、その心を欲し、――それだけ

では済まない軀の欲を持つのが何よりも自分自身であるからこそ。

共に在るだけで、触れ合わずとも暖かい時間を過ごせるだけで充分だと、そう自らに何度言い聞かせても、……触れ合わない時を重ねて次第に疼いてゆく軀が。いちど感じてしまった快楽を覚えている軀が。

ひとときでいいから、軀だけで良いからひとつになりたいと、そう叫んで数ヶ月ごとに熱く疼き出す。

それが自分だけに起こっているのではない事も、知っていた。解消する手段は、いつであろうともただ一つしか存在しない事も。

それでも、次第に魂を蝕んでゆく虚しさはどうしようもない。

いつそのこと、どちらかが相手より自分の想いを優先する事が出来たなら。

軀だけでなく心もひとつになりたいと、自分の命も相手の命もどうなるうが構わないと、そう思えるのなら。

何もかもを永久に終わらせて、楽になれるかもしれないのに。

「——いつそのこと…そうして。——もう、こんなのは…：…終わりにするか？」

壁に凭れたままのデクステラが、独り言のように呟いた。

もうシニストラには、自分の嗚咽が音になって響くのを止められなかった。

——そんな事が出来る訳が無いのに。俺もあなたも。

自分よりパートナーの方が大事だから。だからこそ。

けれどいつかは、やがて必ずそうなるのだろう。

互いの重力に囚われた連星に待つ未来の運命はひとつしかない。

共通重心の周りを、止まる事も許されず回り続ける互いの運動はやがて永い時間をかけてそのエネルギーを失い、次第に形を留めなくなつて共に崩壊してゆく。

時に恐怖で、時に羨望で見遣るその未来が、床に倒れたままの今のシニストラの脳裏には

吐き気のするほどにくつきりと映っていた。

C a p t a i n

蒼銀の長い髪は、ベッドの中で深い深い溜息を吐いた。

……どうしよう……

……俺はどうすればいいんですか、キャプテン……。

枕に顔ごと突っ込んで、呼吸困難になる直前まで微動だにも出来ず、ようようゆるりと頭を傾けて横を向く。

髪が散るベッドの上には彼一人の姿しかない。

軽く片手を当てた唇の、動きだけでもう一度、意識の中に描いた人の呼び名を口にした。

…キャプテン。

一目見れば網膜にまで焼け付くような、鮮やかな緋色の髪を持つ己の司令官。

他を排するほどの圧倒的な存在感を持つて常に陣頭に立ち、自分を含めたエストランドの十人の隊員たちに鋭く指揮を飛ばしながら戦場の敵と混沌を次々と捻じ伏せてゆく、その姿に、強い尊崇と憧憬を抱き——そんな彼の片腕と呼ばれながら、その元に付き従い駆けることを、ただ限らない歓びとしているのだと思っていた。

だからただの部下の信頼としてでなく、まるで女が恋をするように自分が彼の事を想っているのだと気付いた時には——自分の想いのあまりにものおぞましさに打ち震え、胃が空になるまで吐いたものだった。

陰謀、打算、悪意、裏世界。何もかもがあやふやで曖昧なこの時代のこの宇宙の中に在りながら、穢れを赦さず、自らの信じる信念の元にどこまでも鮮烈に生きるその姿。シニストラ自身が大事に守ってきたはずの上官のその姿を、自らの手で徹底的に汚したのだと。

それでも一度自覚した想いは止めようがない。仲間と歓談するその姿を目で追う自分がい

る。あの深く低い声の欠片でも捕らえようとする自分の耳がある。彼と並び立ち共に任務に専念する、その時にすら、否定する意識の裏で魂ごと彼へと傾倒していく己の想いがある。

ただ純粹に恋い乞う自らの想いを力任せに捻じ伏せ続け、醜く翳く歪んでいく己を、シニストラ自身にはもうどうする事も出来なかった。

「——シニストラ、どうした？ 上がらないのか？」

夜も遅くに緋色の髪の上官の隠れ家ギブハウスを訪れ、ドアを閉めたままその場で立ち尽くした自分。いつもと同じように快く迎え入れてくれ、室内へ向かう歩みの途中、振り返って訝しげに声を掛けてきた彼に、キャプテン、と呼びかけた。お世辞にも小さな声としか言えない声量だったが、それでも震えたり掠れたりしなかった事に少しだけ安堵した。

彼との間に今まで築き上げてきたものの全てを、これから打ち壊すのだ。見捨てられるのも侮蔑されるのも覚悟の上だったが、今まで生死を互いに預けてきた人間として頼りない奴だったのだと思われるのだけは嫌だった。

「キャプテン。……抱いて下さい。」

握り締めた両手と不快に乾き切った唇が細かく震える。

俯いた視線に映る訳もない、緋色の髪の上官の硬直した姿が意識の中で嫌というほどにはつきり見えた気がした。

「……………一度だけでいいんです……………」

もう、これで何もがもが終わるのだから。成就し得ぬ運命に翳くいびつに歪んでいった恋心も。その醜い想いを彼自身に悟られ、彼の信頼と彼の存在そのものを失うことに怯え続け続けた日々も。

— 強引なほどに力強いのに、限りなく広く優しく、暖かい抱擁だった。

「……………そんな顔をするな、シニストラ。……………俺も同じだ。もうずっと前から。」

耳元で吹き込まれる言葉の意味を、頭のどこかでは理解しているような気がするのに、固く強張った心は容易くそれを受け入れようとはせず、信じられない思いでシニストラはデスクステラの言葉を聞いた。

「……………俺はまだ耐えられたから。おまえが自分の想いを拒絶していたのも知ってたから。だからおまえが自分で自分の想いを許容できるようになるまで、俺は待っているつもりだった。……………そんな顔をさせるつもりじゃなかった。そこまでおまえが苦しんでるとは知らなかったんだ。……………気付いてやれなかった。ごめんな。」

そうして続けて与えられた優しく深い接吻は、長い時間の間に醜く歪んでいたシニストラの心と想いを、その芯まで溶かし尽くし、どこまでも白く透明に浄化していったのだった。内から沸き上がる涙を零さないようにするのが、シニストラに出来た精一杯だった。

体中が震えて動けなくなつた自分を力強く抱え上げて運んだ両手が、ベッドの上を下ろされた今は恐怖を覚えるほどに甘く自分の服を解いてゆく。

「……愛してる。シニストラ。」

初めて与えられた、夢にすら思い描けなかつた言葉を恋い焦がれ続けた低い声が耳元で囁く。ぞくりと軀中を快感が走り抜けた。

「……俺も。俺も、あなたを愛してます。…キャプテン。」

強く抱き締められたその腕の中、殆ど体格が同じはずの自分の軀を酷く小さく頼りなく感じた。

それから後はもうかなり意識が朦朧としていて、部分部分しか、それも霞が掛かったよう

に臍げにしか思い出せないのだけど。

広い手は頃から背中、腕、指先、胸元も足も、全身に滑って愛撫されて、その全てにどうしようもなく感じている自分がいた。女みたいで情けない、そう思われたくなくて快感に歯を食いしばって耐えていたら、どこからどう悟られるものか、軽く口付けられて「我慢するな」と囁かれた。

「浅ましいなんて思わない。俺を感じてくれて嬉しい。おまえの全部をさらけ出してくれ。…なにもかもを知りたいんだ。」

その言葉に煽られ、胸の上に覆い被さってくる緋色の髪を強く掴みながら、キャプテン、と囁みしめるように零した声は、自分でも驚くほどに切羽詰まった色を帯びていた。

長い愛撫の後に指を挿れられた時、彼の紫の目は軽く驚きに見開いて、その視線に居た堪れなくなつたシニストラは目を固く瞑って顔を逸らした。

「……自分で解してきたのか……？」

具体的に言葉に顕されたそのの、あまりの身の置き所の無さに、是、とも言えずただ軀を強張らせる。万が一にも彼が、たとえ侮蔑と共にでも自分を抱いてくれるなら、彼の手を煩わせてはいけないと、そう思いつめて取つた行動だった。

翳い想いで彼の家に来る前に自らに施したその行為は、次第に解けていったその部分と逆にただ軀をどこまでも冷えさせ、まして快樂などは欠片も感じなかったのに。

「……もう二度と、そんなことはするなよ。…俺がおまえを溶かす楽しみが無くなる。」
そう告げられた瞬間、軀中が一瞬のうちに熱くなり、思わず身の裡の指を締め付けたら、微笑ましいと言わんばかりに彼は笑った。

その癖に、それからひたすら長い時間、彼の手は自分を溶かし続けて……別にシニストラの方からねだらせたかったという訳でもなく、ただ快感に身を振って意識を朦朧とさせる自分を見たかっただけのようだったが、散々指で探られて感じさせられて……あの時デクステラが一言でも懇願の言葉を口にするよう自分に強いていたなら、シニストラは身も世もなく全てを手放してデクステラを求めていたに違いなかった。

そうして長い時間をかけて溶かされた自分の軀が、ようやくデクステラに貫かれると、シニストラは視界を何度も白くスパークさせながら、自分を揺する腕の中にただ溺れ、キャプテン、と熱に浮かされたように何度も繰り返し目の前の自分を抱く男に呼びかける事しか出来なかった。

そうして冒頭の頭を抱える姿に辿りつく訳だけでも。

昨晚はどこで記憶が途切れたのか覚えが無い。

気がついたら、というか、目が覚めたら朝で、——カーテンの端を淡く光らせる窓の外の光の具合からして、一応早朝と言つていい程度には早い時間帯であるようだけれども——隣に緋色の髪のかの姿は無く……何処へ行ったのか、けれども確かにこの場所は夕べ彼に抱き上げられて運び入れられた彼の寝室で。

その事実に戻り深く頭を抱える。

そもそも朝まで彼の家で過ごす気など、毛頭なかったのに。

彼の侮蔑の視線を受けながら肅々と夜道を項垂れ帰るか、仮に抱いてもらつたにしてもいちど身を重ねれば大人しく早々に引き下がるつもりだった。疎まれる前に離れようと思つていた。彼の愛情を長い時間この身に受け続けるなど、傲慢も甚だしいことだと思つていた。なのに。

昨夜も一度はそうしようとしたのだ。

意識が飛びそうになるほど果てしなく甘苦しい律動の果てに、快樂の証を吐き出して、彼のそれを軀の中へ受け入れて。余韻にがくがくと震える軀と荒いままの呼吸の中、それでも彼から離れようとした自分の動きをデクステラの手が押し留めた。

「……どうして逃げる？」

力強い腕に上半身を軽く抱え上げられ絡め取られ、力が入らず仰け反る首を、それでもなんとかゆるゆると打ち振って否定の意を伝える。

ふわふわと舞う自分の長い髪の蒼を視界の端に見た。

「……シャワー……浴びないと……」

整わない荒い息の合間で切れ切れに呟いた。

「抱かれた後で俺と一緒に居るのは嫌か？」

もう一度、力を振り絞って首を振る。

「……俺のが……あなたが汚れる……」

そう伝えたら、自分の軀の上を伝っていた白濁をまるで思い知らされるようにぬるりと手でなぞられて、快樂の余韻にまだ感じ過ぎている肌のその感触にびくりと軀が跳ねた。

指に付いた自分のそれをさも愛しげに彼が口で舐め取る姿に、危うく気を失いそうになる。

「おまえが俺を受け入れてくれた証だ。……もつと欲しい。」

「キャプテン！」

なおも舌を動かそうとするデクステラの動作を必死で押し留めて、残念そうな表情をするデクステラに、ならばと抱き寄せてくる腕を留める術も無く、シニストラは大人しく想いに従った。

けれど自分の軀を引き寄せた腕は、呼吸を置く間もなく再び愛撫の動きとなる。

「キャプテン……」

「悪い。……足りない。」

俺だって相当我慢してたんだ、そう短く言い放ってふわりと覆い被さってくる軀に、魂の底から沸き上がってくるような歓びを覚えるシニストラがそれを止められる訳も無かった。

…その時はいい。その時だけなら。

「……どんな顔をして、顔を合わせればいいんですか……」

深い深い溜息を吐いて再び枕に沈む。

目が覚めた時、自分の置かれた状況を認識して力一杯狼狽えたが、同時に隣にデクステラの姿がなかった事に少しだけ安堵した。正直、顔を合わせていたらどんな表情をすればいいのか皆目見当が付かなかった。

女性のように照れたり顔を赤らめたりなど、男の自分がするにはあまりに情け無すぎてどうしようもなく嫌だ。けれど上手く躲かそうとするには匙加減が判らず、冷淡と見られそうなどほどの対応を取りそうで、というかこういう事で悩む今の状況そのものに幻暈がしそうだった。

デクステラが家から出掛けているのならその間に自分の隠れ家セーフハウスへ帰ろうかとも思ったけれど、それも無理そうだった。立とうとするだけでも四肢に力が入らずに膝が笑ったので、：
…それと、腰が。

デクステラの腕に導かれて散々乱れた昨夜の自分を思い出し、この朝何度目かの軀の火照りを自覚する。鏡があれば頬は真っ赤に違いない。

もう一度深く溜息を吐いて、ごろりと天井を仰いだところで、シーツの上に散らばる自分の髪が目映った。

青い流れの乗るシャンパンゴールド色のシーツは、シニストラが持たない色のものだった。確かにデクステラの家にいるのだと、まだ夢現のように信じられない思いでそつと滑らかな

色のシートを撫でる。

今朝何度めかの溜息が意図せず零れた所で、不意に涙が滲んだ。

……何時間か前までは、こんな幸福な悩みで溜息が出るなど思ってもいなかった。軽蔑されて、呆れられて、……何よりも誰よりも強く想い慕ってきたあの人を、永遠に失うのだと思っていた。

……幸せで涙が出るなんて、思ってもいなかった。

涙を流すのは自分の信条に反するけれど、今、この場所には誰もいないから。一人だから。零れるままの涙を今は自分に許そうと、そう考えて、シニストラはふわりと目を閉じた。

「……キャプテン」

もう一度、そつと呟く。

昨夜からの快い疲労を帯びた小さな泣き声は、やがて自然に穏やかな寝息へと変わっていった。

「……昨夜の疲れさせ方が足りなかったかな」

小さく独りごちて、デクステラはようやく寝室の扉を開いた。

自分のベッドの上には、目尻に淡く涙の筋を残して穏やかに眠る想い人がいる。

独りで狼狽えるシニストラの真つ最中に進入して慌てふためく姿も見てみたかったが、ここ何時間での状況の激変にまだ付いていけない様子の彼には少し可哀想かと思ったから、こ
うやってドアの前で少々くたびれるまで待つていたのだけれど。

長く豊かな蒼銀の髪を散らして眠るシニストラの、その表情は穏やかだった。手を伸ばして髪を一房掬い取り、目を閉じてそっと口付ける。

「……おまえ、本当に何も判っていないだろう……?」

この艶やかな流れ、凜々と立つ姿のぴんと伸びた背筋を彩る豊かな蒼色に、今まで自分がどれだけ恋い焦がれたか。自分の腕の中でその軀を抱いて、こうやって彼が自分の寢室、自分の見守る中で眠ってくればと、どれだけそう願ってきたことか。それが現実となつて叶つた今、想い描いていた想像を遙かに超えた歓びをどれだけ自分にもたらししたことか。

目の前で眠る彼の姿に、まるで少年のような胸の高鳴りを覚える自分の鼓動を聞かせてやりたいと心底思つた。

「……それもこれも、いつか、な。」

当然のように返事は無く、再びの疲労と安堵の中に昏々と眠り続ける小さな寢息が聞こえるだけだった。

小さく笑つた緋色の髪のコレクターは、その髪の一房を手を取つたまま、目の前の鮮やかに綺麗な恋人の姿をいつまでもただ見続けていた。

門からドアまで - From gates to the door -

第七門セブンスゲート研究所の実験は昼夜関係なく行われる。

……というよりも、昼と夜とでは生体のホルモン動態だの何だのも全然違ってくるので、完璧を期す——というか単なる研究ヲタクたちの集まりであるところのこの研究所では、「所有物」に対する実験が夜に行われることも別段珍しいことではなかった。

フォルシュングート研究員はそういう訳で、「所有物」の呼び出しのために薄灯りの廊下を歩いてきてこのドアの前まで辿り着いた訳である。

ノックをしようと軽く手を上げる。

「……………デクステラ……………んっ……………あ……………」

振り下ろす直前、甘い溜息混じりに漏れ聞こえてきた声に、フォルシュングート研究員の動作が止まった。

ドアに嵌め込まれた監視用の小窓から片目で覗き込めば、大して広くもない二人部屋の真

つ暗な室内で、辛うじて捉えられる睦み合うふたつの影。濃い色の素肌の背に、夜目にも滑らかに白い腕が絡んでいる。

ドアから一步身を引いて軽く肩をすくめると、フォルシユングート研究員は辿ってきた廊下をそのまま引き返した。

「今晚の実験予定は中止。」

小さく呟き、手にしていた電子ペーパーに書き入れた。

.....。

「.....行つてしまいましたか？」

「.....みたいだな。」

軽く身を捻って、薄灯りの漏れてくるドアの方を見遣り、そこに人影が無いことを確認した。デクステラはそのまま身を起こしてベッドサイドに腰掛ける。上半身は素肌だったが、下

はズボンをきっちり着込んでいた。

シニストラも起き上がってベッドヘッドに背もたれた。こちらも似たような格好である。瘦せてはいないが程よく細身の長い髪の麗人が、上半身だけ裸でいるというのもそれはそれでストイックな色っぽさがある。滑らかな肩から胸にかけての白い素肌が廊下から漏れ入る光に淡く光っていた。

ぎくりとしたデクステラは、パートナーに気付かれないよう急いで目を逸らした。

最初は単なる偶然だったのだ。

この第七門研究所——別名を「天国の扉」と称されるその研究所——に、特殊能力の開発のため二人で自ら足を踏み入れてから一月を数えようとした頃だったと思う。

どんなに凶悪な人体実験の類にも一度たりとて屈しなかったデクステラが、夜、部屋に帰ってから寝付いたのは、なんとも古典的に「風邪」という理由からであった。文明発祥より数千年紀、人類は地球を越えて宇宙をも征服したが、ナノ単位で細胞の中に入り込んでくるウイルスにはなかなか勝てないでいる。

熱の始めめらしく寒気に震えていて、けれど心配するシニストラの勧めを「研究員たちの世話にはなりたくない」と頑なに拒否してひとり自分のベッドで丸まって震えていたデクス

テラに、見かねたシニストラがせめてと同衾してデクステラの体をさすって温めてやったのだった（もちろん何も無い）。

熱の所為で、デクステラの息は荒かった。苦しいらしくなかなか寝付けないでいて、しょっちゅうごそごそ身を動かしていた。

普段なら絶対に他人には頼らない人が、熱で箍が外れていた所為もあるのか、震えていた時は「暖かい」、熱が本格的に出始めてからは「ひんやりして気持ちいい」と言って、子供のようシニストラにしがみ付いていた。

「デクステラ……」

それがあんまりにも可愛らしくて、思わず、けれど夢現のデクステラの妨げにならないように、シニストラは細く囁いた。

微笑ましいとか心配とかで、シニストラもその夜、ドアの外まで来ていた気配に気が付かなかった。

翌日の朝までにはデクステラの熱は下がっていた。冗談でなく体内の対ウイルス戦の時は、薬よりも何よりも本人の気力が物を言う（気合を入れると脳が免疫機能を高める各種ホルモンを分泌するので）。

だがしかし、実験のために呼び出されて研究室に入った途端、彼ら二人は次から次へと意

味不明の研究員たちの冷やかしを受ける破目になった。

「やゝデクステラ、とうとうヤったんだって？ そうだよなあ、思わず手も出したくなるよなあ、うん」

「……………は？」

と言う間もなく次の声が掛かる。

「体調はどうなんだ？ デクステラ」

「ああ、いや……………少し頭痛と熱が残っているが……………？」

「うっわゝゝそんなに激しかったのお！？ 溜まってたんだねゝ」

「…は？」

「今日は大丈夫かあ、シニストラ？ おまえは腰とかアツチとかか？、わははははは」

「あんまり乱暴に扱うんじゃないぞ、デクステラ。ま、多少は消耗するだろうが、後遺症の残らん程度にな」

その頃にはデクステラもシニストラもようやく事態を把握して、怒鳴り声で反論しようとしたデクステラだったが、

「あ、いいんだよいいんだよ別に、ていうかおまえたちがやるのはむしろ歓迎らしい。」

デクステラの怒りの気配を違う意味で取ったらしい研究員の一人が、宥めるようにそう言ったのだった。

「……はい？」

「だからなシニストラ、今、おまえたちを対象に実現化しようとしてる生体增幅機構ヒューマンシニストラシステムは本来、血縁関係とかの生体的に近い状態にある2個体を対象にしてるシステムなわけ。で、赤の他人なおまえらで実験が成功するためにはつまり、性交でも何でもやって心身共に同調シンクロステイクを図るのが一番なんだよ」

「せ、性交って……」

さばけた言いつぶりに口をばくばくさせたシニストラへ、追い討ちが掛かった。

「ま、そういう訳だから、気にせずいつでもしろってさ。大丈夫大丈夫、おまえたちの同調シンクロ形成の妨害要素になるから監視も付けやしねえって。で、その間、実験は延期。昨日の夜もひとつ中止になったんだぜ？」

「……え？」

うーんでもちよつと羨ましいかもなあ、はっはっは、と笑いながら立ち去っていく研究員の言葉をよそに、

……二人は目を見合わせた。

目を見れば、互いの考えていることは一目瞭然だった。
ツーとカーである。

この辺り、伊達にエストランド時代から何年もパートナーシップを組んでいない。

特殊能力を開発するため、自分たちから進んで、……とは言え、二人にだって実験をやりたいくない（というか、やらされたくない）時もある。しんどいと言うよりめんどい時とか。休みたい時もあるしだからだ。二人だって人間だった。

今までは、一切自分たちの自由にならなかった。研究所に入る際の同意書で、自分たちを対象としたその人体実験が成功するまでは銀河市民としての人權を全て放棄した「所有物」としての彼らに、実験の日時や時間帯に関する選択権など与えられていなかったのだ。けれど。

今の研究員たちの言葉からすると……

（……………誤解させておいたままの方が、便利かも……………）

目を見合わせ、無言のままに同じ言葉を交わす。

呼び出しの時に「している」振りをすれば、オヤスミになるのである。自分たちの都合のいい好きな時に。

どうやらこれは、この研究所で二人が初めて手にしたらしい舵だった。

という訳で、今夜実行したその擬態を今までも何度か繰り返してきた二人だったりする。またそれが、『エニウエア』『ウエネヴァ』と仮称されている、最近とみに彼らの中で大きくなりつつあった特殊能力の形成のために思わぬ効を奏した。どちらかが、あるいは互いが実験面倒だなあとと思うその日、シニストラの能力で何時ごろに次の実験のための呼び出しがあるか、デクステラの能力で研究員の誰が何処に居て、どの辺りを歩いてきているか、大体判るようになってきていたのだった。まさかそういうことで自分たちの能力が研鑽されるとは全く以ってお釈迦様でも知らぬ仏のお富さんである。

……だがしかし。

無意識の欲求に、デクステラは再びベッドヘッドに背もたれたままのシニストラの方へ目を遣った。

暗闇に浮かび上がる仄かな白い肌。腕、背中から腰にかけてのしなやかなライン。ジーン

ズの裾から覗く細い足首。

自分を見るデクステラの気配に気が付いたシニストラが、ふっと空色の瞳をデクステラに向けた。体の動きに長い蒼銀の髪が肌の上を滑った。

その光景に、自分の指が滑る感触を重ねて想像する。瞬間、沸いた身の内の熱にデクステラは思わず体を竦ませて目を逸らした。

閉鎖された環境。

雄の本能の欲求を解消する機会も、何ヶ月と無く。

何よりも——何年も生死を共にしてきた、憎からず想うただ一人の相手と、振りだけでもそういう事をしていれば、日ごとに蓄積されてゆく熱が体の中に籠もるのは当然のことだった。

自分の軀の下で組み敷かれる細い軀。

自分の背中に廻った腕の感触。指の感触。

「……………あ……………ふ……………デクステラ……………」

熱い溜息混じりの甘い声が耳元で囁く。

その全てが演技と知っていても、背筋を内側から熱で撫で上げられるような衝動に、本気で抱き殺すほどに抱きたいと何度思ったか数え切れなかった。

対するシニストラの方も、大して事情に変わりはない。

デクステラに対して長年の強い尊崇と共犯者のような連帯感を持つてはいても、それに恋愛感情を全く含んでこなかった彼にとつて、研究員たちから当たり前のようにそういう関係、それからいわゆる「自分が下の役」だと思われたのは結構な驚きだったが、そういう振りを続けているうちにそれも段々と違和感なく……を通り越した自分に気が付いた時には後の祭りだった。

覆い被さってくる軀の重みを愛しいと思う。上半身だけ、けれど素肌の触れ合う熱の暖かさを嬉しいと思う。

睦み合う演技の途中で時々ふと注がれる、僅かに細めた紫の瞳の……本物の恋情のように錯覚しそうになる視線を、もっと欲しいと思う。……侵食されたいと思う。

夜、とりわけてそういう演技をした日の夜中、シニストラが寝付いた頃に離れたデクステラのベッドの方で一人している気配があつて（まあ男だからね）、無意識に、勿体無い、とか思っていて、

(どうせなら、俺の軀を内側までじつとり濡らしてほしいのに……………)
なんて考えたりにしていた。

そのいちいちの自分の想いに自分で気が付くたび、死ぬほど一人で狼狽えた。特に最後のひとつには本気で死にたくなるほど落ち込んだ。

いつも同じパターンだと疑われるかもしれない、ということ、呼び出しに来た研究員が耳を敬てるタイミングに合わせて、睦言のバリエーションを変えてみたことがある。

「……………シニストラ……………イイ、か……………？」

(……………何て事を訊くんですかあなたはつつっ！)

「……………デクステラ……………っん、……………もつと……………」

(……………そんな声出すんじゃないやねえ！ 勃つだろうが！)

双方ともが、深く後悔した出来事だった。

その辺り、互いに全く気がついてないところが最大の問題だったりする。

無意識に吐いた溜息は、二人分ふたつが綺麗に重なって薄暗い室内を揺らした。思わず視線を上げて互いに目を合わせて、気まずい空気に再び顔を反らす。

(こいつは

(この人は

} こんな事、早く辞めたいと思ってるんだろうな……)

(……あ、そうだ、でも)

「もうすぐ、こんな生活も終わりますね」

重苦しい空気を振り払うように、咄嗟にシニストラがことさら明るく話し掛けた。

生体増幅機構ヒト・マウス・ケルフィッシュ・クマ・クマによる彼らの特殊能力の開発はほぼ完成に近づいてきていた。あともう一段階の進捗があれば、能力に関する総括データを収集した後で出所する事になるだろう、とプロフェート管理官から聞いている。

だが、デクステラはパートナーの言葉にぎよつとしたように目を見開いて身を強張らせた。シニストラも、自分の言葉の意味する所に自ら気がついて体を硬直させた。

(もうすぐ終わる……………)

もう、関係のあるような行為を演じる必要はなくなるのだと。

ここを出れば、たとえ演技であったにせよ、たとえ一時の事であったにせよ、確かな喜びと共に触れていた相手の軀に手を伸ばす機会はなくなるのだと——。

不意に陥れられた未来の苦しさに、眩暈がしそうだった。

……好きだ。
こいつが好きだ。
この人が好きだ。

思う互いの想いに、気がつく術はまだ無い。

(……やっぱり、こいつは嫌だったんだろうな。こんなに明るい顔をして……)
「……そうだな、早く終わればいいな。」

(……ああ、やっぱりこの人は嫌だったんだ。……そう、だよな。)

「……そう、ですね。早く……終われば、いいですね。」

先にかつとしたのはデクステラの方だった。

自分が言ったはずの言葉をそのまま返されて、理不尽な怒りが込み上げる。

(……そんなにおまえは嫌だったのか。早く終われば、なんて——)

早く終わる。

ふと気がついて我に返った。

「……なあ、軀の繋がり……って、本当に俺たちの特殊能力の開発に役立つのか？」

「え？」

きよとんとした顔でシニストラが見返してくる。

「結局、俺たちはそういう……関係を持たずに、ほぼ特殊能力開発の実験に成功した訳だよな」

「そうですね」

「だったら、本当に関係を持っていたとしたら、もっと早く能力を手に入れられたのか？」

「さあ……………」

本気で考え込んだらしいシニストラへ、さらりと言えたのは奇跡としか言い様が無かった。

「試してみるか？」

「…………え？」

2拍と四分の三ほど遅れてシニストラが問い返す。

「おまえが嫌じゃなければ、だが。」

その言葉の意図するところに気が付いて、慌ててシニストラが返事を返す。

「いえ、俺は別に嫌じゃないです」

「あと一息とはいえ、早いに越したことは無い。GOTT局長も俺たちの帰りを待ってくださっている」

表面上は平静に見えていても、自分の思わず口走った言葉に、デクステラ自身が内心相当混乱していた。GOTTだろうが局長だろうが何でもよかったのだ、自分の提案を言い繕う言い訳があれば。

「ええ、はい、俺は良いです。大丈夫です」

シニストラも相当に狼狽えている。

次の動きをお互いが考えあぐねる奇妙な間が一瞬流れた。

「じゃあ……………」

「はい、あの、宜しくお願いします」

(~~~~~)宜しくお願いしますって何がだつ

自分の狼狽ぶりに泣きたくなるシニストラだった。

混乱を極めたシニストラを、力強い手がふわりと不思議な柔らかさで引き寄せる。

一気にシニストラの軀が熱くなった。脈打つ鼓動の速さは尋常ではない。

何度も想い描いていた状況であるからこそ、強張る体の硬さはどうしようもなかった。

「デクステラ……………」

導かれてベッドの上に抱き敷かれてゆく途中で呼び掛けた名前は、我知らず、囁きのよう
な声になった。

「心配するな。…力を抜け……………」

耳元で注ぎ込まれる低い低い声は、その威力を余すところなく存分に発揮していた。ぞく
りと軀の奥が疼く。

この浸食される感覚。ずっと欲しかった……………」

「俺に任せればいいから……………」

自分の腕の中でくたりと力を失ったように、従順に自分へ身を委ねたシニストラの肌の熱
さに、デクステラも眩暈を覚えていた。

長い長い間、恋焦がれていたのだ。艶やかな髪。滑らかな肌。揺れる瞳。

何度も重ね合わせたはずの肌の感触さえ、今までとは全く違うような気がして、現実かど
うか確認するようにシニストラの胸から腰にかけての皇すべらかな肌を手で辿った。

「……………つ……………あ……………——デクステ……………」

密やかに上がった声は、かつて聴いた声と比べ物にならないほど、細く小さく、——甘
い響きを帯びていた。

僅かに残っていたデクステラの理性は、そこで音を立てて切れた。

「……今日はまた、ずいぶん燃えてるみたいね、あの二人。」

管理棟の方にまで遠く響いてきた高く細い声をBGMに、プロフェート女史は婚約者の淹れた伝統的なグリーンティを啜った。

「こつちの方まで聞こえてくるって初めて？ さっきはそうでもなかったみたいだけどなあ」

何かあったのかねえ、とフォルシユングート研究員はからからと笑う。

「……明日の予定に、総データ収集、入れておいて頂戴。染色体地図化、身体検査、精神検査、他のも全部セットでね。」

彼女のその言葉の意とする所を知る彼は、怪訝そうに眉をひそめた。……完了、ということだ。

「明日？ 本当に？」

朝になれば彼らの特殊能力が完成されているということ？

「もう間もなくよ、彼らも、……私たちもね」

柔らかい表情は、心を交わす相手にだけに見せる微笑だ。

思わずやに下がったフォルシユングートの耳に、もう一度、高い声が微かに聞こえてきた。

「……ま、夜勤の身には辛いよなあ」

「あら、私と一緒に仕事を言う？」

「一緒だからこそ、だろ？」

そこで辞めておけばいいものを、

「……………まあ、シニストラくらい綺麗だったら、一度は抱いてみたいとか思わないこともないけどな」

なんて言うものだから。

むっとした表情を巧みに隠し、プロフェート管理官は軽く小指を噛みながら、妖艶に呟いてみせた。

「そうねえ……………私もデクステラくらいの男なら、一度は抱かれてみたいかもねえ……………」
その言葉にぎよっとする婚約者を、横目で眺めて満足する。

とにもかくにも。
おめでとう。

門カドをくぐってからというもの、扉ドアに辿り着くまでにやたらと長い時間を要した二人は、この時になって、ようやく天国を見たということでした。

……が、しかし。

物語は、めでたしめでたし、で終わらない。

結局最後まで自分たちの気持ちを明かさなかった二人が、余計にややこしくなった彼ら自身の関係とその事態に気が付いてから後の事は、また別のお話。

別の時、別の場所で語りましょう。

千年たつても

今よりずっとみらいのこと、あしたよりもあさつてよりも、つぎの春よりも夏よりも、ら
いねんよりもずっと先のお話です。

あるところに赤い髪のひとつ、青い髪のひとつがいました。ふたりは同じところではたらい
ているともだちでした。

ふたりはとつても仲良しでした。

でも赤い髪のひとつは、それよりもずっとずっと青い髪のひとつがすきでした。いまよりもず
っとずっと仲良しになりたいと思っていました。でもそれを青い髪のひとつにいうことができ
ませんでした。

青い髪のひとつも、ずっとずっと赤い髪のひとつがすきでした。いまよりもずっとずっと仲良
しになりたいと思っていました。でもそれを赤い髪のひとつにいうことができませんでした。

そんなふたりの、ある日のお仕事のことです。

青い髪の毛がけがをしてしまいました。赤い髪の毛は助けてあげようと思いました。けれど青い髪の毛とは、自分でできるからと赤い髪の毛の申し出をことわってしまいました。

青い髪の毛とは赤い髪の毛のにきらわれたくなかったので、たよりないと思われなくなかったのです。

いたみどめとねむりぐすりを飲んで、青い髪の毛のひとは家に帰ってねむりました。

赤い髪の毛のひとはその日もいま以上に仲良くなれなかったことをかなしく思いながら、家に帰ってねむりました。

次の日、赤い髪の毛のひとはおしごとばに行きました。けれどいつまでまっても、青い髪の毛のひとがきませんでした。

赤い髪の毛のひとが青い髪の毛のひとのおうちに行くと、青い髪の毛のひとはまだねむっていました。ねむりぐすりがすこしききすぎたのだと赤い髪の毛のひとは思いました。でもいつまでたっても、ねむりぐすりがきれいさっぱりきかなくなるころになっても、どんなにまっても青い髪

のひとはめざめませんでした。

赤い髪のはと青い髪のはとをびよういんへつれていきました。

でもたくさんたくさんむずかしいけんさをして、いろんなおくりをつかっても、どんなにえらいお医者さんがみても、青い髪のはとはめをさましませんでした。ずっとずっとねむっていました。

とうとう赤い髪のはとは、おなじお仕事をしているともだちに、青い髪のはこのころのなかをみせてもらうことにしました。

まだ仲良くなっていないのに、そのひとのゆるしもないのに、およばれもされていないのに、青い髪のはこのころの中をのぞきみるのはすこしかなしくてつらいことでした。でも赤い髪のはとにとっては、ほかにどうしようもなかったのです。

そうしてみせてもらった青い髪のはこのころの中には、ふしぎなけしきが映っていました。

青い髪のはこのころのなかには、青い髪のはとしんのすがたが映っていました。青い髪のはこのころのなかの青い髪のはとは、やっぱりおなじようにねむっていました。

青い髪のはとは、こころのなかで、夢みている夢をみていたのです。

どうして青い髪のはとがそんな夢をみているのか、赤い髪のはとにはさっぱりわかりませんでした。

もうけんさもおくすりも、なにもつかえるものがなかったので、赤い髪のはとは青い髪のはとをおうちへつれてかえりました。

けれどじぶんのおうちへつれてかえり、じぶんのベッドに青い髪のはとをねかせたとき、赤い髪のはとはふとおもいだしたのです。

青い髪のはとがけがをしたとき、赤い髪のはとはこう考えたのです。

青い髪のはとが、けがのせいできをうしなつて、たおれたりしたら、じぶんがやさしく手当てをしてあげられるのにな、と。

青い髪のはとは、ふしぎなちからをもっていました。みらいのことがみえるちからです。青い髪のはとには、みらいがみえてしまったのです。たおれた青い髪のはとをやさしくしたいと思った赤い髪のはとの、こころが作ったみらいでした。

赤い髪の毛とともつと仲良くなりたいたいと思つていた青い髪の毛のひとは、だからねむつてしまったのです。ねむつたままでもいいから赤い髪の毛のひともつとちかく、もつと仲良くなりたいたいと思つたのです。だからねむつてしまったのです。

そうしてねむつたまま、ねむっているじぶんとやさしくしてくれている赤い髪の毛のひとの夢をみているのです。ずっとずっとみているのです。

赤い髪の毛のひとはそのことに気がついたのです。だから青い髪の毛のひとをねむりからめざめさせようと思ひました。

どうやって？ いいえ、かんたんなことです。

ねむつた青い髪の毛のひとにやさしくしたいと思つたのは、赤い髪の毛のひとのところ。だからおこすのも、赤い髪の毛のひとのところがあればいいのです。

「おまえがおきたら、もつともつと仲良くなろう。いままで話せなかつたいろんなことを話して、いままで行けなかつたいろんなところに行つて、いままでみれなかつたいろんなものをみよう。だからおきておいで、おれのだいじなひと。」赤い髪の毛のひとはそつといいました。

青い髪のはとはきれいななみだのしずくをひとつこぼして、なみだのしずくとおなじ色のめをひらきました。

それからふたりは、ゆびきりをして、千年たってもいっしょにしていることをやくそくしました。そのほかにもたくさんたくさんいろんなことを話して、たくさんのおやくそくをしました。でもそのぜんぶをきいたのは夜空でひかるお星様たちだけでした。

至天門

3

コーディング

en・code

— v. 符号化する，暗号文にする.

de・code

— v. 暗号(code)を解く，復号する.

1

「デクステラ！」

いた。見つけた。

やっぱりこっちの方にいたんだ。

廊下を歩いてた緋色の短髪の後姿が、私の呼びかけに立ち止まって振り向いた。GOTTの本局ビルの中、ESメンバー専用区画のこのあたりには、他の人の気配もほとんどない。

歩みを止めたデクステラの方へ、私は駆け寄っていった。彼はいつもどおりの冷静な様子で——ちよつと悪く言えば、無愛想な表情で？——私を待っていてくれる。手には書類の束なんかを持ってたりしてた。

やっぱり、今日も普段通りに仕事をしてたんだろうと思う。特務と特務の間、私たちの場合は受付嬢として勤務する期間だけど、彼の場合はGOTT・ESメンバーの長としての面倒なデスクワークとか、ブランやメアリーアンたちと協力しながらの諜報活動のチーフの仕事とか。

予想はしてたけど、本当にいつもと全然変わらないその姿に、すごいなあ、と素直に思っ

た。この人は本当に仕事熱心で、真つ直ぐで、曲がったことが大嫌い、潔癖で、——いつも冷静沈着で。

…そう、だけど。素直に感心する、それとは別の、どこか心の奥で、——そう、確かに、私は少し失望していた。

彼の所に早足で近づきながら、そんなことを考える。それが表面に出ないよう、心を取り繕った。

「ね、今からリュミエールたちの所へ行こうと思ってるの。——一緒に行かない？」

彼の横に着いて開口一番、私はそう言った。笑顔が壊れないように、自然に聞こえるように気を付ける。

もちろん、私が聞きたかったのはYESの返事だったのだ。けど。

「いや、遠慮しておく」

何の躊躇いもなく、そういう答が返ってきた。全然変わらない、微動だにしない表情。

…なんとなく、そう答えるだろうとは思ってた。思ってたんだけど。気を払ってたんだけど。

私はだんだん、やるせない気分になってきて——自分の顔から笑いが消えていくのを感じた。

彼は間違えてない。正しいんだと思う。でも。

「……パートナーの事が……心配じゃないの？」

私は見上げるようにしてそう訊いた。けど、デクステラは黙って、窓の外の景色を見ている。

今、本局ビル地下の特殊医療室の治療用カプセルに入っているのは、リュミエールだけじゃなかったのだ。

目の前の、緋色の髪を持つこの人のパートナーも……というより、あの蒼い長い髪の綺麗なひとが《ウェネヴァ》の能力でリュミエールの危険を予知して、庇ってくれたからこそ、リュミエールは大怪我を負わずに済んだのだけ。

かえって、あのひとの——シニストラの怪我の方が酷かったくらいだった。もう少しでエクリプス局長の《エンコード》の能力が必要になるところだった、って医療部の人から聞いている。

「…俺たちが行ったところで、何が出来る訳でもない」

「……………」

なのに、デクステラのその言葉は——諦めというよりも、どこか突き放したような言い方だった。知らず知らずのうちに、私の視線はデクステラから外れて俯き加減になる。

…判ってる。私が行っても、デクステラが行っても、宇宙で一番って言っていいくらい優

秀なスタッフの集められた特殊医療室で、私たちが出来る事なんて何もない。パートナーはカプセルの保護液の中で眠ってるし、することと言ったらせいぜいガラスの外からその姿を見るくらいだけだ。

「おまえだけで行ってくればいい、受付は基本的に二人一組だから今のうちに休んでおくのも悪くはない。俺はシニストラのいない分も遣る仕事がある」

きゆう、と私はてのひらを握り締めた。デクステラの言いたい事は判る。でも、でも、違うの。

聞きたいのは、そんな事じゃなかった。

「……私、あなたの事はESメンバーのリーダーとして尊敬してるんだけど……そういうとこだけは、好きになれないの」

——私が口出しして良いような事じゃないって判ってたけど、どうしても言わずにはいられなかった。

「パートナーの事が……大切じゃないの？」

思い切って、ゆっくり顔を上げた。デクステラの顔を見た。

デクステラも、私を見た。

——言いたい事はそれだけかって、言ってるような目をしてた。

普段と何ひとつ変わることもなく歩き去っていく後姿に、私はもう何も掛ける言葉を持って
いなかった。

2

「ほんつと、デクちゃんたらシニちゃんに冷たいわよね。どうしてああなのかしら？」
ヴァイオラさんの明るい声がGOTT本局ビルの天井の高い正面ホールに大きく響いて、ちよつとむくれたようなその様子がそれはそれでとても可愛らしかったのですけれど、

「ヴァイオラさん、女の子はエレガントに」

私がそう軽く注意を差し上げたら、ヴァイオラさんたら、小さな舌をぺろりと見せて「えへへ」と笑うものですから、私も思わずつられて笑ってしまいました。

「それに、デクステラさんの仰る事にも一理ありますし……」

「でもでもお、デクちゃん、シニちゃんが怪我してる間、ほんつとくに全つ然様子を見に行かないんだつてよ？ いくら仕事があるからつていつても、一度くらい顔を出したつてバチは当たらないと思うけど？」

「まあ、それはそうですわね……」

「私なんか、シザーリオが怪我したらずうつとそばについて見ててあげるのにな。ね、シザーリオもそうでしょう？」

くるん、とヴァイオラさんが振り返った先、私たちから少し離れて立ってらっしゃったシザリーオさんは、ヴァイオラさんのその言葉に小さく頷きました。ヴァイオラさんはとても嬉しそうに、満面の笑顔を浮かべます。

——思わずこちらが嬉しくなるような、そんなお二人のご様子でした。

幸いなことにお昼前のこの時間には、外来のお客様もほとんどいらっしゃいませんでした。手持ち無沙汰気味の受付にいらっしゃったヴァイオラさんは、小さな身体でカウンターにびよこびよここと飛び乗ったりしています。

「ヴァイオラ、あなたたちの半分でもいいから、あのペアが仲良くしてくれればいいのよね……」

そんな私たちの横で、エクレールがまたひとつ、小さな溜息を重ねました。

その様子に、私もヴァイオラさんも、何とは無しに笑いが消え、無言になってしまいました。た。

——珍しく、今回のエクレールの気落ちは長引いているようでした。

済んだことも先のことも、本来あまり気に病まないはずの彼女の、滅多に見る事の無い沈んだ様子に、私はどうしても心配にならざるを得ませんでした。見ればヴァイオラさんも、

ずいぶんと気遣わしげにエクレールを見ています。

エクレールが普段、自分の力任せに頼りすぎてあまりに後先のことを考えなさ過ぎるのもそれはそれで困りものなのですが、こうしているとやはりそちらの方がずっと自然で喜ばしいことなのだと感じました。

エクレールは口にはしませんが、彼女が今回これだけ気落ちしているのは、私がそれなりの、つまりは自分たちの力だけではどうにもならず、GOTTの特殊医療部に頼らなければならなくなるような大きい怪我をした事も、ひとつの誘引になっていたようでした。私たちが能力の關係上——私が《パペット》で論理面から、エクレールが《パワー》で物理面から事態に当たるといふ關係上——私の身体面の防護というものについて、彼女は自分の責務であると考えているらしく、そういった中で私の方が大きい怪我を負ったことについて、私が治療を受けている間、ずいぶんと自分を責めていたようです。

——形の上で反論はしてみたものの、心情から言えば、私もエクレールやヴァイオラさんの意見に同感でした。

例えエクリップス局長の《エンコード》——魂の量子化、そして再生された肉体にデータ化された魂を組み込み直す作業、怪我の程度がそれら一連の複雑な作業を必要とするものでも、パートナーの快復を待つ思いというのは、いつも心を引き絞られるように切実なものです。私にも覚えのあることでした。

そんな中でのデクステラさんの発言は、怪我をしたパートナーに対する思い遣りの欠けた発言のようにも取れ、エクレールにとつてずいぶんとショックだったようです。

一方でそういった反応は、ある意味、予想の範囲内の、彼らしいいつもの態度であったと言えるかもしれません。

GOTT局長の両腕、双壁と称される最上級ESメンバーペアのあのお二人は、今回の出来事に端的に顕されたように――傍から見ても首を傾げざるを得ないほど、心理的な結び付きというものが欠落していたのです。

それは特務の際にお二人が見せる、驚異的なまでの連携行動の完璧さとは奇妙に解離していて、私たちESメンバーの誰もが不思議に思いながらも、長い年月そうであったらしいお二人の様子に、それが彼らの在りようなのだろうか、と、納得のいかないままにも認めざるを得ないような事実だったのでした。

「ペアっていうか、問題はシニちゃんより、デクちゃんの方よねえ……」

ヴァイオラさんの言葉に、私は小さく頷きました。彼女の言いたい事はなんとなく判りました。

「シニちゃんの方は、デクちゃんが怪我したら時々メディカルセンターに様子を見に行つてるみたいだもんね。それにシニちゃんはいつもここにこゝ、って感じなのに、デクちゃんたらシニちゃんにすごい無愛想でさ。」

まあシニちゃん相手に限ったことじゃないけど、とヴァイオラさんは小さく呟いてから、「シニちゃんてばあんなに綺麗で優しいのに、デクちゃんは何が気に入らな……」
そう続けた言葉は、シザリーオさんの、くいくい、とケーブを引っ張る手に遮られました。
無言のままにシザリーオさんが目線だけで促した方向に、その場の全員が目を遣ると、――
正面玄関の大きな一枚硝子の扉をくぐって、ビルの中へと入って来られたデクステラさんとシニストラさんの姿がありました。

3

私とエクレールは、思わず顔を見合わせました。

声を掛けようか、掛けまいか。今の話で、この状況です。私もエクレールも戸惑うのは当然と言えたでしょう。

ですが次の瞬間、私達のそんな躊躇は、ヴァイオラさんの「シニちゃくくくん！」というとても良く通る澄んだ声にあっさり覆されてしまいました。

「ヴァイオラ」

パートナーの数歩後ろを歩いていたシニストラさんは、ヴァイオラさんの声にこちらを見、

それから早足で私たちのほうへとやってきて下さいました。デクステラさんは別段、歩みを速めるでもなく、シニストラさんの背後でゆっくりとこちらに向かっておられます。

「シニちゃん、元気になったの？」

「ええ、ヴァイオラ、この通りだよ。心配かけたかな、済まなかったね。リュミエールも元氣そうで何よりだ。」

いつもの涼やかな声と笑顔でヴァイオラさんに明るく返事なされたシニストラさんは、そうして私の方を向いてそう声を掛けて下さいました。私とシニストラさんは、メデイカルセンターでの治療が終わった時以来の再会です。

「はい、お陰様で。シニストラさん、その節は本当にありがとうございました。」

「いや、君に大事が無くて良かったよ」

「シニストラ、ほんとに……ありがとう。リュミエールを助けてくれて。」

笑顔で歓談する私達に、少し緊張がほぐれたのか、表情を和らげてそうシニストラさんに話し掛けたエクレールに、シニストラさんはただ、にこり、と、すっかりした笑みを返して下さいました。

……いつもの事とは言え、シニストラさんの微笑みは、見る人を安心させる暖かさで芯の強さがあります。

傍らにいれば、誰でも嬉しくなるような、そんな笑顔。——だからこそ、そのシニストラ

さんへ笑いかけない、——解釈のしよによつては、思い遣りが無いとも取れるデクステラさんの所作が、誰も皆、不思議に感じるのです。

そのデクステラさんは、私達から数メートルの距離を残した所で、それ以上こちらに近づく様子もなく、それからシニストラさんを交えた私達の会話に混じろうとする様子もなく、その場で立ち止まっていらつしやいます。

シニストラさんの方へ向き直っていたヴァイオラさんは、先程まで姿の見えていたはずのデクステラさんが一向に視界に現れないのを訝しんだのか、くるりと振り返って周囲を見渡し、——少し離れた所のデクステラさんのその姿を認めると、すうと眉根を寄せ、御歳相應のごく素直ないらだちの表情を見せました。

一瞬交差したデクステラさんとヴァイオラさんの視線の間、ぱちりと空気が爆ぜたような感触が私の肌に刺さりました。

——その瞬間、私の奥底の部分で、とても悪い予感がしました。

予想されていたはずのヴァイオラさんのその反応を、止めるべきではなかったのかと。

シニストラさん、デクステラさんに多少不自然に思われても、予めこうなると判っていたヴァイオラさんのその素直さを、今は抑えるべきではなかったのかと。

後悔のような、しかし不可解な、そんな負の感情が私の中を流れた直後、ヴァイオラさんが表情そのままを声にしたような口調でデクステラさんに声を投げ掛けていました。

「ちよつと、デクちゃんたら、またそんな所で！ 聞いたわよ、今度もシニちゃんのお見舞いに一度も行かなかったんですって？」

ヴァイオラさんのその言葉に、デクステラさんは眉ひとつ表情ひとつ動かさず、——そしてヴァイオラさんと目を合わせないまま、

「ヴァイオラ、その呼び方はどうにかしてくれと言ってるだろう」と、奇妙なほどに平坦な声音で返事なさいました。

ヴァイオラさんは一向にひるむ様子も無く、それどころか小さなお体でずんずんとご自分より遥かに背の高いデクステラさんの方へと歩み寄って行きます。

「何言ってるの、デクちゃんはデクちゃんでしょ、そんなことより！ どーしてシニちゃんの様子、見に行つてあげなかったの？」

「ヴァイオラ」

言い募るヴァイオラさんを言葉半ばで留めたのは、シニストラさんのその声でした。

「デクステラは俺のいない間の膨大な量の仕事を一人で引き受けてくれていたんだ、俺は申し訳なく思ってるんだよ」

「シニちゃんは黙ってなさい」

くるりと振り返りざま、ぴしゃり、と。ヴァイオラさんは鋭く言い切りました。取り付く島も無いとはこのことでしょうか。

シニストラさんが何と返事してよいものか戸惑っていらつしやるらしい、その間に、ヴァイオラさんはデクステラさんの方へと完全に向き直ってしまいました。

「シニちゃんが何と言おうが私は納得しないんだからね。パートナーが大怪我してるのに心配にならないなんて信じられない！」

「自分がやるべきことをやったまでだ」

「あーもう、ほんとに融通きかないんだから！」

無表情に答えるデクステラさんに、苛々とヴァイオラさんが頭を搔き抱えて言葉を重ねます。

「こんな調子だったら、デクちゃんとシニちゃんがパートナー以上の深いごカンケイなんて噂、絶対嘘ね！」

噂。そう、シニストラさんの涼やかな容姿の所為なのか、傍目にもそれとなく知れる。パートナーへの細やかな心遣いの所為なのか、私達にもそういう噂は時折耳に聞こえてきていました。

そんな噂は、彼らの在り様を知れば知るほど否定的に思えてくる、他愛の無い噂だったのですが。

ふ、と。デクステラさんの気配が揺れたかと思うと、初めてヴァイオラさんの方へ視線を向け、——笑いました。

恐ろしいまでに、酷薄に。

「——判ってくれて嬉しいよ、ヴァイオラ。……俺はその手の噂が『大』嫌いでね。」

きわめて酷薄に。

唇の端をうつつすらと上げて、デクステラさんは笑いました。

底知れないほどの嫌悪感。

GOTT・ESメンバーの最高位にある彼の、表情の奥にはそんな感情が渦巻いていました。

駄目だ、いけない、早く止めなければ。そんな言葉が私の頭の奥で繰り返し鳴り響きましたが、背筋の冷たさで凍りついたかのように私の足は1mmたりとも動きませんでした。——動かさせませんでした。

隣のエクレールからも、威圧されて固く小さく身を竦ませている気配が伝わってきます。視線の先、デクステラさんの冷笑を真正面から浴びたヴァイオラさんは、——先ほどまでの澁刺さが嘘のように、真つ青な表情で小さく固く怯え切って、細かく肩を震わせていました。

……場を動かしたのは、す、と、凍りついた景色の中を緩やかに流れた蒼く長い髪でした。

「——デクステラ」

デクステラさんの冷たい視線を遮るように。

両手を広げて、ヴァイオラさんの前に立つシニストラさんがそこにいらっしやいました。デクステラさんは、その酷薄な表情をすうと消してシニストラさんを真っ直ぐ見据えましました。

GOTT最上級ペアの対立は、ぎしりと空気が軋むかのような緊張感を伴って。

しかしその攻防は、ほんのわずか一瞬で過ぎ去り、デクステラさんはいと視線を外すと、

私達のほうへと背を向け、ゆっくりホール端の階段の方へと歩き始めました。

「……シニストラ」

渴いた声で、エクレールが小さく呼びました。

私達の方へと振り返ったシニストラさんは、

「ヴァイオラ、エクレール、リュミエール、済まないね。彼は少し潔癖症が強すぎて……そういう冗談をとっても嫌うんだよ」

そう仰って、困ったような表情を緋い混ぜ、穏やかに私たちへと笑い掛けてくださいました。

ヴァイオラさんは青い顔のまま、まだ小刻みに身体を震わせています。シニストラさんはヴァイオラさんの肩に手を添え、何かを話し掛けようとしたが、デクステラさんは御先にどんどんと階段を上ってゆかれていくところでした。

シニストラさんは遠く離れたデクステラさんの背中を仰ぎ見て、今度は本当に困った顔をされてから、表情を改めると

「シザーリオ、すまない、ヴァイオラを頼むよ」

私達から少し離れた所に居たシザーリオさんに、そう声を掛けました。

小さく、けれどしっかりと頷いたシザーリオさんに、シニストラさんは小さく笑い掛ける
と、先に視界から消えたデクステラさんの後を追ってゆかれました。

シニストラさんの軽い靴音がロビーに響き、やがてそれもフェードアウトしてゆきました。

——私もエクレールも、ヴァイオラさんも、その間、硬く固まったままでした。

ふらふらふら、と、ヴァイオラさんがその場にうずくまり、私とエクレールはとても驚きました。

「ヴァイオラ!？」

「ヴァイオラさん!？」

私達は慌てて受付カウンターの左右を回り込み、ヴァイオラさんの方へと走り出しました。歩み寄ってきたシザリオさんが、わずかに屈んで、ヴァイオラさんの肩に手を置きます。その肩はまだ小さく震えていました。

「ヴァイオ——」

慌てたエクレールがヴァイオラさんへ両手を差し伸べようとした、その時。

がばっ、と、ヴァイオラさんは顔を上げて——

4

「デクちゃんったら、何よ~~~~~~~~つ!!!!」

……強がって、そんな言葉を思いっきり叫んでみたけど。

恐かった。

ほんとに恐かった。

デクちゃんは恐い人だって、だからあんまりからかっちゃいけないって、シザーリオが昔から教えてくれたことが、本当の意味でわかった気がした。

なのに、私は——シザーリオの忠告を、また聞かなかったのだ。

「ぱかっ」といい音がした。

シザリーリオが物言いたげな顔で、ケースの蓋を開けた私のほうを見ている（実際のところはシザリーリオの表情なんて全然普段と変わりないんだけど、私だけはシザリーリオの考えてることがゼーンぶ判るんだ）。

「ふうんだ、そんな顔したって駄目なものは駄目なんだからね。」

「つーん、と私はそっぽを向いて、それから中身のチェックを再開した。」

「あ、マリー・クレールのラング・ド・シャダ。ほら、美味しそうだよ、シザリーリオ♪」
私はそう言っ、手にした2枚入りの小袋をひらひらシザリーリオに見せてから、ペリペリと袋を開け、そのうちの1枚を一口で頬張った。

「ふぁい、しじゃーりおも」

もぐもぐ口を動かしながら、もう1枚を手にとって、ぐーっ、とシザリーリオの方に突き出したら、シザリーリオは小さな溜息をついてから、私の持つてるラング・ド・シャにぱくついてきた。

「ほらね、偉そうなこと言っても（言ってはいないんだけど。）結局シザリーリオも食べちゃうんだよね。」

うん、でも、そんなシザリーリオ、私はとっても大好き！

あ、でも、まだ何か言いたそうにして私のほうを見る。むー、シザリーオにしてはあきらめが悪いなあ。ちよつと嫌な感じ。

「駄目なものは駄目なの。このくらいのお返ししてやらないと、私の気がおさまらないんだからねっ！」

そう、あんなに怖い目にあつたんだから。

GOTTの中のここ、デクちゃんたち専用の部屋にあるお菓子をもらっちゃうことくらい、なーんてことないでしょ？

いつもここで二人がお茶してることくらい、知ってるもんね。私とシザリーオの力を合わせれば、部屋の中に忍び込むことなんてお茶の子さいさいだし。

シニちゃんだったら絶対美味しいお茶うけ用意してるって思ってたんだ。ふうんだ、デクちゃんのために用意されたお菓子なんて全部食べ尽くしてやるんだから。あ、でもほんとに美味しい。

シザリーオがもぐもぐまじりで耳打ちしてきた。シニちゃん？ うん、すごく恐かったデクちゃんから庇ってくれたシニちゃんには感謝してるけど、それとこれとは別の話。

どのあたりが別なのかは、シザリーオ、聞いてこなかった。そろそろあきらめたみたいだ。

私は安心して、お菓子缶の乗ってた部屋の隅のテーブルの下で、背中を壁にくっつけて缶を抱えて座り込んだ。

シザリーオはもういつかい溜息をついてから、もそもそとテーブルの下に潜り込み、私の隣へと同じように座り込んでくれた。こんなテーブルの下でも、まだ小さい子供の私にとってはとても広い場所なんだけど（そしてこんな場所が私にとってはとても楽しい場所なんだけど）、大きい体をしたシザリーオの、頭の上からテーブルの下の面までは、ほんのちよつとの隙間しか空いてなかった。

ふたつ目のクツキーの袋をシザリーオに渡してから、私はみつつ目の包装を開けていった。そうしながらふと顔を上げる。

私の視線の高さからなら、ここからでも部屋の中がよく見渡せた。

高あい天井をした部屋の中、落ち着いた色のカーテンとか、ところどころに置かれてる観葉植物とか。すごく感じがよくてとても居心地がいい。なんていうか、暖かくて安心できる感じがする。

っていうか、うん、シニちゃんの人柄をそのまま部屋にしたような感じ。絶対シニちゃんがいろいろ整えてるんだなって事はつきりわかる部屋だった。

お菓子はこんなに美味しいのに。

部屋もこんなに居心地がいいのに。

私の口からは、小さな溜息がこぼれた。

それはもちろん、さっきの正面ロビーでの出来事のせいだったけど。

けど、自分が恐い思いをしたからじゃない。

あの人は、シニちゃんのことまで、恐い恐い——冷たい目で睨み付けたのだ。

デクちゃんが怒るかもしれない、っていうのは、なんとなく判つてた。

頭のカターいあの人は、いかにもそういう話が嫌いですってタイプだ。ヒトが地球から宇宙に飛び出して星暦にもなつて何百年って経つて、規範とか道徳とか、ようするに私がさっき口にした男性間の恋愛とかの昔のタブーももう化石並みの古くさくい考えになつてつていうのに、後生大事にそういうものを抱えて頑固に自分の考えを変えようとしないうな。仕事のことしか頭に無いって感じのお堅いひとだから、へたすると女の子を相手に持ち

出してても怒り出したかもしれない。

それを判ってて、あえてシニちゃんを持ち出してからかった私は、ある意味で確信犯。

だって——あんまりにひどいと思った。

大怪我をしたパートナーの様子を一度も見に行かないなんて。

私なんて、シザーリオが重傷を負ったら心配で心配で仕方なくて、メデイカルセンターでずっとカプセルの中のパートナーを見ていないと不安で押しつぶされそうになるのに。

一度も心配せずに平然としていられる、デクちゃんの神経が信じられない。

ひどいと思った。くやしかった。シニちゃんが可哀想だとも思った。

だから怒らせるって知ってて、わざとデクちゃんをからかってやったんだもん。私が怒れるのは仕方ないと思った。あんなに恐い思いをするとまでは思ってたけど。

なのにデクちゃんは、私を庇ったシニちゃんのことまで、恐くて冷たい目で睨み付けた。

違うでしょ？

怒るなら私のことだけを怒ればいいじゃない。

いつもデクちゃんに優しくして、デクちゃんの事を一番大切にしている、そのシニちゃんにどうしてそんな冷たい目を向けられるの？

あのふたりの間にあるもの、デクちゃんの中にあるものは、闇の中の闇のようにその姿も形も傍からはつかめない。

それは私だけでなく、GOTTのESメンバー全員が感じていることなんだと思う。いつか明るいお日さまの下で、闇が綺麗に晴れるときは来るんだろうか。

ちよつと考えてたら哀しくなった。

もつと考えたら落ち込んだ。

でももつと考えたら、なんだか腹が立ってきた。

あーもう、やけ食いでもしてやるっ！

抱えてた缶の中のお菓子の山に手を伸ばそうとしたら、シザーリオに手首を捕まえられた。

むー、いまさらなのにまた邪魔する気？

「何するのよ、シザ」

もう片方の手で口をふさがれた。ものすごく早く。

暴れようとしかけたところで私もようやく気付いて、慌てて身をひそめた。

シユン、と自動ドアの開く音がして、聞きなれたデクちゃんとシニちゃんの足音が部屋へ入ってきた。

5

「デクステラ」

最初にシニちゃんの声が聞こえてきた。ものすごく気遣わしげな声。

何に気を使ってるのかはすぐにわかった。私の視線の先、少し離れた部屋の中央をデクちゃんの歩みを通り過ぎてゆく。

——傍から見てありありとわかるくらいに、いらいらとした足取りだった。

濃灰色のスラックスの影は、私たちから見て窓際寄りのソファ、その向こうに回り、間を

置かずにボスツという荒々しい音が聞こえた。窓のいちばん近くにはテーブルもあるんだけど、そっちの方には行かずにソファに座ったみただった。

首を巡らせて見てみれば、シニちゃんの立ち姿はまだ入口の近くにあった。目の辺りは見えなかったから、シニちゃんがどういう表情をしているのかはよくわからない。

デクちゃんの歩いた道筋をゆっくりと歩き始めたその姿は、でもとても静かで、少なくとも怒ってたりいらしたりなんて事はなさそうだった。

「局長に……失礼ですよ。あんな態度は……」

うわ、デクちゃんたらエクリップス局長の前でもこんなだったの？

「……気を悪くしたのは判りますけど、ヴァイオラも軽い冗談のつもりだったんでしようし、まだ子供なんですから。あまり恐がらせるのも可哀想ですよ」

む、私のこと、お子様扱い？ ちよつと不満だけど、本当に私を心配してくれてるみたいだから見逃してやるー。

デクちゃんからの返事はない。それはものすごく嫌な感じの沈黙だった。すごく居心地悪い。

嫌な空気が立ち込めてひりひりしてきたところで、シザーリオがほんつとーに小さく小さく耳打ちしてきた。

……ここから出るかって？ デクちゃんシニちゃんのいる所から気が付かれずに出れたり

するのかな？

うーん、これまでの特務でも今以上に危なくい状況になったこともあるから大丈夫なのかなあ。

でも。

デクちゃんの傍らあたりに着いたシニちゃんが、小さく溜息をつく音が聞こえた。

それから気を取り直したように、

「……メアリーアンたちとの会合まで時間がありますから、お茶でも入れますね」
って。多分あの、あったかい笑顔で言ってるんだと思う。

デクちゃんは押し黙ったまま、やっぱり何も言わなかった。気を止める様子もなく、シニちゃんがすつと歩き出す。

(いいの、シザーリオ。このままで。)

私はシザーリオにぼそぼそと小さく返事をした。シザーリオが怪訝な表情をする。

実はね、こうなる事、ちよつと期待してたんだ。

デクちゃんとシニちゃんが二人だけ(って二人が思ってる)所を見たら、よく判らない二人の間の何が判るんじゃないかって。

そういう意味のことをシザリーリオに言ったら、シザリーリオ、ものすごく恐い顔をした。

それは滅多に見えないシザリーリオの表情だったから、私はちよつと、ていうかかなり怯おそんでしまった。

な、何よ。さつきデクちゃんに恐い目にあつたばかりなのに、シザリーリオまでそんな顔しなくてもいいじゃない！

それにほら、さつきからのデクちゃんシニちゃんを見ても期待外れみたいだし。結局何もわかんないんでしょ？

あ、でもシニちゃん、今、お茶って言ってた？ お茶菓子……うわあ、今、私の膝の上にあるー。

どうしようかな、なんて私が困ってた時。

シザリーリオが、小さい声だけれども、彼にしては珍しい、ものすごくはっきりとした口調で私に言ってきた。

判らないままの方がいいって事も、世の中にはあるんだよ、ヴァイオラ。

ガチャン、って陶器がぶつかり合う、ものすごく大きい無粋な音が響いてすごくびっくり

した。気付かれたのかと思っただ。

でも音のした方を見てみれば、シニちゃんが驚いた顔をして、すぐ横の、ソファに座ったままの緋い髪の人の方を見ている。その表情は逆光でよく見えない。

手袋に覆われた、男の人にしては細めの手首を、同じ色の手袋を嵌めた大きい手が、遠目からでもわかるくらい強く力を籠めて鷲掴みにしていた。

「……デクステラ？」

シニちゃんのその声は、不意を突かれた、って物語ってるような口調で。

手首を掴んでた手にぐっと力が籠もって、引っ張られたシニちゃんの身体が傾いてソファの影に消えて、どん、って床に倒れた音が聞こえた。

「デクステラ!？」

暴れて縋れ合う音。絶え間なく続く衣擦れの音。

「デクステラ、駄目です、こんな所で……本局の中ですよ!？」

何かを言いつづけようとしたシニちゃんの言葉は塞がれて、不明瞭なくぐもった音が流れた。

頭の中が、真っ白になった。

「……っ……っ……っあ、駄目です、デクステラ……止めっ……！」

……それは完全に、懇願以外のなものでもなかった。

ダン、と床に何かを打ち付ける激しい音がして、

「……や、……っ……っ……やあ、あっ……！」

高い声が響いた。

それは頭の中だけでなんとなく想像していた、甘い声、という、それなんだろうと思う。

でも——哀しかった。とても哀しい響きがした。

いやだ。いやだ。いやだ。聞きたくない。

体が震える。怖い。哀しい。

目を瞑って両耳をふさいで、小さくうずくまっていやいやをしたら、シザーリオが強く抱き締めてくれて、廻した手で私の手の上から大きな手で耳を塞いでくれた。嬉しかった。

でも床の上で揉み合う音とシニちゃんの声はずっと聞こえてきて、私はずっとシザーリ

オの腕の中で震えていた。

シザーリオの腕は、ずっと変わらない強さで私を掴まえてくれていた。

悪い夢のような時間は、いったいどのくらい続いていたのだろう。

永遠に続くみたいに感じられたその時間は、でも気がついたら終わってて。

息を整えようとしているシニちゃんと、微かに響く衣擦れの名残がただだった。

恐る恐る目を開けて、ソファの方を見た。

ソファの影からすうと立ち上がった、身繕いを終えたらしいデクちゃんは、窓に背を向けていて、

——吐き気をもよおしたみたいな顔をしていた。

「……デクステラ、もう時間ですから……すみませんが、先に行って下さい。俺も……後からすぐ行きますから」

デクちゃんの背後の方から聞こえてきたのは、いつもどおりの、暖かいシニちゃんの声で。

デクちゃんは一瞬、まるで逆鱗に触れたような、ものすごく恐い顔をした。

それからは表情を消すと、もうあらゆる感情の消えた滑らかな足取りでゆっくりと扉の方へ向かい、軽い摩擦音を立てて開いた自動のドアから外へと出て行った。

痛いぐらいの静寂がしばらく続いた後、重い足取りでシニちゃんが立ち上がった。

裾の長い、あの綺麗なラインの上着だけを羽織って。……裸足で。

窓からの光が視界の邪魔をするけど、表情はとも静かみたいだった。

戸棚から出したタオルを手にする、もうとっくに沸ききっていたお湯の火を止めて、……濡れタオルを作ってるみたいだった。

それからソファの方に戻ると、その影に消え、身繕いを始めたようだった。

程なくしてソファの影から立ち上がった時には、もういつもの凜としたシニちゃんの姿で。

結局使わなかった食器を片付けて、後始末をして。部屋は綺麗に元通りになった。

もう、さっきの事の証拠なんて、どこにもない。
綺麗さっぱり消えてしまった。

何もない。どこにも見えない。誰にも判らない。

シニちゃんは静かな表情のまま、ソファの向こうから歩き始めた。部屋の扉に向かって。
……それで終わりになるはずだった。

けれど。

シニちゃんはソファの脇を通るところで、ふと歩みを止めて、
……ずるずるとその場に蹲うつむると、ソファの肘掛うでかけに顔を伏せた。

その光景を、私はただ、呆然と見るしかなかった。

「……あなたは……っ……、俺との関係を嫌悪するのに……」
絞り出すような。

「どうして、俺を抱くんですか……………!」
震えの混じった、悲痛な声で。

シザリーオの腕を振り解いた。走った。何も考えられずに。

……気がついたら、私はシニちゃん目の前に立ってた。

呆然と私を見上げる、シニちゃんの姿がそこにあつた。

「…………シニちゃん、私達——」

そこまで言つて、さつき走ってきた方を振り返つた。

仕方ないって感じでテーブルの下から出てきて、ゆっくりこつちに歩いてきてるシザリーオの方を見た。

視線だけで私の決心を読み取ってくれたシザリーオは、しっかりと頷き返してくれた。私はもう一度、シニちゃんの方を振り返つた。まだシニちゃんは呆然としていた。

「シニちゃん、私達ね——」

低く雲の垂れ込めた灰色の空は、見上げるだけで身の切れそうな冷たい夜空にその姿を変えつつあった。

デレイトネル ウェザー・アナウンス
T Vの天気予定では、今日の夜から雪にするということだった。

全大氣的にナノミストで調整され、人工的に整えられた天候が自在に用意できるこの星暦時代になっても、——そしてかつては宗教的な意味を持つ祭日であった日々が、その意味を殆ど失ってしまったこの時代にあっても——、恋人達にとってこの時期の白ホワイト・キリー・ナイト聖夜というものはとても重要らしく、気象管理庁には毎年この日の雪を望む投書が多く寄せられるのだそう。

……と、私に教えてくれた弟は、暗さを増した空をガラスの内側から見上げ、
「ほら、姉さん、降ってきたよ！」

舞い降りてきた白い欠片を見つけると、まるで子供のようにはしゃいで喜んだ。

……白い聖夜が重要な意味を持つのは、どうやら私の可愛い弟にとっても同じであるようだった。

「ドウルダム、あまり空ばかり眺めていると、紅茶が冷めるわよ？」

折角の楽しい休日の日だったのだ。締めくくりのカフェでのお茶を台無しにしては、私達の祖先の格言で言うところの竜頭蛇尾になるではないか。

子供じみた己の行動を振り返ったのか、弟は薄く顔を染めると、長い間空を見上げたままだった首をようやく下ろし、咳払いをひとつしてからミルクピッチャーを手を取った。

人間や人間の習慣というものは、不思議で不可解なものだと思う。

宗教的な意味を失い、さらには行事としての定日の意味も無くなりつつあるのに、それでも毎年、この時期には人も社会も何とは無しに休日を整える。

それはGOTTにおいても、——一般職員、Cフォース、SOメンバー、さらにはESメンバーにおいてすらも例外ではなく、今日この日には6組12人の同僚皆に休暇が与えられているそうだった。

先日メアリーアンとブランに顔を合わせる機会があったが、彼らの情報によると、私達の敵対組織であるはずのヴァージン・ヴァイラスまでもが、今年のこの時期に活動する気配はないのだという。

可笑しなことだと思うが、一年に一度くらいはそんな時期があってもいいのではないだろうか。

そんな時期にあつても恋人の一人も作らず、相変わらず双子の姉の私にべったりな弟を、このままで良いのかとふと思うことが無いでもないけれど。

私達に与えられた時は長いのだから、急いでどうこうする必要もないかと今は思っている。

メアリーアンとブラン。

ふとメリーの心配そうだった顔が脳裏に浮かんだ。

(……でね、デクステラチーフが先にいらつしやつてただけど、シニストラさんが遅れてやつて来て。その顔が、真つ青でね——)

メリーの表情から察するだけでも、その時のシニストラが如何に酷い状況であつたかがよく伝わるような話し振りだった。

(チーフもなんだか恐い顔をしてらつしやつて。大丈夫ですつてシニストラさんは仰るし、とりあえず報告としましてしばらく話してたらだいぶん良くなつたから、とりあえずそのままにしたんだけれど——)

なんかねえ、私達と会う前に局長室にいらつしやつた時も、メルクルデイがお茶を出せるような雰囲気じゃなかつた、つて彼女、言つてたのよねえ——と、外見年齢の上で最年長に当たるといふ意識の所為か、年少者たちを心配する姉のような口ぶりでメリーは首を傾げて

溜息を吐いた。

メリーには当り障りの無い程度に、その日の正面ロビーで在った出来事を話しておいた。差し出がましいこととは思いますが——、と、その日の午後、私たちがGOTT本局へ顔を出した時、受付業務を続けていたリュミエールから話を聞いていたので。

ヴァイオラの口にした冗談は、聞いてみればなるほど、確かにあの潔癖そうな人が腹を立てそうなものだったけれど。

(何かあるといけませんから——)

個人の出来事には口を差し挟まず、普段ならばそういう野卑た噂話のような話を好かない控えめなリュミエールが、あえてその出来事を私達に話した時、彼女はそう断りを入れた。彼女がそう思うのなら、それは根拠の欠けた単なる予測でなく、——その出来事の際に、彼女は何かを感じ取ったのだ。

常人とは異なる能力を持つ者として。
ならば、何を——？

「どうしたのさ、姉さん。暗い顔をして」
ドウルダムの声で我に返った。

明るく心地良い暖色のランプの下、心配そうな顔をこちらに向ける弟の姿がある。

「……いえ、何でもなしわ。ごめんなさい、気を使わせて」

とりあえず微笑を作って、そう返事をしておく。判然としない状況の中で気を回しても無駄に終わるだけだろう。

ドウルダムは再びうつすらと顔を赤くすると、

「……姉さんがそう言う時は、どんなに聞いても何を考えていたか教えてくれないから聞かないけど——姉さんの顔を曇らせる奴は僕が許さないからね」

真つ直ぐこちらを見てそう言い、赤味を増した顔をすいと逸らすと照れ隠しのように紅茶を口にした。

……思わず、笑いが零れる。

「姉さん、何を笑って——」

「ありがとうドウルダム。あなたがいてくれるから大丈夫よ」

弟の顔は、今度こそ本当に真つ赤になった。

少し温もりの消えたカップを手を取って、窓の外に目を向ける。

滅多に無い、本当に気の抜ける休日。

緊急の呼び出しを気にしなくても良い時間が充分に取れた今日は、家と職場のあるコルキアから離れて星都アンキセスにまで足を伸ばした。

休日の最後の時間、中央広場を目の前に望むこのカフェから見える今日の光景は、寒いはずの外気温の中にありながら——とても暖かかった。

聖夜の夜に逢い集う、恋人達の姿。

とつぷりと日は暮れ、広場中央の時計塔からの淡くロマンティックな光が辺りを柔らかく照らす。

広場の石畳にうつすらと積もり始めた雪の寒さも、恋人達が寄り添い手を繋ぐ良い言訳だ。時に醜く争うヒトの姿を常日頃から目にしなければならぬ私にとって、人と人が愛し合い、慈しみ合う姿は無条件で綺麗だと思える。

その、視界の片隅——

「……姉さん。あれ——」

私とほぼ同時に、彼らの姿を見つけたのだろう。
ドウルダムが小さく声を立てる。

俯きがちに佇む、長く蒼い髪の毛——シニストラ。

向かい合つて立ち、その身体に緩く腕を回しているのは、彼より頭ひとつ背の高い——シ
ザーリオだった。

緩やかに寄り添うその距離も雰囲気も、明らかに友人のそれではなくて。

「……まあ」

私が洩らした感嘆の声が入らなかつたのか、弟は少し声を荒げた。

「な——何なんだ。お、男同士でなんて。不潔だよ」

ドウルダムのその言い草に吹き出す。私の弟も、緋色の髪の毛の彼と同じくらい潔癖な思考の

持ち主だったらしい。

文句を言いたげに私を見たドウルダムを、やんわりと窘めた。

「あら、私の弟はそんなに狭量な人だったのかしら？」

——見て御覧なさい、とても綺麗だと思わない？ あの姿は……」

視線を再び外へと遣る。つられたらしいドウルダムも、同じ方向へと目を向けた。

それは本当に、綺麗な光景だった。

はらはらと穏やかに舞う雪の中、壁際に佇む二人。

シニストラの緩く伏せた脛は、淡い光の中で普段の姿よりずっと儂く見える。

ゆるりとシニストラを囲い込むシザリーオの両腕は、決して強引なものではなく、シニストラの背で緩く指先を組んで。

お互いがお互いをいかにも大事そうに優しげにいたわるその姿は、時折、通りすがりに野卑た指笛を投げ掛けているらしい連中のそれが、単純なやつかみであるとはつきり判るほどに、綺麗で、完璧な光景だった。

ドウルダムはもごもごと言葉に詰まり、やがてこほんとひとつ咳払いをすると、

「——まあ、姉さんの言うことなら」

と、中途半端な良い逃れをした。

可愛らしい弟に向かって、一度小さく笑うと、私は再び外のその光景に目を遣った。

嘲弄^{からか}の口笛が飛んできた方向を振り返り、困ったように微笑うシニストラ。

向き直つてシザリーオを見上げ、唇が何かを紡ぐ。

すみません、あなたに嫌な思いをさせて、と、そう言っているようだった。

シザリーオは何も言わず、シニストラのほうを見詰めたまま、ただゆるく頭を振った。

シニストラの顔に、ゆるりと笑顔がほころぶ。

それは綺麗で。

とても綺麗な光景で。

——ぞくりと悪寒がした。

ドウルダムと視線が合う。

弟も、大きく目を見開いて私の方を見ていた。

——それは例えて言うならば、特務の最中に奇襲を受けた時のような感覚。

一体何が？ 何処で？

慌てて外へ目を遣った。

広場の隅の、——目を惹かれずにはいられないほど綺麗な光景。

シニストラがシザーリオの肩に手を置いて、少しだけ背伸びをした。

シザーリオの耳に顔を寄せ、——何かを囁いている。

シザーリオが、大きく目を見張った。

シザーリオの腕からするりと抜け出たシニストラは。

その裡うちに強い強いものを持つている人だけが作ることの出来る、

おそらくは宇宙で一番の、とても綺麗な——綺麗な、綺麗な笑顔を見せた。

舞う雪の中、身を翻して歩き出す。

浅く積もった雪の上に足跡がひとつ、またひとつ刻まれて。

——ぴたりと歩みを止めた。

私の中で、ざあと血の気の落ちる音が聞こえたような気がした。

——デクステラ。

硬く握り締められた拳は、スローモーションのように、真つ直ぐとシニストラの胸に伸び

て。

食い込んでいった。深く。深く。
まるで何の抵抗も無いかのように。

私は思いきり、そちらの方へ手を伸ばした。

……届く訳も無かったけれど。

シニストラの膝が落ちて、上半身が崩れ落ちる。奇妙な形に。

唐突に緊縛は解放されて、時間を取り戻した椅子がけたたましい音を店内に立てて勢よく床に倒れた。私とドウルダムとの二つ分。

伝票をカードと一緒にカウンターの方へ投げ捨てて、出口に向かって走り出した。弟はす

ぐ後に付いて来ている。

店を出るまでのほんの一瞬の間にすら、焼きごてのように脳裏に刻み付けられたさっきの情景が何度も何度もリフレインした。

対峙する、緋色の髪と蒼銀の髪。

雪が舞う。

デクステラの横顔には、表情というものが無かった。

そして私は、一瞬で悟った。——それは間違いなく、底無しなまでに恐ろしく翳い、彼の一番危険な表情だった。

向かい合うシニストラは、ほんの一瞬だけ目を見開いた後、とても静かな……静かな、穏やかな表情をした。

躊躇い無く向けられたデクステラの拳が、シニストラに辿り着くまでの間、……そしてシニストラの身体が崩れ落ちる、その時でさえも。

二人はただ、互いの目だけを見ていた。

叩き付けるように外開きの扉を開いて飛び出た時、遠くのその場所にはもう、出会った足跡がどこにも続かないままに途切れて残されているだけだった。

無音の世界。

小さな廢墟ビルの一室。

窓から漏れ入る外の街灯と、雪の照り返しの光だけの明かりの中、一つに重なる二人の人間の影があった。

いや、息をしてないものを——ヒトと呼べるのかどうか。

上に覆い被さった緋色の髪の毛が丹念に舌を滑らせる、身体の下その身体の胸、心臓のちようど真上辺りには、健全な人間ではありえないはずの窪みがくつきりと付いていた。

乱された服から覗く、皮下に血腫を形成するそれは、紛れも無く肋骨骨折を示唆するもので。

蒼い髪に縁取られた端麗な顔は、蠟のように白かった。……紫色になるほどの血の気ももう残されていないのだ。

目は閉じられたまま。

ゆるく開かれた唇から、こぼりと新しい赤い血があふれ出て、床に流れる蒼い髪を異な色に染めた。

多発肋骨骨折、肺挫傷、血胸による呼吸不全。

もう手も足も動いてはいない。

パートナーの軀の上に凭れていた緋い髪の男は、愛撫の動きを止めると、血の流れる床に手を突き、ゆっくりと上半身を起こした。

その顔は、静かな表情をしている。

重く瞼の閉ざされた白い顔をじっと見詰め、——その頬に手を伸ばした。
乱れた髪、——血に染まった蒼い髪を、柔らかに梳く。

うつすらと、白い顔の瞼が開いた。

薄く覗いた、髪と同じ色の蒼い瞳が、己の上に覆い被さる紫の瞳を捉える。
どちらの視線も、穏やかな静けさだけを帯びていた。

シニストラの唇が、僅か、ほんの僅かに開いた。
デクステラの表情が、その時、初めて揺らいだ。

けれど唇は言葉を紡がないまま、力を失って。

穏やかな視線はふつりと閉じられ、

——再び開く事はなくなつた。

表情の壊れたデクステラは、強く眉根を寄せて顔を歪めると、動かなくなつた。パートナーの軀の上へ顔を埋め、

……そのまま身体を震わせ、力の限り号泣し始めた。

音の無い世界の中。

「——やめろつつつてんだろお!!」

猫のような鋭い目を持つパートナーの声に、意識の集中が乱された。視界が元に戻る。

降り頻る雪が、高速飛行中のガナドールを覆うナノミストシールドに当たっては弾け、暗い夜空の中に小さな光を撒き散らしていた。

「ここで怒鳴ったところで、奴には届かん」

あの情景とそれに続くあの涙を、音だけで聞かされては堪らないというのも判らないではないが。

「るっせえ判り切ってる事わざわざ言うんじやねえよデメエも！　ったく……普段が真面目ぶってる奴はこれだから嫌なんだ。キレたら手に負えねえ。」

深く深く溜息を吐いたアンオウは、それでもその瞳を光らせて能ビシクツラシキ力を続け、二人の音を監視しているようだった。

緊急通信回路からの連絡に、静かな休日ヒトリノヒを乱されたのは日が暮れ切ってしばらく経った時だった。

直ぐに俺と合流したアンオウはねちねちねちねちと文句を言いながらも、その後の行動は素早かった。それほどまでに連絡を寄越したトウイードウルデイたちの様子は切羽詰まって

いた。

とにかく、二人を見つけるのに協力してほしいと。ただそれだけを伝えられた。

聞いた時には何が何だか判らなかつたが、俺たちの遠隔感知の能力で見付けた二人を実際に見ればなるほど、詳細は判らずとも——確かにこれは、最大級の異常事態らしい。

ガナドールに乗って現場に向かつてはいるが、デクステラが《エニウエア》での転送先に選んだらしいその場所は、コルキアからもアンキセスからも遥かに離れた場所で。

惑星大気圏上ではガナドールのイナーシャルブーストもうかつに使えない。周囲に衝撃波をばら撒く訳にもいかない。

アンオウは苛々した様子で、見えない先の目標地点を見据えている。

昨日の心配をするな。死ぬ奴は馬鹿。給料分だけ働け。

それが傭兵時代からの信条のはすのアンオウがこうやって動いているのは、もうひとつの理由が在るようだった。

トウイードウルディたちは、まず真つ先にエクリップス局長に通信回路で事の次第を報告したのだそうだ。

彼女の返事はこうだったらしい。

「——あなた方が手を出す必要はありません。放っておきなさい——」

そう言われたと俺たちに告げた時のトウイドウルデイは、

「——局長は何を考えていらっしやるのかしら。私には皆目見当が付かないわ」
怒りで肩をひどく激しく震わせていた。

「あの女王がそういう台詞を言う時には、たいてい碌でもない事が起きてんだよな」
それがアンオウの言い分だった。

とりあえずもう一度二人の様子を見ようとしたその時、隣のアンオウがちかりと目を光らせた。

「——消えやがった。」

パートナーの言葉に《アメイジング》を発動してさっきの場所を捉えるが、確かにその場には、薄い光を反射している夥しい量の血の海が残されているだけだった。

「《エニウエア》？ 何処に飛んだか判るか、アンオウ？ いや——」

「判る訳ねえだろ。腐っても俺たちESメンバーのトップだ。尾けられるような馬鹿な能力の使い方するかよ」

「それもそうだな」

「て、言いたい所だが——まあシニストラは殆ど死んでたからな、デクステラがパートナーを見殺しにする気がねえんなら、まあ向かう先は大概限られる訳だ。」

手早くコンソールを操作してガナドールを減速させる。横向きに流れていた雪は、次第にその角度と速度を緩くしていった。

「……見殺しにする気がねえんなら、の、話だけどな——」

そう呟いて、ガナドールのナノミストシールドの外に降る雪を見上げていたアンオウは、ややあつてから音高く背後に倒れ込んだ。

「あーあ、無駄足踏んじまったぜ！ もう知らねえ、さつさと帰るぞエイオウ！」

「とか言いつつ、このオープンになっている通信回路は何なんだ」

「俺の知ったことじゃねえよ！ あとはオマエが好きに連絡でも何でもすればいいだろう！」

「私達ね、シニちゃんのためになら、何でもするよ？」

あの時のヴァイオラは、そう俺に言った。

ただ呆然と彼女を見上げていた俺の思考に、その言葉が染み込むまでは幾ばくかの時間を要し、

——そしてその後には、彼女の言葉にひどい違和感を覚えた。

俺の為。

俺の——

……違う。

違うんだよ、ヴァイオラ。

彼女はとても綺麗な子だ。

俺たちの醜い行為を目の当たりにして、……恐かっただろうに、小刻みに震える身体をしやんと力いっぱい伸ばして、涙を浮かべたその純粋な綺麗な瞳で真っ直ぐこちらを見つめている。

パートナーとただ視線だけで、全ての想いを交わすことの出来る、その綺麗な瞳。

……彼女の前に在って、俺の存在はなんと醜いことか――。

違うんだよ。

「違うんだよ、ヴァイオラ……」

あらゆる事象の元凶は、

「俺が、悪いんだ……」

己の望みに醜く執着し続けた、俺自身にあるのだから。

エストランドで初めて出会った時から、緋色の髪を持った彼は、俺にとって何物にも代え難い存在だった。

不屈の精神。鉄壁の意思。不断の努力。

時に善悪の曖昧模糊とした影の任務に就かねばならぬ環境の中にありながら、決して世の穢れを許そうとしない強い紫の瞳。

稀有な存在の彼と逢えたそのチームに於いて、彼のペアとして配されたこと、時が経った後にはキャプテンとなった彼の副官に任じられたこと——それを俺は至上の誇りとし、そしてまた常にその立場に相応しくあろうとして努力し続けた。

望めば何処へでも飛べる、強い翼を持つ彼。

何処へでも行けるはずの彼は、けれど常に俺の傍らに在ってくれた。

困難な任務に立ち向かい、堅い意思を秘めた瞳を真っ直ぐ前へと向け、……時折ふと、横に立つ俺へ、全幅の信頼を寄せた眼差しを投げかけるその姿はいつも、

俺だけに与えてくれる、密やかな優しさを帯びてくれた。

努力し続けた。

その眼差しを失うまいと、この場所を無くすまいと、彼の半身たる身に相応しくあるうと
して、

ただそれだけに、移り変わる日々の全てを注いだ。

俺はただ、

俺の望みはただ、

……ただ、彼の傍に在りたかった。

本当に、ただそれだけだった。

俺の今の能力ワカセキに繋がる何かが発現しだしたのは、俺へと向けてくれる彼のその瞳に翳りが見え始め、今まで与えられ続けてきた温かな笑顔が消え始めた頃だったと思う。

頓とんに厳しい顔が増えてきたその当初、俺は何か彼の意に染まぬ事をしてしまったのか、してしまっているのかと己が身を振り返った。けれど何度考えても心当たりになるような何かも無く。

次には己の努力不足を考ええた。俺が彼の望むパートナーとしての実力に対応しなくなってきたのだと、そう思いもした。訓練の時間を増やし、鍛え、常に上を目指してたゆまぬ努力を怠らぬ己であろうとした。

如何なる俺の努力にも、彼がかつて見せてくれた優しい信頼の表情は戻ることなく、

彼の厳しい表情は加速度的にその時間を増す一方だった。

ぼんやりと脳裏に直感する俺たちの未来。

その頃から俺の第六感めいたものに訴えかけるようになってきた予知の能力は、俺と彼とが共に在る未来がそう明るいものではないことを示唆していた。

一面に暗雲の垂れ込める未来という道の向こう、俺たちの結末は霧の中のように掴み難くて。

努力した。もはやそれが単なる闇雲な行為としてしか自分自身には感じられなくなっている。でも。

俺と彼との未来を覆う、正体の判らないその暗雲が晴れることをただ願って、身体を鍛え、精神を鍛え、——未だ俺の横に在ってくれる彼に、折を見てはその度に微笑いかけた。

障害など何も無く、視線を交わすだけで全てを判り合えていた昔と同じように。

あの昔が再び還る事を願って。

そんな矮小な俺の願いは、もう殆ど俺へ微笑ってくれる事の無くなった彼の硬い表情の前に容易く碎けるだけだったけれども。

そうして、臨界は唐突に訪れた。

彼がキャプテンとして就いて間も無くのエストランドの任務が明けた、張り詰めた日常のほんの僅かな隙間のような時間だった。

掴まれた手首の攀じ上げられそうなほどの痛さに、彼が俺を避け続けてきた理由を知った。強く眉根を歪め、毒杯を飲み干すような苦渋の表情で、それでありながら一切の手加減を

知らない力づくで俺を引き倒し、獣のような愛撫を加えてくる彼が、彼自身にすら制御することの出来ない衝動と欲望にただ駆られているだけなのだと思ひ知らされた。

そして彼自身が、こんな事などを決して望んだりはしていなかったのだということも。

まだ、何もかものが全てが俺たちの間で好きだけ語っていた頃。

彼の言葉を聴いた事がある。

自然の摂理に反する関係など、醜いだけだと。

それは軍の中で時折見られる、男性同士のその手の関係に対する彼の感想で。

いつも前だけを見据え、いかなる世の理不尽にも屈さず、穢れを許さずに己の信念を貫き続ける彼らしい——眩しいほどに潔然とした、とても彼らしい意見だったから、まだ己の醜

い欲望に気づかずには俺は一も二も無くその言葉に首肯したのだけだ。

「誰よりも彼のことを理解したいと望み、彼の横に相応しく在るべくして在っていたかった筈なのに。」

醜い望みを矮小な身に抱え込んでいた俺は、最終的に彼の欲望の前に己が身を屈したのだ。

……愛していた。

自分自身すら気づかぬ間に、彼を愛していた。

だから彼に求められ、最後まで拒否し通す事など、出来る訳が無かったのだ。

彼が駆られた衝動。

その正体は判り切っていた。

彼に求められ、俺の裡から暴かれた衝動と同じだからだ。

制御しようの無い衝動を否応も無く掻き立てられ、際限なく食らい尽したいと想う程に相手の存在を求める、それこそがパートナーのパートナーたる所以であり、理由そのものであるからだ。

けれど嵐のような交合の後、無意識に彼へと伸ばしてしまった手を撥ね除けられ、彼の嫌悪に満ちた表情を向けられて俺は確信した。

俺を抱くことなど、彼自身は望んでいなかったのだと。

ただひたすら、彼自身にすら制御し得なかった衝動に駆られただけだったのだと。

どれだけ求められようと、俺は彼のその衝動をなんとしてでも押し留めるべきだったのだ

と。それが最終的には何にも勝る俺たちの最善の道であった筈なのにと。

そんな事は、痛い程に知っていた筈なのに。

9

俺は彼から離れるべきだったのだ。

彼の裡の彼自身が望まぬ感情に一人で耐えていた彼の、その苦しみに気付けないまま徒に笑顔を向けて彼を煽り続け、俺たちの築いてきた関係を崩壊カクストロワに追い込んだ俺が今となって出来ることはもう、彼から離れる、ただその一点だけだった筈なのだ。

近くに俺がいれば、同じ事が繰り返される。俺も彼も望まぬままに。

彼から離れる。

何度も考えたその選択を、未来を、俺が選べなかったのは、ただただ偏ひとへに俺が抱えていた

醜い望み故だった。

彼の傍らに在りたい、と。

なんて醜く、傲慢な望み。

それでも願った。彼の隣に在ることを。

そうして月日が過ぎて、いつか野蛮な感情が時に褪せるように薄れ、消えて、そして再び自然な形で俺と彼とが並び立つ日が来ればいいと。

……彼が俺の隣の場所に苦しまなくても済むようになってほしいと。
そんな甘い考えを捨てきれずにいた。

相変わらず暗雲に閉ざされたままの未来の予知と、その後何度も繰り返された同じような衝動的な彼の行為とその後の嫌悪の表情に、俺の望みの遠さを思い知らされるだけだったけれども。

ただ一度だけ彼から離れようとした事もあったが結局それも成らなかった。

ずたずたに壊れた関係となった今。

任務に立ち向かう時だけ、俺たちは俺たちでいられた。

並んで共に戦場を駆け、背中を合わせて身を守りあい戦う時間だけが、昔のように何の障害も無くお互いの全てを理解できあえる時間だった。

彼の一挙手一投足に、何も言わずとも彼の考えの全てが手に取れるように理解できた。俺たちの連係行動はいつもこれ以上無いほどに完璧であった。

幾つもの厳しい戦いに仲間たちが一人、また一人と命を落とし、その度に自分の無力を悔やみながら、俺たちのペアだけは目覚ましい成績を重ね続けた。

彼から第七門研究所へ、そしてGOTTのESメンバーへと誘われた時、だから俺はとも——とても嬉しかった。

より一層の巨大な敵へ、困難な任務へと心を決めた彼が、戦うための最良のパートナーとしてただ俺を選んだだけなのだとは知っていても、それこそが何よりも嬉しかった。

彼の傍らに在って彼を苦しめ続ける俺が、未だ何らかにでも彼の役に立てる存在であること。

それが俺の至上の喜びだった。

金の髪と生体暗号化の能力を持つ気高い女性の元、俺たちの任務はより一層困難なものとなった。

何度も死線を超え、黄泉の世界へ片足を踏み入れ、その度に彼女の能力で暗号化した俺の生体情報から「俺」は再生された。

GOTT・ESメンバーの長となっても、彼は変わらず強く潔癖で在った。

彼自身の望まぬ、俺との関係を除いては。

誰もが皆、毅然立つ彼を尊崇の眼差しで見っていた。

俺さえ居なければ、彼は彼自身の心にも憚ることなくその眼差しに相応しい人で在れるのに。

還りたい。

このまま還らなければいい。

再生^{デコイド}を受ける医療^{メデイカ}カプセルの中、俺自身の醜い望みと彼の平穩を願う狭間で俺の心は揺れ続けた。

そして結局は心の決まらぬまま、俺たちの間の複雑な事情を知らぬ他^{ひと}人の手によって此岸の世界へと引き戻されるのだった。

俺が再生を受けている間、彼が俺の様子を見に来ないのは当然のことだった。

彼のパートナーとして相応しい強さを持たない俺など、何の存在意義も無いからだ。

彼が俺の分の仕事までをこなしながら、俺の帰りを同じ場所で待っていてくれる、それだ

けで俺の身には余る程の幸運だった。

カプセルから出て来る度、懲罰のように手酷く抱かれた。それも当然の報いだと思っていた。

彼が責められることなど、思ってもみななかった。

俺を見舞わなかったデクステラを非難するヴァイオラの言葉に、違うんだと叫びたかった。本来彼の隣に居るべきでない俺へ、彼は彼に出来得る最大の配慮をしてくれているのだと。そしてヴァイオラを怯えさせたデクステラにも。違うでしょう？

あなたが責めるべき相手は俺でしよう？

あなたは確かに潔癖症で、ヴァイオラが口にしたその手の冗談を好まない人だけれど。奇しくも言い当てられた俺との関係が初めから存在しなければ、もっと穏やかにヴァイオラの言葉を否定できるはずの優しい人なのだから。

けれど、何が気に障ったのか。

それからずっと機嫌の悪かったデクステラは、局長室から出た後の本局内部の私室で俺を抱いた。

仕事とプライベートのけじめに厳しい人だ。今までどんなに衝動に駆られて俺を抱いてはいても、必ずオフの時間だった。職務中に、——それも本局の中で俺を抱くなどありえないことだった。もう思い出せないくらい昔にただ一度きりあっただけで、今になってありえないことだった。あつてはならないことだった。

何よりも、自分に厳しい彼が後になって苦しむはずのことだった。留めようとした俺の手は、けれどあつさり捻じ伏せられた。

何が気に障ったのか。

それすら俺には判らなかつた。

……彼の何もを理解できないで、何のためのパートナーか。

俺を抱き終えたデクステラは、思った通り、苦渋に満ちた後悔の表情を浮かべた。

……俺にとって、誰よりも大切な彼に、そんな顔をさせて、何のためのパートナーなのか。

あまつさえ。

『私達ね、シニちゃんのためなら、何でもするよ？』

……彼女は俺に非が在るなど、思ってもいなかったのだ。

違う。

違うんだよ。

彼の傍に在りたい、と。

ただただそれだけの、醜い望みに囚われ続けてきた俺だったけれど。もういい、と、ようやくこの時に思えた。

彼に罪を負わせる気など、全く無かったのだから。

ヴァイオラは悪くない。

デクステラが悪いわけでもない。

歪んでいるのは俺の存在だけだった。

目を閉じて心を定めた。

能力を得る前から、そして得た後も、渦を巻くように混沌と意識の中に映っていた俺たちの未来は、ここに来て初めてその翳を晴らし、くつきりと闇の中に描き出されていた。

彼の未来は明るい遠みへ真っ直ぐに伸び、俺の未来は僅か先で綺麗に断絶されていた。

嬉しかった。

そうして俺は、ヴァイオラの優しさと、シザリーオの配慮に付け込んだ。

俺のただ一人のデクステラ。

彼の傍らに在りたい、と。

ずっと長い間、そう願いつづけてきた俺だったけれど。

今はそれ以上に望むことがあった。

俺のただ一人、愛した人に。

デクステラに。

もう二度と、苦しまなくてもいいようになってほしかった。

彼に幸せになってほしかった。

あなたに幸せになってほしかった。デクステラ。

愛しています。

愛しています。

愛しています。

だからどうか。

俺を嫌って、憎んで、軽蔑して、

——「俺」を忘れて下さい。

10

それは綺麗で。
とても綺麗な光景で。

——嫉妬と憎悪で、神経が焼き切れるかと思った。

規律だとか規範だとか、道徳だとか。

時には人の情を踏み躪るだけの下らないそれらに、自分自身が強く縛られているという事を俺は昔からよく知っていた。

いつからそうだったのかなど覚えていない。敢えて言うなら物心付いた時からだったのだろう。

俺の育った星は、多くの酷く貧しい「銀河一般市民」を極一部の「上流市民」が実質的に支配する、お約束のようにありがちな辺境の一惑星だった。

子供たちは皆、義務教育を受ける前から働かされていた。そもそも教育など有りもしなかった。

働けば食える。働かなければ飢える。日々をそれだけが廻っていた生活だった。人々は身を寄せ合うようにして生きていた。

そんな共同体の中では、異端分子など排除されるだけだった。

規律を乱す人間が一人でもいれば、共同体全員の生活が危機に晒される。個性を尊重する余裕など無かった。

俺の居た集落でも同じことだった。

規範を外れる者は容赦なく蔑まれ、即刻共同体を追われた。

それは例えば革命を叫ぶ者であったり、精神を病んだ者であったり、それから同性愛者だったりしたけれど。

共同体の貧しい平穩を僅かでも乱す者は、そうなった瞬間から、共同体にとって何よりも忌避すべき敵と化した。

誰もが皆、そういう人間を侮蔑の目で見、陰に陽に責め立て、そして集落から追い出した。まだ幼かった俺も、何ひとつ疑問を抱くことなく、他の大人たちと同じ侮蔑の視線でそんな人々を見追っていた。

貧しさの中で足掻く俺たちを、地球人たちは高い城から嘲笑って見下ろしていた。

……俺の選んだ道は、そんな世の不平を解消したいと願っての筈だった。世界の矛盾の中で潰されるヒトの尊厳を救いたいと願っての筈だった。

その筈だったのに。

強く在ろうとした。

護りたいと願う全てのものが護れるようになりたいと。

地方の軍組織に入隊した俺は、弛まぬ訓練を続け、身体と精神を鍛え、困難な任務へと自ら進んで立ち向かい、実績を上げ続けた。

そうして戦い続けて、ようやく中央へと——より多くの人々が救えるようになると信じた場所へと辿り就いた。

その場所で、俺はあいつと出逢った。

あいつは俺を強いと言う。

世の穢れを許さない強い人だと微笑って言う。

不屈の精神。鉄壁の意思。不断の努力。

その全てが懂れだと、あなたのように俺もなりたいたいと言って微笑う。

強く前を見据える、その澄んだ瞳で。

何物からも逸らされない、その眼差しで。

荒れ狂う戦場を鞭のように駆け巡る、その姿で。

混沌とした戦況を一喝の元に切り裂く、その声で。

そうして任務の合間、緩く解れた時間にふわりと浮かぶその微笑で。

微笑まれて、信頼されて、

自然に浮かぶ微笑を返して、その強さを信頼して、

共に戦い、共に生き、歩み寄り近付き、酒を酌み交わし、深く理解し合い、戦場の先頭に並び立って、

そうしてようやく気付いたことがある。

欲しい物など昔から持っていないなかった。
ただ願いに近づくための、戦いの場さえあればそれで良かった。

生まれて初めて、その瞳も髪も声も、身体も、精神^{ココロ}も、何もかも全てが欲しいと、そして二度と永遠に手離したくないと、心の底から渴望した。

——シニストラ。

気付いた瞬間、俺にとつての俺の存在は地に墮ちた。

11

軍に於いては珍しいことでもない同性同士の関係。

大抵は性欲を手っ取り早く満たすだけの爛れた関係だった。

何度も目にしてきたそのそれら全てに対し、俺は何ひとつ口出しした訳でもない。

ただ侮蔑の視線で見遣り、上を指すことも無くその場に留まる彼らを後に残し、より高い職籍へと移り続けてきただけだった。

自然の摂理に反する関係など、醜いだけだと。

エストランドに就任した後、まだ自分の想いに気付く前、シニストラにそう洩らした事すらあった。

そうして今になって、気付いたことがある。

人は自分に関わりのない他人事ならば、いくらでも容赦なく蔑むことが出来るのだと。

幼い頃に周囲の大人達と共に見下げ、追い遣った人々。

軍に入ってから幾度となく侮蔑の視線を投げた人間たち。

長い間己の保持してきた規律を侵食し、俺の侮蔑の視線の先に居る存在は、今や他の誰でもない俺自身だった。

吐き気がした。

変わらず俺の横に立ち、尊崇と信頼と、——任務の合間に時折見せる、柔らかく解れた眼差しを俺に向けるシニストラ。

彼は何ひとつ変わってなどいなかった。

ただ俺が自分自身の想いに気がついた瞬間から、状況は一変していた。

シニストラが俺に微笑いかける度に、俺の望みの幻影が頭の中を過る。

その腕を捕らえて。

その軀を引き寄せて。

顎を捉えて、口付けて。軽く。そして深く。

抱き寄せて、髪を梳き、頬に触れ、指を絡め、

…素肌を晒して。

滑らかであろう肌に、指で触れて、唇で触れて。

感じさせて、声を上げさせて。

深く深く、誰も踏み入った事のない深くまで侵食して。

俺だけの事を考えさせて。

そうしてあいつの、何もかも全てを手に入れたいと。

そんな本能の叫びに、理性は身体中で嫌悪感をざわつかせた。

強張る俺の表情に、シニストラは当初ただ純粋な疑問の表情を、…時を重ねてからは、繰り返される落胆と、翳^{かげ}る事のない希望を帯びた微笑を俺に向け続けた。

理由を語らないまま笑わなくなった俺を、シニストラはただの一言たりとも責めはしなかった。

そうしてシニストラの方は、変わらず俺に微笑い続けた。

訳も判らず一方的に閉ざされた関係を、辛いと思った事もあつただろうに。何ひとつ変わらず俺の横に立ち、何ひとつ変わらず俺に向けられ続けるその笑顔。

それでも俺の矮小なプライドは、ただひとつの真実の言葉を語る事を頑なに拒否し続けた。

自分自身にすら、己の想いを認めようとしなかった。

抑圧されて歪んでいく欲望は、さしたる時必要とせず、じきに凶暴な獣と化した。

雪のちらつき始めた寒い夜だった。

仄かに照らされる闇の中、薄い足跡を残しながら歩く俺の脳裡に、昼間見た光景が繰り返して映し出される。

GOTTの局内、エストランド※に与えられたフロアの一角で、疲れた顔をして壁に凭れ佇むシニストラ。

その時の俺とあいつとの間には、幾つもの遮蔽物やかなりの物理的な距離があったはずなのに、その光景はまるであいつの真横に居るかのような鮮明さで俺の目に映っていた。思えばあの頃から、俺の能力エトラテの発端はあったのだろう。

……どんなに俺自身が認めまいとして足搔いても足搔いても、否定しようの無いあいつへの執着心。

今、何処に居るのか。何をしているのか。そういった執着が、常人にない異常な能力として俺の身に現れ始めていた。

疲れた顔をするシニストラの、その理由は嫌というほど良く知っていた。

つい先刻も、シニストラは俺と顔を合わせて俺に笑い掛け、俺は固く強張った沈黙を返しただけだった。

背を壁に当て、俯いて佇むシニストラ。最近のシニストラは俺とそうやって顔を合わせた後、よくそういう表情をして独りで居ることが多くなっていた。

心が痛んだ。出来る事なら直ぐに寄って謝りたかった。……こんなことはもう、こんな想いはもう終わりにしたかった。

だがその直後だった。

通り掛かったテルグム。

沈んだ顔を取り繕おうとするシニストラに、あの持ち前の調子の良さで気安く話し掛け、肩を叩き、……シニストラの髪を掻き上げて長い髪を乱す。

巫山^{ふざ}けて戯れるテルグムに、シニストラはようやく長く硬かった表情を崩して笑った。

俺がエストランドのキャプテンに就任したばかりの時だった。

単なるパートナー同士でいられたそれまでと違い、今は互いの立場も違う。指揮する方とされる方。

同じように指揮される側のテルグム達と、シニストラとの距離が近くなるのは当たり前だ。それでいい。それで俺の醜い摂理に反した想いも消してしまえばいい。

俺自身は普通りに、一欠片も疑うことなく潔癖であった俺に戻ればいい。

理性が繰り返すそんな言葉は、ちりちりと音を立てて体の中を焼いた熱にあっさりと押し流された。

薄く積もった雪の上に歩みを残しながら、足が無意識に向かっている先はあいつの家だった。

けれど何かを求めているわけではなかった。

止めようと思った。帰ろうと思った。自分で自分の歩みをどうしても留めようがないと知った後は、一目顔を見て、それで永久に終わりにしようと思った。

理性がそんな建前を何度も自分に語りかける間、けれど焼き付いたままの熱は体の中でじりじりと痛く熱く燻り続けた。

まだ、何もかものが全てが俺たちの間で好きだけ語っていた頃。

あの笑顔は俺だけのものだったのに。

ただ一人、あいつが心を許す相手は、あいつが心から笑いかける相手は、信頼する相手は、他の誰でもない、この俺だった筈なのに。

もう終わりなのだ。もうそんな時代は終わったのだと。

今日これから、昔の甘く優しくかった記憶を捨てに行くのだと。

そうして俺が、あいつと会う前の昔から在れと望んできた毅然と厳しい自分に戻るのだと。次第に激しくなってきた、降り頻る雪の中でそう考えた。

インターフォンを押した俺の姿を、画面で確認したのか。

一言の返答も口にせずに急いでドアを開けに来たらしかった。

慌しく開かれた扉の向こう、これ以上はないほどに目を見開くシニストラの表情は、

——一瞬の間を置いて、見事な程に鮮やかに、嬉しそうに、

「キャプテン」

おそらくは宇宙で一番の、綺麗な——綺麗な微笑へと綻びた。

それは昼間見た、俺以外へと向けられた笑いとは比べ物にならないそれで。

俺の中の何もかもが、その瞬間に焼き切れた。

俺の物だ。

俺の物だ。

その微笑も、その瞳も、その髪も、その強さも、身体も精神も。

ただの一欠片たりとも他の人間に渡すものか。

欲しい。欲しい。欲しい。

……ただ一人の俺のパートナーの、何もかも全てを。

扉を支える腕を掴み、音高く屋内に踏み入り、纏れ込むようにして玄関先の床に引き倒した。

下になったシニストラは酷く背と腕を打ち付けたはずだったが、それすら俺の意識からは弾き出されていた。

「……キャプテ……？」

押さえつける俺の腕の下で、シニストラは虚を突かれたように呆然としていた。

俺がシャツを引き裂いて、その瞳に焦点が戻る。

「キャプテン!? ……………っ……………」

暴れだした腕を押さえ付け、露になった首筋に噛み付くようにして口付けると、息を詰めて抵抗の動きを激しくした。

「キャプテ…、駄目ですっ…………デクステラ!」

もがく腕が煩わしくて、細い両手首を易々と片手で纏めて振り上げた。

苦痛の聲が漏れる唇を唇で深く塞ぎ、容赦なく食った。

今まで俺たちの間で積み上げてきた事も、自分が今まで忌避し軽蔑してきた行為だという事実も、何もかもを忘れてただ本能のままに犯し続けた。

シニストラが抵抗を続け、俺の蛮行を止めようとしたことすら許せなかった。

おまえの全ては俺の物なのに。

そんな想いだけがただ俺の中を占領し、両手を押さえ付けたまま執拗に弱い所を探り当ては責め苛み、悲鳴とも快樂とも判別の付かない声を上げさせ続けた。

やがて抵抗も弱くなり、鳴りを潜め、それでも容赦せずに深く侵食する俺に震えながら縫ろうとするその手すら許さず、乱暴に両手を拘束したまま何度も何度も犯した。

真っ白に焼け付いたような時間が過ぎ去って、現実には引き戻された俺の前に在ったのは、玄関口で床の上に倒れたまま息も絶え絶えの、軀の隅々まで犯し尽されて小刻みに震えるシニストラの姿で。

自分のしたことの結果に絶句した俺は、

「……………デクステラ……………」

朦朧とする意識で俺に縋ろうと、伸ばされたシニストラの腕を——本能的に思い切り撥ね退けた。

無意識の行動だった。

けれどその後、ほんの——ほんの僅か一瞬だけ見せたシニストラの表情。

俺の拒絶を想像していなかったのだろう。

大きく目を見開いたシニストラは、

——何もかもに絶望した表情をしていた。

ずくりと胸が疼いた。
そして悟った。

俺へと手を伸ばして、せめてもの、行為の後の暖かい抱擁を望んだシニストラ。
彼はきつと、俺の事が嫌いにはなれなかったのだ。

きつと——俺を愛してくれていた。

その彼を、全身で拒絶した俺は、

——取り返しをつかない間違いをしてしまったのだと。

俺が何かを告げようとして口を開いた瞬間、

「……………すみませんでした」

シニストラは微笑った。

震える唇で、笑みの形を作り。

隠し切れない哀しみの色を取り繕って。

——何もかもに絶望した、その微笑。

——違うと叫びたかった。

直ぐにでも膝を折り、地に伏して謝罪したかった。

違うのだと。

傷付けるつもりも嫌うつもりもなかったのだと。

ただ欲しくて、欲しくて、おまえの何もかもを手に入れたくて、おまえの全てを俺のものにしたくて、

——愛していると。

愛してるのだと。

シニストラ。

おまえを愛しているのだと。

それでも俺の無意味な自尊心は、それを口にするのを俺自身に許さなかった。

自然の摂理に反する関係。

長い間己の保持してきた規律を侵食し、俺の侮蔑の視線の先に居る存在は、今や他の誰でもない俺自身だった。

吐き気がした。

けれどもそれ以上に、誰よりも何よりも大切な存在を深く傷付けたのに、なおこの期に及んでも、矮小なプライドに縋る自分に、

——比べ物にならないほどの吐き気を覚えた。

顔を強く歪めた俺は、踵を返してその場を後にした。

逃げ出した。

犯されても傷付けられても、それでも、

この宇宙の何よりも綺麗だと俺の目に映った、シニストラの微笑の前から。

自分のしてしまった蛮行を、何よりも大切なパートナーを深く傷つけた自分を吐き気のするほど憎んだはずなのに、二度目の衝動はいとも容易く訪れた。

理由は単純だ。

あの日以降、GOTT本局で顔を合わせるシニストラは

——それまで以上の、非の打ち所のないほどの完璧さを保っていた。

任務の合間に処理するデスクワークの書類には一寸の齟齬もない。

訓練にあっても、その際だった動きの鮮やかさ、強さは他の隊員が見惚れた程度。

何よりも——他のメンバーに、そして俺に向けて見せるその笑顔が、計算され尽したように破綻のない完璧な微笑だった。

「完璧すぎて不自然だ」

テルグムが不機嫌そうにそうこぼした。

「何かあったのかって訊いたら、何がですかってあのお綺麗な笑いで返しやがった」
「独言とも愚痴ともつかないような口調だった。」

単純な理由だった。

無かった事にされ、そのまま永遠にあいつへ手が届かなくなるのを、俺は恐れたのだ。

「……こんな時間にどうしたんですか、キャプテン？」

微笑を含んだインターフォン越しのその声で、俺は静かに激怒した。

「今すぐ、ここを開ける」

地を這うような低い声が、俺の口から訥々と漏れる。続く沈黙。

「開けないならそれでもいい。叩き壊すだけだからな」

凍った時間が数瞬積み重なったあとで、闇を覗き込むようにゆっくりと——細く、ゆっくりと扉は開かれた。

ドアの向こうの、強張った白い顔。震える腕。

俺はことさら緩慢に足を踏み入れた。

おそらく無意識にだろう、後退った身体の、躊躇いを残す手首を、有無を言わせない程度の強さで掴む。

「またここで引き倒されると、ベッドまで連れて行かれるのと、どっちがいい」

俺は冷たく言い放った。

小刻みに震えるシニストラに、答が返せる筈もない。

掴んだ手首を開放せず、俺は場所だけを知っていた寝室へと歩いていった。

寝室のドアを開け、震える身体をベッドへ押し遣り、その上に覆い被さる。

その一連の動作を、前回と違って時間をかけて進める。

それは決して、シニストラへの思い遣りから出た行為などではない。

まるで肉食獣が、あとは息絶えるだけとなった自分の獲物を、鋭い爪先でいたぶりながら殺すように。

「思い知らしめるように。」

おまえは俺のものなのだ。

この間と同じように両手の自由を許さず、手首を戒めたまま、ベッドの奥深くに埋もれるようにして抱き込んだ時、

シニストラは——夜の底に沈むような、震える吐息を細く長く吐いた。

逃れようのない運命を悟った哀しみが、微かな流れとなって零れていった。

——泣くのだと思った。

きっとシニストラは、次に泣くのだ。

けれども最後まで、その深い色合いの綺麗な着色の瞳が涙に濡れることはついに無かった。

13

あいつが俺から離ればいいのにと願った。

一方的に執着し、厭い、嫌悪し、それでも求め、犯し、傷つけ、——己を激しく憎んだのは、他でもないこの俺なのに。

その責任すらあいつにあると思おうとした。そう思いたかった。

俺を嫌うこともできず、俺から離れることもできないシニストラの、——俺のほうが泣きたくなるような、尊く、一片の穢れもないその綺麗な想いを知っていた。

知っていて、その純白の想いの上に、俺の穢れた罪を負わせようとした。

あいつが俺の横に居れば、否応なく衝動は訪れる。俺もあいつも望まぬままに。

「……………ふ……………」

苦痛を帯びた声が漏れる。

自然の摂理に反した行為であるが故の物理的な痛みを遣り過すには、僅かな快楽に身を委ねてしまうのが一番楽だったろうに、何度回数を重ねてもシニストラは絶対にそうしようとはしなかった。

理由など判っている。

もしシニストラがそうすれば、俺は即座にシニストラを、それまで見下げてきた十把一絡げの連中と同じ軽蔑の対象に入れたに違いなかったからだ。

男の快楽に堕ちる姿など見たくないと俺が思っている、そのことをシニストラはよくよく承知していた。

けれど俺の考えに完璧に沿った、その裏腹で、感じることを拒否するシニストラに俺は激昂する。

もともと手加減など出来ないでいる、その仕打ちをよりいっそう酷くする。

体力を使い果たしているはずの軀が強く撥ね、眉根を寄せて、苦痛の表情で——けれどもその魂が、朦朧と焦点の合わない蒼色の瞳が、それでも依然として決して穢れることのない芯を凜と保っているのが透けて見えた。

こんなにおまえを傷つけて。

ただの一言も、おまえに自分の想いを伝えようとしなくて。

俺はとつくの昔に、俺自身が見下げる対象の中に入ってしまっているのに。

「汚泥の中から天を見上げ、遥か遠くにある白い翼の、何度翼を痛めつけてもいつまでたっても堕ちてこない天使に腹が立った。

「……おまえが悪いんだ」

早く俺のところまで堕ちてくればいいのにと。

その穢れない魂を黒く染め上げるように、耳元で低く囁いた。

俺から離れられないシニストラ。

あいつがそのことに罪悪感を感じている、それを知っていて囁いた。

俺の言葉にびくりと身を震わせたシニストラは。

そのまま、強く目を瞑って——長い間、息を詰めて。

「……………判っています……………」

やがて、目を閉じたままそう細く呟いた。

——何が判っているというのか。

判っているのなら、何故俺の横に居続ける。

判っているのなら、何故、俺の所まで堕ちてこない。

怒りを叩きつけるように深く犯した軀から苦鳴が漏れた。

……俺から離れようとしないうシニストラに、筋違いの抑えきれない恨みを抱いた。
シニストラが俺の横に居るから、こんなことになるのだと。

早く俺から離れればいいのにと。

本気でそう願った。

本気でそう思っていた。

その翌日、立つことさえ辛い筈のシニストラの硬い声を、GOTT本局内のエストランド
司令室のドア越しに聴いた時は、多少ならず驚いた。

けれどもそんな驚きも、俺の声に答えて、真っ青に青褪めた顔で入室してきたシニストラ
の、机越しに差し出したものに掻き消された。

『除隊願』

地球流の古風に形式ばった、封筒の表書きを見た瞬間、俺の体の中から一斉に血の気が引く。

(早く俺から離れればいいのに)

そんな言葉がとてつもなく薄っぺらく思えるほど、激しい感情が俺の中で渦巻いた。自分の手足が可笑しいくらい冷たく感じて、頭と身体の中だけが一瞬で焼きつく。ちりちりとした激痛が全身を駆け巡り、指の先まで痺れた。

立ち上がろうとする自分のその身体が、恐ろしく緩慢にしか動かないことを頭の隅で嘲笑った。

机の上に置かれた封筒を手に取りもせず、僅かに見下ろす位置になったシニストラの顔を激しく見据える。

硬い表情は青褪めながらもまっすぐに俺を見返し、唇を引き締め、その裡の揺るがない意

志を垣間見せていて、俺の威圧に対してただの一寸も怯まなかった。

「……何故だ」

殆ど何も考えられなくなった俺が、押し殺すような声で一言だけ無意識に口にしたのがそんな台詞だった。

滑稽だった。

「何故かなど、聞かずとも判り切っている。」

ほんの何時間か前に、シニストラの純粹な願いを踏み躪って、その望みすら口にしたのは俺自身だったのだから。

シニストラも虚を突かれたのだろう。

「あ、……」

一片の揺るぎも見えなかったその表情が、戸惑いに揺らいで。

「そ、れは」

そう言ったきり、絶句した。

次の瞬間、俺の身体は机の向こうに在った。

戦闘の時と何一つ変わらない強さでシニストラの身体を引き倒す。激しい音がした。

「デクステラ!? GOTITの局内ですよ! ……隣は……………」

揉み合いながら、押し殺した囁き声で、けれど強くシニストラが訴える。

ドアの向こうは他のエストランド隊員たちの控え室だ。今も何人か居る。騒ぎが立てば誰かが直ぐに来るだろう。

シニストラの声を一切無視して服を引き千切った。

「デクステラ、……駄目です! デクステラ!」

俺の耳を打った鋭い掠れ声は、けれど何の役にも立たなかった。

……俺との関係を、——俺の行為を絶つ、最後の機会と思っていたのだろう。

(判っています……………)

あの時に、シニストラの中で結晶した、哀しい決意。

俺から離れる、と。

その結晶は容易に溶けなかった。

音が立つのを気に掛ける様子を見せながら、本気の抵抗を見せる。

今までシニストラがどれだけ俺に甘かったのか、その時に初めて気がついた。

……俺から離れるなど、絶対に許してなるものか。

俺の居ないところで、何処で、誰と生きるつもりだ。

シニストラが俺以外の人間にいつか心を譲り渡すことなど、到底許容できる訳がなかった。

いつまでも屈しようとしないうちに、俺の理性も良心も、なにもかもが弾け飛んだ。

左腕の細い前腕を両手で掴み、ありえない別々の方向へ両手を捻る。

生木の折れるような感触がした。

呆然とした一瞬の間があり、——シニストラは、凄まじい激痛に声にならない声を上げた。音になろうとする苦鳴を、歯を食いしばって抑えようとする。大きく喘いだ。

揉み合いに上がっていたシニストラの体温は、激痛のために一瞬で極限まで冷えた。

奇妙な方向に曲がる左手を庇ってやることもせず、俺はゆっくりと、組み敷く軀を弄っていった。

何もかもが終わった後で、——そう、信頼も愛情すらも、何もかもが終わってしまった後で。

立ち上がった俺は机の上の封筒を手に取り、うつ伏せて震える軀を眺めながら、手の中の紙切れを音高く引き裂いた。何度も。何度も。何度も。

粉々になるまで。

後になって、気がついたことがある。

シニストラは「駄目です」と何度も繰り返したが、「嫌です」とは一度も言わなかったのだ。

俺の傍らにありたいと望んだシニストラ。

その自分自身の望みすら抑え付けて、最後まで俺から離れようとしたシニストラ。

本当に拒否したいと望めば、隣室に他の隊員たちが居たあの時、ただ一言声を上げれば良
いだけだった。

……俺の立場とプライドを無視することが出来たのなら。

たとえ俺から離れたところで、シニストラが他の誰かに心を譲り渡すなど絶対にありえないことは、誰よりも俺が一番良く知っていた筈なのだ。

……そのことに気がついた時、俺は泣くべきだったのだろう。
情のある人間であれば泣くべきことだったのだろうに。

俺の乾ききってしまった神経は、ただの一滴たりと涙を零すこともなかった。

14

……絶対に、離さない。

俺たちの関係が決定的な崩壊に至ったあの出来事の後も、ただの一言さえあいつに本当の

想いも謝罪の言葉も伝えなかった俺の、それでも奥深く、深海の底のような場所にそんな思っただけは静かに沈んでいった。

絶対に離さない。離れられない。

荒れ狂い嘆き惑い怒る感情の下、そんな自分の執着だけは、静かに、哀しみとともにただ静かに俺の悟るところとなった。

誰であれ、いかなる運命にであれ、俺からシニストラを奪い去るものなど絶対に認められなかった。

エストランドの部下たちが一人、また一人と倒れていく中で、シニストラもいつかは必ず飲み込まれるはずの「死」、そんな運命が存在することすら許せなかった。

シニストラを永遠に俺の傍らに留める方法を探した。

(おまえの命を、……心も、身体も、尊厳もだ。……俺に預けてくれないか)
(俺の命なんて、とっくにキャプテンに預けてありますよ)

契約は交わされた。

より一層の巨大な敵へ、困難な任務へ。

そう決めて見合う能力を手に入れるため、おまえとともに第七門研究所^ヘ向かった、その

俺の心は嘘じゃない。

けれどシニストラ、おまえの知らないこともある。

ずたずたに壊れた関係となった今、任務に立ち向かう時だけ、俺たちは俺たちでいられた。並んで共に戦場を駆け、背中を合わせて身を守りあい戦う時間だけが、昔のように何の障害も無くお互いの全てを理解できあえる時間だった。

あいつの一挙手一投足に、何も言わずともあいつの考えの全てが手に取れるように理解できた。俺たちの連係行動はいつもこれ以上無いほどに完璧であった。

何の障害も無く全てを通じ合える、ただその時間だけが、俺の魂の救われる時間だったのだ。

ぎりぎりの任務に挑む死の間際で、深く理解しあい、物理的に離れているはずの精神も身

体もがひとつに溶け合って完璧に調和する。

同じ合う精神と精神、共鳴する身体と身体、任務に立ち向かう時にのみ得られるその感覚その時間だけが、荒み続ける俺の魂を浄化した。

任務をこなせばこなした分だけ、俺もシニストラも強くなる。そして容易に達成しうる任務では、あの深い陶酔は得られない。

麻薬に嵌るように、俺は自ら進んでより困難な任務を求めるようになっていった。

……結果的に、10人のエストランドの部下のうちシニストラを除く9人までが命を落とした、その原因は俺にあると思っっている。

ありとあらゆる罪を背負ってでも、シニストラをこの手から離したくなかったのだ。俺は。

第七門研究所をくぐり、互いの存在に絶対的に依存しあう特殊能力を手に入れて。不死を可能とする生体暗号化の能力を持つ金髪の女性の庇護を得て。

そうしてお膳立てをして、到底不可能と思えるような任務へ向かい、シニストラを容赦なく死の淵へと追い込む。

俺もシニストラも全力を振り絞って窮地を切り抜ける、その間だけ、心身の調和し通じ合う慈悲を得る。

次の任務は、それ以上の困難を伴うものに進んで向かってゆく。

任務を重ねるごとに、シニストラは傷を負い、そのうち大怪我になり、やがて必然的にその時は来た。

実のところ、知らなかった。

コーデイング——魂の量子化、肉体の再生という一連の流れがどういうものなのか。耳にしていただけの再生の様子を、GOTT特殊医療班のガラス越しに見る。

後にも先にも、コーディングの場に立ち会ったのはあの一度だけ。

エクリプス局長が媒介となってシニストラから抽出したエンコード情報が、宙に重なる何十ものナノミストディスプレイ上を凄まじい勢いで流れる。

44本と2本の染色体帯クロモソームバンド、60億塩基対の遺伝子地図ゲノムマップ、150億の脳細胞が織り成す接合体網シナプスネットワーク、量子化されたそれらがディスプレイ上を走る光の下。

医療カプセルの保護液の中で揺れるシニストラは、「死人」としか呼べない姿をしていた。

青白い顔。

ぱっくりと裂けた全身の傷口からひっきりなしに赤黒い血がだらだらと流れ出続け、還流する液が休むことなく血液の濁りを洗い出す。

当然といえば当然だった。

目の前のシニストラは間違いなく、医学的には完全に「死んでいた」のだから。

心拍はとつくの昔に止まっている。

呼吸などある訳がない。

脳波もついさつき、全誘導で平坦フラットになった。エンコードが終了した後のことだ。

勢いを止めることなくディスプレイ上を流れ続けるコーディング情報は、目の前のシニストラの体内のナノマシンが情報に従って微細に至るまで正確に、その全身の細胞を、脳を、記憶を再生デコードしつつあることを示している。

けれどそんなものは視覚として一切映らず、ガラス越しのカプセルの中にあるのは、息絶えたままの青白いシニストラの姿。

脳裡に映し出される光景。

最後の致命傷は、……俺の身をかばってのものだった。

……もしもシニストラが、このまま還ってこなかったら——

シニストラを失う。

シニストラを永遠に失う。

その瞳も髪も声も、身体も、精神^{ココロ}も、俺を想う精神^{ココロ}も、何もかも全てを失う。

そんな当たり前の可能性は、こんなに手の届きそうな近くに容易く転がっていた。

訳も判らず叫びだしそうだった。

嫌だ。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

気が狂うかと思った。

暴発しそうになる激情を寸前で抑え、俺はすぐさまその場を後にした。

そうしてGOTTの俺たちの私室で、——ESメンバーとなった際に与えられ、多くの擦れ違いの苦い時間と、ほんの少しのささやかな幸せの時間を過ごした場所で——、あいつの

コーディング情報が収められたファイルを胸に抱いたまま、何かも判らない何かにただただ祈り続けた。

それ以来、俺は二度とシニストラのコーディングの様子を見に行かなくなつた。

(……そういうとこだけは、好きになれないの。パートナーの事が……大切じゃないの?)
(どーしてシニちゃんの様子、見に行つてあげなかつたの? パートナーが大怪我してるのに心配にならないなんて信じられない!)

エクレール。ヴァイオラ。

俺から言わせれば、おまえたちの方がよっぽど信じられないよ。

どうしてそんなに平然と、無事に還ってこれるかどうかの保証すらないパートナーの姿を眺めていられる？

どうして気が狂わない？

いつも俺は、シニストラがあのカプセルの中に居ると遠くから思うだけでも、恐怖で気がおかしくなりそうだ。

仕事でもして気を逸らさないと、目の前にある暗闇の未来に飲み込まれそうになる。

シニストラを失うかもしれない可能性。

シニストラを永遠に失うかもしれない可能性。

最愛のパートナーを二度とこの手に抱いだけなくなる可能性。

……この世でただ一人の、最愛の半身を。

最愛の。

(愛している)

(愛している)

(愛している、シニストラ)

(だから選んでこい、シニストラ)

そうして気の遠くなるような長い時間、発狂しそうになる精神を必死の思いで抑え付けて、耐えて耐えて、

……無事に還ってきて、俺の姿を認めて、自然に浮かぶあいつの微笑を見るたびに。

快復したばかりの軀を乱暴に扱い、ただただ深くまで犯すしか、この嵐のような激しい想いの遣り場を見つけれなかった。

15

……そんなことを、数え切れなくらい繰り返してきて、もう、どのくらいの時間が経ったのだろう。

先の見えない、俺たちの関係。

こんなことを永遠に繰り返す、など、恐怖以外の何物でもなかったが、
“いつか終わりが来ること”

避け様の無いように見えた、その可能性の方が、俺にとっては遥かに恐怖だった。

薄氷を踏むような感触で、一步一步、けれど確実に、俺たちは——俺は破滅へと近づいて
いた。

終わりの始まりは、そんな風にしてやってきた。

そもそも今回のことは、最初から気に入らなかったのだ。

《エンコード》が必要になる寸前まで傷ついたシニストラ。

おまえが意識を失って治療を受けている間、万が一にもおまえが還ってこなくなるかもしれない可能性、その恐怖に必死で抗い続けた。

けれどシニストラが大怪我を負った、その原因が俺以外にあるということ。

(同僚を庇ったため)

……そんなものが許容出来る筈など、ある訳が無かった。

シニストラの全ては俺のものである筈だと、当然のように思っていた。

あいつを傷つける権利さえも、俺の——俺だけのものであるべきだと。

俺以外のために怪我を負ったシニストラ、その原因となった同僚達、どちらにも激しい怒りを抱いた。

あいつが帰ってこないかもしれない恐怖と、あいつが俺以外のために傷ついたことへの怒

り。

血が凍るような感触と、じりじりと焼け付くような感触の相反するの感情の渦に巻き込まれる。

そんな中、本局のESメンバー専用フロアで、何も知らなげな顔のエクレールがやんわりと俺を責めたことさえも許し難かった。

……誰のパートナーの所為で、シニストラが大怪我を負ったと思っているのか？
おまえがしっかりとしていれば防げた事じゃないのか？

自分のし続けてきた過去も、負うべき責任も全て棚に上げて、眼前の少女を心から憎んだ。
怒りを表情に出さず、無言のままその場を立ち去って遣り過すことだけが、俺に出来た
最大の対処だった。

そうして溜め込まれた負の感情は、何事もなく無事に俺の元へ還ってきたシニストラにす
ぐさま全て叩き付けられた。

俺の付けた傷だけが永遠に残ればいいと、俺だけがおまえを傷つける権利があるのだと教え込むような、乱暴な抱き方をした。

あれ以来、滅多に抗う事のなくなったシニストラが、お願いですから止めて下さいと本気で哀願を入れたほどに。

悲鳴に近い訴えは、見えない傷口から流れ出た血のようにどこまでも甘く、痛く、俺を陶酔させた。

そうして強い酒に似たその濃い味は、結果として、俺の焼け付くような心の飢えと渴きをより一層酷くしただけだった。

(でも今は)

(今だけは、俺の腕の中で)

(今だけは——俺の事だけを考えてくれているだろうか?)

酷い苦痛に苛まれるその瞳に薄く水が満ちる。

けれどそれは、決して涙となつて零される事は無かった。

今までずっと。多分これからも。

永遠に。

快樂も苦痛も、悦びも哀しみも、何もかも感覚が麻痺してゆく中で、ぼんやりと考えた。

………未来を見通す、その綺麗なおまえの深い瞳には——何が映っているのか？
おまえには、この取り返しのがつかなかった俺達の未来が……見えているのか？

それを口に出して問う勇氣すら、俺にはもう無かった。

そうしてあの日、俺たちはGOTT本局へ登庁した。
残酷なほどに高く澄んだ青い空が美しく輝く日だった。

GOTT本局へと歩む道のりで、俺に数歩遅れてシニストラが付いてきている。

おそらく無意識にであろう、本局に入る直前でシニストラは小さく溜息をついた。

まだ軀が辛いのもかもしれない。

……ほんの僅かに、胸がちくりと痛んだ。

長い間シニストラを傷つけて傷つけて、後悔に似たそんな感情はもうずいぶん前から飽和して久しかったが、そういう風に時々思い出したように現れて俺を苛んではその度に小さく俺の胸を軋ませた。

けれどそんな感傷も、GOTT正面玄関のエントランスをくぐった直後に掻き消された。

「シニちゃんてばあんなに綺麗で優しいのに、デクちゃんは何が気に入らな……」

シニストラに数歩先んじて歩いていた俺の耳に入った台詞。

最初に俺の姿に気がついていたシザリーオが、小さなパートナーのケープを引っ張って言葉留めさせる。

……また、その話か。

好きにしろと思った。

正直な話、もうどうでも良かった。

俺とシニストラとの間にあるものだけで、もう十分だった。他の事に構う余裕など無かった。

放っておいてくれればそれで良かったのに。

「シニちゃ〜ん！」

「ヴァイオラ」

小さな少女の活気に溢れた呼びかけに、笑い返して歩みを速めたシニストラ。蒼銀の長い髪を優雅になびかせ、俺の脇を通り過ぎて――。

ちり、と暗い炎が、また俺の身を焼く。

すらりと伸びた背。

涼しげに彩られる微笑。俺以外に向けられた――

……さつきまで、あんなに辛そうにしていた癖に。

どうしておまえは笑えるのか。…どうして俺以外に笑いかけるのか。

エクレール、リュミエール、ヴァイオラ、少し離れた場所にシザーリオ。

他のESメンバーに囲まれるようにして、微笑い合うシニストラ。幸福と平穩をそのまま絵にしたような光景だった。

不意にひやりと背中が冷えて、俺の身体から血の気が下がった。

俺という存在に捕われているシニストラ。

それは俺の執着だけがもたらしたものではなく、シニストラ自身が望んだものでもあった。ことを俺はこれ以上無い程に承知していた。

それこそがパートナーという説明不可能な存在の根幹であると、これからも永遠に変わる筈の無い関係であると当たり前のように思っていた。

……けれども、今、目の前で綺羅綺羅しく交わされる、幸せを凝縮したような光景。凜と笑うシニストラは、とても綺麗で。

その光景の中に、俺は居ない。

……ずっと二人だった。

どんなに傷つけても、一度は離れようとした事があつたとしても、それでもずっと、ただの一時さえ途切れることなく、俺もシニストラも、何時だろうがどんな時だろうが、二人で在る事を望んでいた。

今までずっと、そう望み続けていた。

けれどもそれが、この先変わる事が無いとどうして言い切れる？

シニストラが俺を拒否する理由など、長い年月の間に掃いて捨てるほど降り積もっていた。それがシニストラを心変わりさせることは絶対に無いと、どうして無条件に信じていられる？

あの光景の中に居るシニストラは、あんなにも——幸せそうで。

(シニストラが俺を必要としなくなる時が来るのかもしれない)

足が竦んで、それ以上近づけなかった。

そんな俺に絡んできたのがヴァイオラだった。

ただそれだけの事だったのだ。

……止める。今の俺に関わるな。今は欠片も余裕が無い。

視線だけで威嚇したけれど彼女には無駄だった。こんな時ばかりは無邪気な彼女の性格を心底疎んだ。

あまつさえ。

「デクちゃんとシニちゃんがパートナー以上の深いごカンケイなんて噂、絶対嘘ね！」

そんな台詞を投げられ、それまで燻っていた俺の中の暗い火は一気に油を注がれる。

脳髓が焼け付くように熱くなって、飽和した怒りに、弛緩しきった指先や薄笑いを浮かべた口元がびりびり痺れた。

おまえが今、軽々しく口にしたその関係。

俺もシニストラも、その事で今までどれだけ苦しみ続けてきたと思っっている？

嘘であればどんなに良いかと、何度思い続けてきたか判っているのか？

自分で判っていた。単なる八つ当たりだった。たったさつき、自分が思い当たった可能性を振り払ってしまいたいがための。

彼女を本気で恐がらせた程に当たらなくてもいいはずの怒りだった。

……それを本気以上の切れた怒りに変えたのは、彼女の前ですうと両手を広げ、目の前に鮮やかに立ちはだかった蒼い姿だった。

「デクステラ」

凜と立つ、その姿。

ただ独りで。俺が傍らに居なくとも。

……俺に逆らうつもりなのか。シニストラ。

——俺の手を離れるつもりなのか？

……許さない。

俺の中の暗い炎の中心で、更に赤黒い光が静かに灯り、小さくスパークを始めたのがこの時だった。

17

そうしてその感情のままに、俺はシニストラを抱いた。

戸惑うシニストラの表情、抗う腕、声、……広い広い窓から差し込む眩しいほどの明り。それら全てが、ここがGOTTの本局内だということを嫌になるほど俺に思い知らせる。本局内でシニストラを抱くのは2回目だった。

最初の一度目はあの日だった。あの日。……シニストラが俺からただ一度離れようとした、あの日。

封筒を差し出されたあの時の、身の震えるような恐怖、そして怒り。

細い腕を力任せに捻ったあの時の、俺の手の中でぐしゃりと骨が砕けた、あの感触。回想するだけで胸が押しつぶされそうなほどの吐き気がした。

「デクステラ……止めっ……！」

現実の感覚を求めて拘束する腕に力を込めれば、俺の身体の下で懇願の声が上がった。

大きく見開かれた、淡く深い色の瞳が。

その表情が。

判らないと、何故今ここで抱くのかと、何が俺にそうさせたのか理解できないと、そう雄弁に語っている。

…理解できる訳が無い。俺の歪んだ感情など。

俺に何をされようとも、何を強いられようとも、ただその全てを受け入れて俺の傍らに在ろうとする純白の魂に、俺のこのどす黒い感情が理解できる訳が無い。

いつになったら。

いつになったら。

いつまで待てば、この俺に断罪が与えられるのだろう。

俺がシニストラに続けてきた暴力は許されざる罪だと、俺がシニストラを拘束する権利はもう失われたのだと。

シニストラ。

あとどのくらい酷い目に遭わせれば、おまえからその断罪が下されるのだろうか。

自分ではもう自分自身を、この感情を、制御しきれなくなっていた俺は、いつの間にかその裁きを唯一の救いのように、天からもたらされる福音のように待ち焦がれるようになっていた。

おまえが俺を裁いてくれるのなら。

その時、初めて俺は、膝を折り、地に伏し、頭を垂れて、許しを請い、

——「愛している」と。

そう言えるのではないかと。

けれど全てが終わって、まだ息も絶え絶えのあいつが発したのは。

「……デクステラ、もう時間ですから……すみませんが、先に行つて下さい。俺も…後からすぐ行きますから」

その言葉と、共に在る柔らかい笑顔。

ざあつという音を立てて自分の頭に血が上るのが聞こえた。

——どうして俺を責めないのか。

最初は怒り、そしてあいつに背を向けたその後には泣きたくなった。もう、何処にも救いが無い。そんな気がしていた。

それでも辛うじてメアリーアン達の前では平静を保っていた、その俺の、血の気がさつきとは逆に一気に地の底まで引いたのは、遅れて入室してきたシニストラの表情を目にした瞬間だった。

青褪めて硬い、けれど決意を秘めたその表情は、もう遥かな昔、ただ一度だけ俺から離れ

る決心をして司令室に訪れた、あの時と同じ表情をしていた。

18

シニストラから決定的な何かが来るのを覚悟をしていた最初の数分、その後の数時間、そして続く数日間、結局なにも起こらないまま平凡に過ぎ去った。

正直なところ、拍子抜けを食らった気分だった。けれど心の片隅で、安堵したのも事実だった。

あの時のシニストラが何を決意したのかは結局判らなかつたけれど、その後の俺達の日々の中にあつたのはぎこちないながらも穏やかな日々で。

……こんな風にして。

こんな風に、俺達の間嵐のような関係は徐々に徐々に納まって、やがてそのうち平穏な生活が訪れるのかもしれないと。

……そうあってほしいと。

シニストラの気配を辿って、星都アンキセスに足を踏み入れ。

日が暮れて暗闇となった天から、舞い降り始めた純白の粉雪を目にして、初めて今日が聖夜であることを気がついた。

あいつと俺とが共に在りながら、静かに暮らせる穏やかな日々。

それが実現できるのならそうしたいと思っていた。

シニストラの気配を追いかけ、たまたま会ったような振りをして、夕食の一回でも共にして。普通にたわいのない話をして。

誰も彼もが大切な人と相集い、特別な日として緩やかに時間を暖かく囲むようなこんな日なら、ずっとずっと永い、永い間出来なかったそんなことも可能なのではないかと。

さつきから動かなくなったシニストラの居場所を、能力の気配を頼りに辿りながらそう考えていた。

単なる考え違いかもしれないが。

——呼ばれたような気がしたのだ。その日は。

シニストラに。遠くからでも感じられる、パートナーのその気配に。

そうして裏路地から中央広場へと、急に開けた視界の中。

一瞬で目に焼きついた、その光景。

広場中央の時計塔が照らす淡い光、はらはらと穏やかに舞い降りる白い欠片。

見知った同僚の腕の中に囲い込まれ、緩く抱き締められているその姿。長い蒼い髪。伏せた睫。

緩やかに寄り添うその姿は、明らかに友人のそれではなく。

お互いがお互いをいかにも大事そうに優しげにいたわる、その姿。

……指がびりびりと痺れ始めた。

ちり、ちり、と。

あの俺の中の赤黒い光が、身体を内側から焼き始める。

二人に向けて嘲弄^{から}の口笛が飛ぶ。表向きは男同士だからという理由で、しかし本当のところは単純な羨望とやつかみで。誰の目にも明らかほどに。

そちらの方を振り返り、困ったように微笑うシニストラ。

向き直ってシザリーオを見上げ、唇が言葉を紡ぐ。

(すみません、あなたに嫌な思いをさせて。)

シザリーオは何も言わず、シニストラのほうを見詰めたまま、ただゆるく頭を振った。

……当たり前だ。

誰が。誰が嫌な思いなどするものか。

あんなに。……あんなに綺麗な人を独占する権利を与えられ。

なのに。

シニストラの顔には、ゆるりと笑顔がほころんで。

それは綺麗で。

とても綺麗な光景で。

——嫉妬と憎悪で、神経が焼き切れるかと思った。

その瞬間、自分の精神ココロが引き戻しようの無いところへ落ちていったのを、自分で嫌になるほどはつきりと自覚した。

シニストラがシザーリオの肩に手を置いて、少しだけ背伸びをする。

シザーリオの耳に顔を寄せ、——唇が俺の視線の死角になる、そこで何かを囁いて。

シザーリオが、大きく目を見張った。

シザーリオの腕からするりと抜け出たシニストラは、おそらくは宇宙で一番の、とても綺麗な——綺麗な、綺麗な笑顔を見せた。

その裡うちに強い強い芯を持っているあいつだけが作ることの出来る、その笑顔。

舞う雪の中、身を翻して歩き出す。

俺の方へと。

視線を伏せたまま。けれど真っ直ぐ、俺の方へ。

薄く積もった雪の上に足跡がひとつ、またひとつ刻まれて。

——そうして俺の目の前で、ぴたりと歩みを止めて。

すう、と視線を上げ、俺を見た。

一度軽く見開かれた目は、多分俺の顔があまりに無表情だった所為だろうと思うけれど、すぐにシニストラは静かな、：穏やかな表情を見せた。

断言してもいい。

たとえ他の誰しもが俺の立場だったとしても、あの時のあいつの表情を理解できるのは俺だけだ。

永い永い間傷つけて擦れ違って、だけどあいつと俺との間には他の誰にも割り込めない俺

とあいつだけで出来た世界があった。

それがパートナーの、パートナーたる所以だからだ。どんなに哀しくても。

シニストラの静かな表情は、あいつが何もかも全てを最初から知っていたという事を俺に理解させた。俺がアンキセスに来た事も。この場に居て、さっきの光景を見た事も。

そうして俺をどれだけ深く傷つけることになるかも、最初から知っていたとその瞳で語っていた。

ああ、やっぱりこいつは俺を呼んだんだなと思った。

相手がシザリーオであることに大した意味は無い。

どういうきっかけがあったかは知らないが、シニストラが協力を仰ぐのに都合が良かっただけだとはつきり理解できた。そこに恋情があるかどうかすら疑わしい。

ただ俺に見せることが出来れば、それで良かったのだ。

自分が俺以外の誰かと共に歩む道を選ぶかもしれないと。俺から離れると。

……俺から離れる決断をしたのだ。シニストラは。

それは俺から逃げることを目的としたものではなく。

以前のあのただ一度と同じように。あの時以上に。

俺をこの呪縛から解放するためだと、ただ一人のパートナーの存在に捕われた俺の未来を、もう一度明るい世界の元へ開くためだと。

そのシニストラの精神が、哀しいほどに、痛いほどに良く判った。

そうしてその光景を俺に見せ付けて、俺を深く、深く傷つけることで、

——俺の決断と、そして断罪が下されるのを。

俺に向けられたその表情と、その綺麗な、何処までも透き通った瞳で、シニストラは待っていた。

——シニストラがそうまでして、こころを尽くして俺に向かい合うのなら。
俺はそれに応えるだけだ。

硬く硬く握り締めた拳を、暖かいこころの宿るその心臓の上へ、躊躇い無く伸ばした。
シニストラは一欠片たりとも抵抗しなかった。

ひとつになるかと思うくらいに食い込んだ拳。

崩れ落ちてゆくシニストラの、その視線は、最後の一瞬まで俺を柔らかく見つめていた。

幸福と哀惜とで、気が狂いそうだった。

ここが何処だかも判らない。薄暗い廢墟のビル。

ただただ無意識に、人の気配の無い所へ向かつて能力を使つて辿りついた場所だった。

天井を淡く照らす光は、積もり始めた雪が街灯の光を反射して出来た照明だ。雪が降つた日は、街があかるい。

直接入ってくる街灯の照明は、床の上の光景を切り取つたように照らし出し、暗闇の視界の中、そこだけが鮮やかな色に満たされていた。

長い蒼銀色の、艶やかな稀有の髪。

蠟のような白さの端麗な顔。滑らかな肌。

血の海が、それらの一部分を鮮血の色に染め上げている。

こぼりという軽い音を立てて、形の良い唇から新しい血が溢れ出た。

俺の下で最初激しく咳き込んでいた身体は、今はもう静かだ。

呼吸の音も聞こえない程に。

シニストラとシザーリオの間に、恋情があるかどうかすら疑わしかったけれど。

もしシニストラの何処かに——精神でも身体でも——何かを残したのなら、全部塗り潰したいと思った。

徐々に弱くなり、もう微かになつた鼓動を聴き納めて、俺は手を突いて上半身を浮かせた。

シニストラの瞳はもうずいぶん長い間、閉じたままだ。

手を伸ばして、血に染まつた艶やかな髪をそつと梳いた。

力なく閉ざされていた瞼が、うつすらと開く。

唇が緩やかに動いた。

——何？

聞き取ろうとした言葉は、けれど何も音を紡がないままに、そのまま力を失って。

穏やかな視線はふつりと閉じられ、

——二度と開くことはなくなつた。

——聞こえない。

聞こえないんだよ。

おまえの言葉は、もう俺には届かない。

答など最初から、そして永遠に、ただひとつしかありえなかった。

「否」だ。

シニストラ。

おまえがどんなに俺のことを想い、俺から離れることを決断したとしても。

俺はこうやって力づくでもおまえを引き倒し、死の淵に叩き込み、そうして無理矢理にでも俺の手元へ引きずり戻す。

何度でも。何度でも。何度でも。

“コーディング”

不死を可能とするその技術。

それがあつ限り、俺は永遠におまえへ同じ事を繰り返すのだ。
永遠に。

廃墟中に響く自分の激しい嗚咽を、どこか遠くでの出来事のように聴いていた。

19

真夜中を過ぎて、雪はもうずいぶん降り積もっているようだった。雪は街の雑音を、その中へと取り込んで包み消す。

背後にはガラスの向こうで慌しく動く人の気配があるのに、外気の静寂は壁越しに俺の所まで伝わってきているような気がした。

廊下の壁から手を離し、後ろを振り返って、煌々と強い明りで満たされた特殊医療室の室内に目を遣った。

音はガラスに遮断されてここまで届かないけれども、中の光景は説明がなくても何が行わ

れているか逐一判る光景だった。

部屋の中央、ガラスの医療カプセルの中に浮かぶ身体。ゆっくりと揺れる長い蒼銀の髪。身を包む治療用スーツには何本ものコードが接続され、カプセルの外壁に、そして更に外へと伸びて、各種の医療機器に繋がっていた。

心拍、呼吸、脳波、その他の全ての生体監視モニタは、その音も光も、シニストラのあらゆる生命活動が0である旨しか表示していなかったけれども。

《エンコード》は終了した。無事に。さほど間を置かず脳波は平坦になったから、タイムングとしてはかなりぎりぎりだったのだと思う。

シニストラの生体暗号はエクリップス局長の特殊能力によって抽出され、量子データのコーディング情報として一時的に保存されている。

やがて用意が整えば、無数のナノマシンがシニストラの体内へと入り、コーディング情報に従って細胞の一片一片からシニストラの身体を再生してゆくだろう。

カプセルの中のシニストラの顔色は、これまでのコーディングの時と同じように白すぎる生気のない顔だったが、いつもいつも感じさせられていたあの凍るような喪失の恐怖感をも

う浮かんでこなかった。

「おまえを愛惜^{あいしやく}しみ、気も狂わんばかりに求め、喪失の可能性に怯え、還りをただただ願ってきた、その感情すら麻痺して。」

《エンコード》を終えたエクリップス局長は、去り際、ほんの少しだけ陰りを見せる視線を俺に向けたようだった。

物言いたげなその視線の彼女が、俺たちの間の事情を知っていたのかどうかは知らない。横から感じたその視線を、俺は綺麗に無視した。彼女と俺とは、最後まで会話を交わさないままだった。

特殊医療室のスタッフも俺になにか聞きたげな様子を見せていたが、俺は無言のままの一眼で口を差し挟む余地を握り潰した。

スタッフの僅かな狼狽の後に、デコードへ向けた作業は再開された。

そうして今はこの廊下で、果てしなく繰り返すことになるのだと思いきった室内の光景を、俺は虚ろに眺めている。

再生デコードが開始された。

それを見届け、立ち去ろうとして振り返った出口の方角から、2つの影が飛び込んできたのはその時だった。

ヴァイオラ。

それから、……シザーリオ。

俺より頭ひとつ背の高いその姿を目にし、時計台の灯りに照らされたあの光景が瞬時に脳裡に蘇って、嫉妬交じりの激怒が再び俺の身を焼いた。

けれどそれが俺の表情に出る前に、びっくりと身を振るわせたのは小さなヴァイオラの方だった。

まるで「俺がここに居る」ことが、彼女にとって最悪の報せであるかのように。

ヴァイオラは唐突に、焦燥の表情で走り出した。こちらに向かつて。正確には、特殊医療室に面したガラスの方を指して。

そしてそのままの勢いで、ガラスを叩き割らばかりの勢いで張り付き、必死に中を覗き込む。

彼女の後ろ姿、それからその向こうの、室内の光景。

「平坦……………」

ヴァイオラが呆然と呟いた。

医療カプセルの中の蒼い姿。

空中に幾つも浮かぶナノミストディスプレイ上には、刻一刻とコーディングの進行状況が表示されている。

「…デコード、……………始まつてる……………」

遅れて駆け寄ってきたシザーリオが、彼女の僅かに後ろからシニストラのコーディングの様子を見詰めた。

ヴァイオラは髪とケープが舞い上がるほどの勢いでシザーリオの方へ振り返り、彼女の倍ほどもある背丈の彼を見上げて叫んだ。

「シザーリオ、なんとかならないの!?! 今からでも間に合うでしょ、ね!?!」

……何故。

何故、ヴァイオラのその表情に、絶望が浮かんでいるのか。

カプセルの中のシニストラを見遣っていたシザーリオは、やがて傍らのヴァイオラを見下ろして。

いつもの感情に乏しいあの視線で彼女をじっと見つめて、それから目を伏せ、……ゆっくりと、頭を横に振った。

縫るように見上げていたヴァイオラは、シザーリオを見上げたまましばらく呆然と硬直して。

やがて強く顔を歪めると、シザーリオの服に顔を埋めて——激しく泣き出した。

シザーリオは目を伏せたまま、わずかに身を屈めると、両手で緩やかに彼女を抱き抱えた。

……ずくり、ずくり、と、脳裡が脈打ち始める。

得体の知れない悪寒に俺の身体が震えた。

「……どうい事だ」

この二人は、俺の知らない何かを知っている。
俺に判る事はただひとつ。

恐ろしく悪い予感がするということだけ。

俺の言葉は届いている筈なのに、ますます激しく泣き続けるだけのヴァイオラに苛立ちが弾けた。

「どうい事だ!! 答えろ、ヴァイオラ!!」

力限りの怒声が、俺の口を突いて出た。

一度強く震えてから、俺の方へ振り返ったヴァイオラ。

彼女が目にした俺の形相は、あの日のロビーで彼女を萎縮させたそれを超えるほどの怒気を帯びていただろうに、彼女は涙に濡れた瞳で激しく俺を見返した。

明らかに俺に向けられた、その怒りの表情。

けれどその表情もやがて壊れ、両の瞳に涙が満ちて、ヴァイオラは再びシザリオの腕の中で号泣し始めた。

もう一度、怒鳴りつけようとした衝動に俺が駆られた直後。

「……シニストラのコーディング情報を確認してみろ」

耳を疑った。

シザリオの声だった。

「それが、答の全てだ」

見遣った視線の先で、シザリーオはヴァイオラを緩く抱き留めたまま、静かに俺を見返していた。

20

……コーディング情報が何だというのだ。

たまに喋ったかと思ったらそんな事か。

シザリーオを強く一瞥してから、特殊医療室のドアの方へ向かった。

ここにシニストラを運び込んでからの逐一を見ていたのだ。エンコードの一部始終も。おかしい点は何一つ無かった、いつも通りと何ら変わらない手順で。

そこに異変エトラが紛れ込む余地はどこにも無かった筈だ。

何があったのかは知らないが、シザリーオとヴァイオラの勘違いだ。この時点で俺はそう断じた。

スタッフに告げて、電子ファイルにコピーされたシニストラのコーディング情報を受け取る。

ファイルを開いて、そこに表示されている膨大な量のデータをざらっと眺めた。

これまでも、シニストラがコーディングを受けていた間、喪失の恐怖に怯えながら何度も何度も、もう数え切れないくらい何度も食い入るように見続けてきたデータだ。

脳細胞の接合体網シナスネットワークのデータこそコーディングの度毎に異なるが、それですら基本構造を眺めればいつの物であってもシニストラのデータだと判るし、ましてや身体の基本構造そのものである遺伝子情報などは塩基配列のひとつひとつまで思い出せる程だった。

そうしてその目で、手元の今回のコーディング情報を眺める。今までと何ら変わらない。

常染色体1番α、1番β、2番α……22番βの最後までひとつの誤配列ミスレンジも見当たらない。

けれどその次で、流れていた俺の視線が止まった。

見慣れた塩基配列の、大型の染色体。間違いなくシニストラのものだ。

けれどその隣にいつもあった、頼りない大きさの、しかしヒトの発生に絶対的な影響をもたらす、あの小さな小さな染色体が無かった。

代わりに在るのは、横のものとはほぼ同じ大きさ、同じ形の染色体。
塩基配列を確認したそれは、人類の遺伝子解析が行われた地球^A時代^Dの後期、もつとも一般的配列であると定められた性染色体。

——「標準^{スタンダード}X」と呼ばれてきたそれだった。

染色体の並びの、最後に載っている一文は。

『46, XX』

「……………
ザァルセルニックス
女性型？」

性質の悪い夢を見ているようだった。

何処で何が起きたのか。まるで闇の中のように全く判らなかつた。

《エンコード》は特殊能力なのだ。あの金色の髪の女性の、その能力によって抽出されたコーディング情報は、例え量子の形を取っていても簡単に書き換えられるようなものではない。無理に書き換えようとすればデータに破綻が起こり、それによるデコードは不可能となる。そういう類のものだ。

目の前にあるファイル上のデータはどう見ても完全な状態だった。無理矢理に書き換えたような痕跡も無い。そして事実、再生は既に始まっている。

……このコーディング情報を元にして。

視界の隅できしりと光る、何かが目に残まった。

シザリーリオの手の中で光を反射したそれは、………使用済みの注射器だった。

「シニストラの部屋で見つけた。」

シザーリオが独り言のように呟く。

「……おまえがシニストラを連れ去った後にな」

自分の脈打つ鼓動が煩くて、耳に障る。

「……ナノミストジャマーの一種らしい。血液中に投与すれば、外部からのあらゆるアクセスに対して偽の遺伝子情報を返す。……元は身分詐称に使われる類の裏の流通物らしいが。」

……自分の鼓動が煩くて、何も聞こえない。

聞こえない筈なのに。

「シニストラが、何処でこんな物を手に入れたのか……俺には判らない」

淡々と語り続けるその言葉だけは、あらゆる雑音を超えて俺へ届いていた。

「くだらない事だと思わないか？ たかだか性別の、一つや二つ……」

当たり前だ。こんな。こんな事——。

シニストラは何の為にこんな事をしたのか——

「けどそのくだらない事が、おまえにとって何よりも重要な事だったんだらう？」

俺の周りで、全ての時間が止まった。

「無二の筈のパートナーを傷つけ続けてきて、ここまで絶望させる程には」

……聞こえないと。
聞こえないと思っていた。

「……コーディングの技術によって姿形を変えるだけでも、身体と精神の間には重大な齟齬が起こる。魂が肉体に拒絶反応を起こし、生死を彷徨う。……長くESメンバーに在るおまえなら何度か目にした事があるだろう？」

シニストラの言葉は、俺にはもう聞こえないのだと思っていた。

「それが今回のシニストラは、遺伝子情報の根本から変えられるんだ。例えコーディング情報の上で破綻が無くとも、危険度は桁違いに増す。……無事に還つてこれる保証など、何処にも無い。」

“ ”

シザーリオは小さな溜息を吐いた。それから緩く頭を左右に振った。

「……いや。還ってくるだろうよ。シニストラは強かったから。」

けれど器は、遺伝子情報の異なる他人のものだ。そこに同じ精神が宿る事は在り得ない」

「そんな——」

そんな事は無い。シザーリオの言葉の、否定する余地の無い正しさを知りながら、俺の精神はその正しさを拒否しようと足掻いた。

「シニストラも識っていたよ。ちゃんとな。」

“愛しています。”

「あいつの最後の言葉を聞きたいか？」

あの時。俺の視線の影で、シニストラがシザリーオに囁いた言葉。

「……俺が選んでも、還らなくても。「俺」はもう居ないから」

“だからどうか、”

「あの人を、どうか宜しくお願いします。」

“俺を嫌って、憎んで、軽蔑して、”

——「俺」を忘れて下さい。”

「……迂闊だったよ。……俺はただ単に、シニストラが俺と居る場面をおまえに見せたいだけなのかと思っていた。……それで長い間膠着していた事態が動くのなら、協力しようと思っただ。」

「デクちゃんはシニちゃんが、どうしてそんなことしたか少しでも考えたことあるの!」
ヴァイオラが涙顔のままの顔を上げています。

「シニちゃんはデクちゃんのことを好きだった。ほんとに好きだった。あんな酷いことされて、なのにデクちゃんの所為だなんて少しも思っただけでいいって、本気で思ってた!」
そうして最後の力を振り絞るように、ヴァイオラは叫んだ。

「デクちゃんはシニちゃんのこと、どうして信じてあげられなかったの……!」
それより先の言葉は音にならず、再び火のついたようにヴァイオラは泣きじやくった。

「……………これがおまえの求めた結末だ」

断罪が下される。

「同性でも疎まれても、ただおまえの傍らに在りたいと、それだけを願っていた穢れな

い魂は、もう何処にも居ない」

シニストラの言葉は、もう俺には聞こえないのだと思っていた。ただ、そうじゃない。

「死ぬ訳でもなく、還る場所も無く、時間と空間の狭間にただ消えてゆく」

“傍らに在りたい、と、そう願いつけてきたけれど。今はそれ以上に望むことがあった。”

あなたに幸せになって欲しかった。デクステラ。”

「これで満足か？」

“愛しています。——だから「俺」を忘れてください。デクステラ。”

シニストラの言葉なんて、
あいつの言葉なんて、

最初から、全部俺に届いていたじゃないか……!!

“……さよなら。”

「今すぐ、再生を中止しろ……!!」

駆け出して医療室のドアを開くのもどかしく、力の限りに叫んだ。室内のスタッフ全員が驚いたように俺の方を振り返る。

「すぐに蘇生処置を。コーディングを使わずにだ！」

足音高く医療室内に踏み入りながら、もう何も考えられなくなった思考で、ただそれだけ考えた。シニストラを戻す方法はそれしかない。

「で、すが、それは——」

「無駄だよ」

ドアの辺りに立ったまま、シザリーオが哀悼を込めて呟いた。

「心拍が消え、呼吸が途絶え、脳波が平坦フラットになってどれだけ経過している？ ——それが判らないおまえじゃないだろうに……」

語尾は哀れみの音色で、俺の脳裡に虚ろに響いた。

手の中からコーディング情報のファイルが落ちたのにも気付かず、俺はシニストラの揺れる医療カプセルの方へ緩慢に近づいた。

全員の視線が集中する中、透明なガラスの上へ手を置く。

青白い顔。息絶えたその顔。

治療用スーツの上からでもくつきりと判る、心臓の上の窪み――

激しい眩暈に襲われた。

遠くでシザーリオの声が聞こえる。

「……あらゆる手を封じたんだ。シニストラは。未来の運命を視通したあいつの能力に、間違いの起こる余地は無い。」

瞬間、ざあと意識を押し流す勢いで、シニストラの視た運命が俺の脳裡に映った。

俺の未来は明るい遠みへ真っ直ぐに伸び。

シニストラの未来は、ここで綺麗に断絶されていた。

嬉しそうに微笑んだ、その時のシニストラの表情さえ見えたような気がした。

「シニストラ……………」

違う。違う。違う。

こんな未来は間違いだ。

遠くなる意識の中でそう思った。

「シニストラ……………!!」

間違いに決まってる。
だって。

おまえの居ない俺の未来が、明るい、なんて。
在り得る訳、ないじゃないか。

「愛してる……！！ 愛してるんだ、シニストラ………！！」

カプセルに縋り付いて叫んだ俺の意識は、白くスパークして。
もう何も見えず、何も聞こえなくなつてゆくその中で。

運命が突き破られる瞬間の、割れるような激しい音と、

——小さな、微かな電子音が聞こえた。

廊下を歩いていた足を止めて、私は窓の外の空を見上げた。

とても綺麗な、高い青い空だった。あの日のこのフロア、この場所で、私が呼び止めたデクステラが黙って見ていたのと同じ、澄んだ青い空だった。

あの時話を交わしたあの人は、今日この場に居なかつたけれど。

あの日と同じように、私は地下の特殊医療室に向かって早足に歩き始めた。

「リュミエール」

「医療室の室内へ向いたガラスの前の廊下に佇んでいた私のパートナーは、私の姿を見るとにこりと笑いかけてくれた。なんだ、リュミエールも来てたんだ。みんな考えることは一緒なんだね。」

でもその少し先の人影が誰だか気がつくくと、ちよつと私はびっくりしてしまった。エクリプス。

「エクリプス、あなた、局長のお仕事は大丈夫なの？」

「ちよっとだけね。」

私が歩み寄りながらそう訊いたら、長い時間を共にしてきた私の大切な友人は、そう答えて穏やかに微笑った。

そうして黙ってガラスの方に向き直ったから、私もその隣、リュミエールとエクリップスの間に立って、ガラス越しの室内を眺めた。

半開放のひとつの医療カプセル。

保護液の中で眠るひとつの姿と、液の中へ半分漬かるようにして、その身体を緩く抱き締めているもうひとつの姿。

ふたりの間は、それぞれの治療用スーツから伸びたたくさんの線、たくさんのコードで互いに繋がれている。それはさながら、臍の緒を絡ませて胎内で穏やかに眠る双生児のようだった。

とても綺麗な、コード接続の光景だった。

その場にいた全員が、信じられないと思っただけ。

デクステラの言葉に、もう何時間も平坦のままだったシニストラの脳波が反応したのだ。万が一にもありえそうになかったそれに、デクステラは全ての可能性を賭けた。デクステラ自身とシニストラの意識を直接コードで接続して、アクセスできるかどうかとも判らないシニストラの意識から彼を呼び戻すと。

理論的な技術は可能でも、生死の境でデクステラの意識が巻き込まれれば、シニストラが還ってくるどころかデクステラの意識が永久に戻らなくなる可能性だってある。

逡巡した専門スタッフ達の背中を後押ししたのは、丁度その時に飛び込んできたトウイードウルデイ・トウイードウルダムのパア、それから私とリュミエールのパアだった。

有線接続の準備が整えられるまで、トウイードウルデイとリュミエールが連れてきたドウドーを媒介に仮想空間を展開し、そこでデクステラとシニストラの意識を繋いだ。

リュミエールもそうだし、トウイードウルデイなんかは特に、人の意識、論理空間に割り込むなんて野蛮な事は嫌いだったと思うんだけど、その彼女ですら、デクステラの心からの切願に一言の文句も言わず協力していた。

そうして用意が整えられ、コード接続に切り替わってから、もう何日も過ぎていた。先行きの全然見えなかったそれだったけれど、今日、連絡が入ったのだ。

モニタ上で重なる、ふたつの波形。
シニストラの意識が戻る兆しが見えてきたと。

私には単なる光の波にしか見えないんだけど、それがふたり分のものであることはなんとなく判るし、リュミエールとかがちゃんと電子解析すれば、ふたりの意識が何を想いあっているのか判るんだろうと思う。

もちろん、リュミエールはそんな野暮な事しないけど。

誰が誰にとも無く、ESメンバーの全員に報せは届いたみたいだった。私の来る前にはシザーリオとヴァイオラのペアも、トウイードウルデイとトウイードウルダムペアも来たらしい。

アンオウとエイオウは来てなかったみたいだけど、その代わりになんとアールヴとドヴェルグの二人が来て、アールヴは「潔癖の上に馬鹿が付くからそうなる」って言い捨てていったんでってリュミエールから聞いて、私は思わず笑い転げてしまった。なんだ、あのふたり

もこつそり心配してたんだ。

本当にどうでもいいのなら、アールヴもドヴェルグも最初からこんなところに来たりしない。素直じゃないんだから。

ひとしきり笑ってから、私はガラスの向こうの綺麗なふたつの姿をもう一度眺めた。

私はそつと、隣に立つ金の髪の毛の友人をちよつと見上げて、ふたりのコーディングが始まってからずつと疑問に思ってたことを訊いてみた。

「エクリプス……あなた、シニストラのしてた事を知ってたの？」

こうなるって知ってたの？

それは言葉に出さないままに訊いた。

エクリプスは、ただ黙って微笑っただけだった。

こうなると、この見かけより頑固な友人は決して口を開かないことを知ってたから、私は諦めて、そうして改めてガラスの向こうの光景を見た。

重なり合う、緋色と蒼色の2つの綺麗な姿。

ひたひたと揺れる保護液と、たくさんのコードに埋もれて。

永い永い間、想い合っていたのに擦れ違ってきたふたりは、
有線接続ワイヤードットによって今初めて、
身体カラダの境界すら無い場所で、その想いを交わし合っている。

……愛しているよ……

……

……愛してる。ずっと最初から愛してた。

……デクステラ

意味の無い規範に縛られて、認めることが出来なかった……ずっと。

……

もう間違えない。俺にとって何が大切なものか、よく判ったから。

.....

愛してる。戻ってきてくれて.....ありがとう。本当にありがとう。.....愛してるよ。

.....ずっと。ずっと言いたかった...

.....

.....愛しています。デクステラ。

.....愛してる。

デクステラの腕の中で眠るシニストラ。

保護液の中のその姿の、目元から色合いの違う雫が浮かんだ。

デクステラは目を閉じたまま、夢見るような緩慢さで僅かに動くと、シニストラの目元に唇を寄せた。

その光景にぱっと私の頬へ血が昇ったような気がして、私は両手を頬に当てた。

「もう……見てる方が恥ずかしくなるわね。ね、そう思わない？、リュミエール」
そう言つて、私は隣のリュミエールの方を向いた。

リュミエールは、優しく笑つてた。

反対の隣を振り向いたら、エクリプスも静かに微笑つてた。

だから——私も、もう一度その光景を見て。
そして、微笑つた。

もう少し、あと少しの時間はかかるかもしれないけれど。
ぴたりと並び立ち、名実ともにGOTI最強の二人となった彼らに会える日は、
そう遠くないだろうと思った。

○初出

至天門

<http://dexsini.hisagi.com/>

天に至る門

2003年5月1日～6月28日

Intermission, with No Intermission

2003年4月13日

Intermission, with No Intermission

2003年5月6日～7月28日

隠し事

2003年5月19日～5月25日

休日

2003年5月28日～7月5日

濡れひよこ

2003年9月9日

連星

2003年11月13日～11月19日

Captain

2003年11月26日

門からドアまで - From gates to the door -

2004年2月11日

千年たっても

2005年1月23日

コーデイング

2004年4月26日～2005年1月16日

